



MASTER ARCHIVE
Earth Federation Force
MOBILESUIT
RGM-79 GM

Vol.2



EARTH FEDERATION FORCE



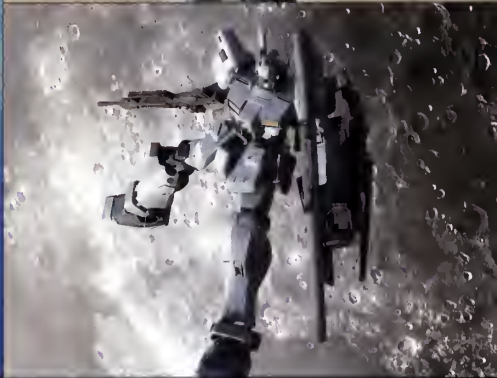
CONTENTS

- 004 MSフォトファイル
MS PhotoFiles
- 012 RGM-79ジム・シリーズの開発と生産
PRODUCTION OF RGM-79 GM SERIES
- 016 RGM-79F (陸戦用ジム)
RGM-79F GM LAND COMBAT TYPE
- 028 RGM-79F (デザート・ジム/装甲強化型ジム)
RGM-79F/FD DESERT GM/ARMORED GM
- 052 RGM-79FP (ジム・ストライカー)
RGM-79FP GM STRIKER
- 062 RGM-79FC (ストライカー・カスタム)
RGM-79FC STRIKER CUSTOM
- 068 RGM-79S (ジム・スパルタン)
RGM-79S GM SPARTAN
- 082 RGM-79N (ジム・カスタム)
RGM-79N GM CUSTOM
- 100 RGM-79Q (ジム・クウェル)
RGM-79Q GM QUEL
- 116 RX-121 ガンダムTR-1 [ヘイズル]
RX-121 GUNDAM TR-1 [HAZEL]
- 122 RGM-79装備武装
ARMAMENTS

■RGM 79N(ジム・カスタム)
(ジム・カスタム)は、一年戦争後に起こった比較的人規模な戦闘の中でも1983年の「デザート戦争」に参加したことで名を知られる。強襲降参艦(アルビオン)所属の部隊も、写真と同型の(ジム・カスタム)を運用していた。

■Text
大編号群 p012-019, p028-035, p052-055, p062-064, p068-071, p079-085, p100-104, p114-119, p122-127
大至 元 p020-027, p036-039, p042-049
解雇人 tp056-061, p065-067, p072-077, p087-095, p105-111
占野英政 (Color Variations)
横村 空 (captions)





■MS-79 GM(ジム・カムフラージュ)は、C.0000年(地球連邦から宇宙にかけて軍事革命が勃発した時代)に開発された。本機は宇宙用基のオーガスト軍の地球を渡る機体であり、ジャブロー・ジオンが、地球を支配するための開発されたMS-79 GM(ジム・カムフラージュ)は、地球と宇宙の両方の中でも、最も上に位置する機体である。地球を渡る機体として、地球と宇宙の両方の中でも、最も上に位置する機体である。地球を渡る機体として、地球と宇宙の両方の中でも、最も上に位置する機体である。













■HGMS-79Q(グリン・カゲル)は当時、新から勢力を伸ばしていた連邦軍の治安維持部隊「ティターンズ」が優先物を主張し、初期ロットのほとんどがコロニーの治安維持を主任務とする部隊に配属された。機体と名のいふやうな「ティターンズカラー」が広く認知されるきっかけとなったのは、本機の配属後である。そのため、本機を以て「ティターンズ」専用機と広く認識される結果となったが、実際には少なくない量が一戦部隊にも配属されている。その縁、ティターンズが次々と新機体を導入すると、急増となった(ジ・カスタム)は後方あるいは一般部隊に回されていった。しるし、機体名機体である本機に関してパイロットたちからの評判は決して良かったのである。



RGM-79ジムシリーズの開発と生産

PRODUCTION OF RGM-79 GM SERIES

RGM-79(ジム)。多数のプラモデル機を持つこのモビルスーツ(以下、MS)が、「一年戦争」において、地球連邦軍の一大主力機戦を成功に導く原動力となったことは、否定しようのない事実といえよう。

その開発と生産は、ルナツーやジャブローといった各地の兵器工廠で同時並行的に進められ、随時、細かなバージョンアップが繰り返されたため、終戦に至るまでに無数のバリエーションが生み出されることとなった。また、矢張り早に前線から送られてくる要望に対応しようと、様々な局地戦用機や特殊任務機が開発されたことで、1年にも満たない短期間のうちに数十種を超えるファミリー機が実用化されたともわれている。これら



の機体の中に、複数の官立兵器開発工廠と民間企業とが、陸海空宙の四番から寄せられる無数の発注に対応しようとした結果、似たコンセプトの機体が並立する事態も、ままあった。中には世の軍事評論家から、「まったくの悪戯」と酷評されるような作物さえ存在しているが、これは戦中の混乱した状況なればこそいえるかもしれない。さらに前線において試みられた独自の改修までを含めようとするれば、ますます総数が増えていくこととなる。一言で「ジム・シリーズ」といっても、その範囲に含まれる機体は星の数ほど存在し、全容を把握することは極めて難しいといわざるを得ない。

本書では、FSS(Federation Survey Service)を始める

公的機関が提供する一級の資料に加え、元軍関係者や軍産企業体出身者の証言を元に、連邦製MSの根幹を成すジム・シリーズのバリエーション機について、一部をピックアップして解説を行う。その方法論として、本書ではふたつの切り口からジム・シリーズを分類し、断面を窺ってみたい。

ひとつは「戦中開発の増加装甲による改修プラン」、もうひとつが「戦後開発の後継機種」である。そのどちらもがジム・シリーズの性能向上を目指しながらも、異なるコンセプトで目的を達しようとしており、実に興味深い。それぞれの手法で開発されたファミリー機の実例を挙げて紹介しつつ、後のMS開発史に与えた影響を含めて考察を試みるものである。



■重装甲化への道

地球連邦軍による軍用MS開発は、開戦前後にジオン公国軍が主力MSとして運用していたMS-05〈ザクI〉やMS-06〈ザクII〉を仮想敵として進められていた。これらの機体は、100mmないし120mm口径のマシンガンをも主兵装としていたため、当然のことながらRXシリーズの開発においては、それらの威力を念頭とした設計がなされていた。特にRX-77〈ガンキャノン〉ではルナチタニウム合金を使った上で重装甲化が図られている。

RGM-79の基礎設計は、先行して試作が進められていたRX-78〈ガンダム〉に基本的には準じていたものの、生産効率を高めるために仕様変更された箇所も少なくない。装甲材がルナチタニウム合金から、チタン系合金に変更されたことも、そのひとつである。これは、より安価で加工も容易な装甲材を採用す

ることで、さらに生産性を高めようとする狙いがあったが、逆説的にいえば耐弾性に劣るチタン系合金でも、公国軍の120mm弾に対しては、充分に対応可能と考えていたともいえるだろう(※)。事実、ごく初期のジム・ファミリー機は、公国軍のMS-06に対して、まず互角以上といったよい戦いぶりを見せている。これは、搭乗員の練度不足を勘案すれば、驚異的な結果とさえいえるだろう。

しかしながら、ジム・シリーズが突如投入されてしばらくすると、公国軍側も当然のことながら対策を講じ始めることとなる。例えば、本来は対艦用火器であった280mmバズーカを、対MS戦に用い始めたのも、その一例といえるだろう。さらにMS-07〈グフ〉やMS-09〈ドム〉といった陸戦用重MSに対しては、液体



■F/D市は主として砂漠、荒地の多いアフリカ戦線に投入された。写真上のみRGM-79F/D(装甲強化型ジム)であるが、一見するとRGM-79R(アサルト・ジム)と見分けがつかない。このことが、これらの機体の認識や敵視、また砲式番号の配列に混乱を生じる一因となったといえるだろう。

※ジム・ファミリーの装甲材
ジャブロー工廠で生産された陸戦用の先行量産機(GI型など、ごく一部の機体にはルナ・チタニウム合金が用いられた。しかし、本格的な量産仕様となったA型やB型といった機体からは、チタン系合金が採用されている。



炸薬式の大口徑バズーカ砲、通称「ジャイアントバズ」を装備させるなど、火力の増強を推進。これらの火力に優れた重MSの配備が進むにつれ、連邦軍のMS部隊におけるキルレシオ(撃墜対被撃墜比率)は、悪化の一途を辿ることとなる。

こうした状況下で、ベルファスト工廠などの一部生産施設では、暫定処置として材質をチタン系合金から変更することなく、装甲厚のみを増した重装甲仕様機の生産に踏み切ることとなる。すでにRX-77シリーズで得られたデータを基にCAD=CAMシステムでのシミュレートが行われ、対応は可能となっていたのだ。

だが、当然ではあるが、装甲厚を増せば重量も増加する。駆動系や推進装置に対し、RX-78をベースに甘く見積もられた抜本的な改良を加えないまま行われた重装甲化は、機動性の低下を招き、前線の将兵からは酷評を受けてしまう。簡易重装甲仕様機ともいえる、この仕様機は、早々に生産中止に追い込まれたのも、無理からぬことであった。

RGM-79F

陸戦用ジム



■ RGM-79F (陸戦用ジム)

これはRGM-79Fの標準的なカラーリングである。ロシア方面や森林地帯などにおける迷彩効果を意識した配色となっている。

単純に装甲厚を増しただけの簡易重装甲仕様機が、劣悪な運動性を問題視され早々に姿を消した一方で、これに続く形で、一歩進んだ重装甲仕様の機体が生み出されることになる。

ヨーロップ戦線に展開していた陸軍系のMS部隊から運用データを吸い上げたベルファスト工廠の技術陣は、被弾箇所を徹底的に分析。その結果、頭部、胸部、肩部などの機体上半身の被弾率が、異様に高いことを突き止めた。これは機体の下半身が樹木や建造物によって遮られる一方で、上半身を遮る物が少ないという、ヨーロップ戦線特有の地形が影響しているものと推測された。

そこで技術陣は、敵弾が集中しやすい上半身のうち、コクピットが置かれた胸部前面や、センサー類が集中する頭部ユニット、さらに肩関節周りに対して、ピンポイントで装甲を増強した機体をつくり上げることとなる。

RGM-79Fの型式が与えられたこの機体は、特にコクピット周辺の防弾処理が入念に行われているほか、携行装備に対しても工夫が施されている。市街地や森林地帯でも取り回しの良好な小型シールドを採用したのだ。さらに重量増に対応するため、

推進装置も増強。6発のノズルを有する大出力ランドセルを装備し、機体の総推力を増したのである。以上のような措置は、公国軍機の120mm弾はもちろんそれ以上の実体弾に対して有効であり、パイロットの生存率も目に見えて向上したという。

もちろん、F型が投入されたのが「オデッサ作戦」以後であり、すでにヨーロップにおける公国軍勢力が減退していたことも、生産率の向上に影響してはいただろう。当地に配備されたMS-09の数は極めて少なく、あくまで主力は火力的に劣るMS-06やMS-07が中心であったため(しかも、多くの場合、まともな整備を受けていなかった)。新鋭機への機種転換が進んでいたアフリカ戦線などに比べれば、F型が投入されたヨーロップ戦線は、連邦側にとって有利な状況といえたのである。

とはいえ、統計データを基に絞った装甲強化を行いつつ、ランドセルの主推進器や膝部の補助推進器を増強し、運動性の低下を防ぐというコンセプトは、見事に成功していたといえる。以降に開発された重装甲仕様の機体も、多くが同様の設計を採用している点からも、本機のコンセプトの正しさを証明しているといえるだろう。

Spec

諸元

型式 RGM-79F
機頂高: 18.0m
重量: 48.2t
全備重量: 61.5t
ジェネレーター出力: 1,250kw
スラスター推力: 53,800kg
装甲材質: チタン・セラミック複合材
武装 専用ビーム・スプレーガン
ビーム・サーベル
60mm Vulcan×2
レール・キャノン



RGM-79F 陸戦用ジム

RGM-79F GM LAND COMBAT TYPE



陸戦用ジム

RGM-79F GM LAND COMBAT TYPE



■RGM-79F (機体用ジム)
#037 ミルデンホール基地 第2哨戒部隊

オデッサ作戦時、欧州ミルデンホール基地は連邦軍の補給拠点のひとつとなっており、MSによる前線補給部隊が置かれた。第2哨戒部隊にはF型G機が配備されて警戒に当たり、この部隊はオデッサ作戦の主要任務には参加しなかったが、夜間前線中に偵察機のドップ2機を撃墜するという小さな戦果を残している。

RGM-79Fの運用実績

前述の通り、F型はヨーロップ戦線からの要望にしがたい開発された機体であり、ベルファスト工廠でロールアウトした第1ロットの機体は、すべてヨーロップ方面軍に送られている。受領したのは、いずれも陸軍系のMS部隊であり、撤退に次ぐ撤退を続ける公国軍部隊の追撃任務に投入された。

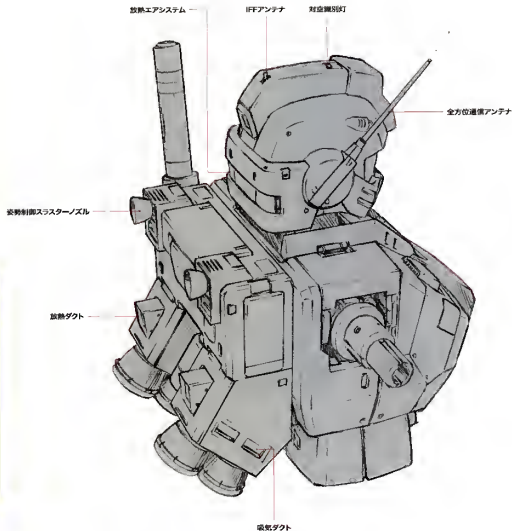
特にロシア方面に進軍した部隊における活躍はめざましく、敗走する敵軍の追撃戦にて、多大な戦果を記録している。キエフ攻略戦にこそ配備が間に合わなかったが、激戦となったこの戦いで多くの[G]型を損耗していた前線部隊にとって、ミデア輸送機から降るされたF型は光り輝いて見えたという。

その後も、ロシア方面前線部隊の将兵と共に極寒の大地を東へと駆け抜けたF型は、ヴォルゴグラードの制圧を手始めに、広大なロシアの森林地帯での残党狩りでも活躍。ガンバリー型輸送機を用いた電撃的侵襲作戦で撃墜数を荒稼ぎしたデービッド・タッカー中尉をはじめ、幾人ものエースパイロットの誕生に貢献している。

何より背の高い樹木が多い東欧地域は、上半身の重装甲化

を推し進めたF型にとって、まさしく打ってつけの戦地であり、被弾した場合でもパイロットの生存率は極めて高かった。こうした“生過者”は、得てして命の恩人である愛機を高く評価するものであり、F型開発に従事したベルファスト工廠の技術陣には、多くの感謝状が前線から届けられたという逸話が残されている。

また、本機と併せて実験的に配備された試作型のレールキャノンも、総じて好評であったようだ。冬期に入り厳しさを増す寒さの中で、動作不良を起こすことが多かったビーム・スプレーガンに代わり、火力の要として重宝したためである。中長距離用の支援火器として作られたレールキャノンは、旧世代の海上艦艇用の艦載砲をMS用換装武装として再設計したものであり、いわゆる“枯れた技術”の産物であった。ゆえに威力的にはビーム兵器に及ばぬものの、兵器としての信頼性に優れ、高い稼働率を示したようである。とはいえ、この種の兵器は、より火力に優れたビーム兵器の技術的成熟度が増すにつれ、次第にその姿を消してゆくことになる。



RGM-79Fの仕様

本機の基本コンセプトは、戦域の地勢的独自性と戦況の変化に効果的な対応をするため、前線からの要望を吸い上げてこれに応える形の局地戦用機的な改修を施すことであったとされる。ヨーロッパ戦線における当時の主力機RGM-79Bをベースとし、おもに装甲外殻、とりわけ上半身に集中的な設計変更を行い、要求を満たす性能の機種として生産された。次期主力機に組み込む予定の各種駆動系、制動系機器を事情の許す限り導入しハイブリッド化されたという改修機は、大規模な生産設備を有さないベルファスト工廠で一機のカラライズ改造機として生み出されたものともいえるが、上半身を主体に装甲を強化するという対処法がヨーロッパでの戦況にマッチし、この機種は単なる現地改造機に止まらないものとして評価を受け、陸軍の地上戦用機RGM-79[G]の後継に位置する機種としてRGM-79Fの型式番号を付与されることとなった。

■RGM-79B《陸戦用ジム》#029
ヨーロッパ方面軍第2大隊 第03MS小隊
U.C.0079年11月下旬、オデッサ作戦終了後の欧州方面公国軍勢力は急速に支配力を減したが、また市街地を占領し続けていた公国軍部隊は少なからず残存しており、連邦軍はMSの部隊を用いてその奪還・制圧に当たった。4機のRGM-79Bで編成された第03MS小隊は市街戦を想定したカラーリングが施されている。同隊は3つの地方都市制圧の任務に参加したが、最終的に2機のF型が行動不能となった時点で任務を終えた。



頭部ユニット

頭部躯体内に搭載された感受機器や通信用機材は、本質的にRGM-79Bのそれと変化はない。生産が違っていたが、地球圏での運用に最適化されたD型搭載用の各種感受機器がレトロフィットされていくが、基本的な内容についてはA/B型のそれと大きな変更はなかったようである。ただ、感受機材のレイアウトは若干変更が加えられており、グレイズシールド背後に設置される光学レンズカメラは、オリジナルよりも下に配置されている(D型に近い)。

地上戦装備として外観上、顕著な差違を見いだせる部分は、通信用のポールアンテナが「耳装甲」に標準設置されたところである。ミノフスキー粒子散布下における通信障害は周知のことであるが、地球上におけるミノフスキー粒子の疎開密度は、宇宙空間のそれと比べて均質ではなかった。これは大気の日ナミックな動きやエアロゾルの分布、大気に含まれるイオンの存在や天候の変化(雷雨や嵐)によって生じるプラズマの影響などで大きく左右され、一定の期間に渡って十分な濃度状態を維持することは困難であったとされる。このためミノフスキー散布下で

あっても従来通りに電磁波による通信が可能な地域が生じ、それも時々刻々と変移するような状況であった。これまで機体に標準搭載されてきた高指向性の近距離双方向通信機材に加え、より汎用性の高い遠距離通信用機材を追加装備することが決定された。MS相互のみならず、地上軍や空軍、前線基地との全方位性通信をより有効にするためには、顔面部のグレイズシールド越しに送受信を行うよりも、高性能のアンテナを立てた方が効率がよいことは自明で、その結果、F型では頭部へのポールアンテナ導入が決定されたのである。

頭部内の機材搭載スペースを減じることなく躯体外殻装甲厚を肥厚することは物理的に困難で、さらに高出力無段階チャネル送受信装置や専用ジェネレーター、通信暗号化システムなどをパッケージした機材を追加収納することが決定されたため、頭部内空間拡張を目的とした形状の見直しが行われた。その中でB型頭部を最小限の改修で流用する方策として採用されたのが、後頭部の装甲パネルと置き換えるような形状のスポンソン(張り出し)を装備することであった。外殻装甲を外側に向けてあ

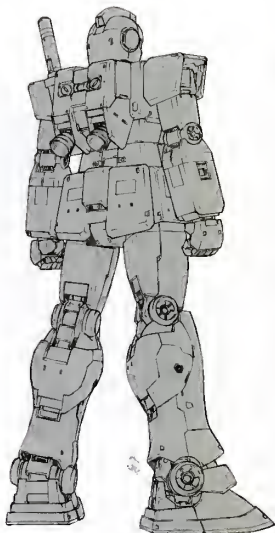
あらかじめ肥厚させることは、生産設備全体に渡る適応改修が必要となるため、装甲の肥厚は既成の頭部外殻装甲に増加装甲をシームレスで外張りするという対処法がとられ、平均で10mm増加しているが、これは外観から察し難いことは難しい。全領域汎用MSではなく地上戦専用として改修された機体であるから宇宙用装備は不要で、頭部搭載バルカン砲の排熱熱関連機材は完全に撤去され、代わりに空気を媒体にした熱交換器が装備された。吸気はファンを多数並べた強制吸気装置が、頭部と頭部の隙間に設置され、さらに熱交換システムの効果を確実なものにするため、吸入外気を冷却する中間冷却装置(構造的にはエアコンディショナーと同等の機材)が搭載され、電子機器ならびに搭載バルカン砲の冷却効率化を高めている。

結果として増損にともなう重量増加の差し引きは、頭部支持構造の許容値内に収まったものの、あわよくばと目論んでいたバルカン砲弾の装弾数増は見送られたという。一部機体では中間冷却装置を搭載せず、その重量分だけ装弾数を増した例もあったというが、これは頭部の冷却効果が十分に確保できる大気温度が保証される寒冷地運用機に限られていた。

連邦軍が大気圏内における制空権を局地的にせよ回復し始めるにともない、戦闘空域周辺でミテア輸送機を改造した特殊任務航空機が通信の中継を行うようになったことで、ボールアンテナを実装したことの有効性はさらに認められるようになる。

各種感覚、通信装置の電磁波透過性保護装甲である顔面のグレイズシールドについても、その厚みを増して防御効果を向上させる試みがなされたが、この透明装甲は可視光の屈折を限りなくゼロに近づけるため、微妙な曲率と肉厚の変化を制御して完成されているため、むやみに増厚すればいいという類いの対処が不可能で、設計はコンピューターが窮尽に行ったとしても、それを生産ラインに載せるための設備改変が大がかりになるため、この部分の肥厚化は見送られた。

頭部正面、すなわち顔面下の「口」に相当する部分の装甲は、従来ある装甲の上から15mm厚の装甲ユニットを装着することとし、突にある精密機器の保護効果を向上させている。また頬部分(デーク・ピース)は完全な別体方式で「耳装甲」から「口装甲」へとブリッジする形状となり、平行する2本のくぼみが特徴となっている。この2本の凹モールドは、いわゆる補強用ビードではなく排気用のアウトレットで、頭部内を循環した冷却用空気の排出孔のひとつとして機能する(これは後頭部スポンソンにある凹も同様である)。凹部表面には長槽内の細孔が無数に開けられており、装甲を兼ねたデーク・ピース内を通して機外に排出される。また全領域汎用MSとして設計された「耳装甲」の排熱用ポートは、排気システムの根本的な改変により不要となったため、全面を覆う円盤台形のシンプルな装甲へと変化した。この部分の内部には、バルカン砲発射煙や冷却排気を排気孔に送り出すためのシロッコファンが内蔵されている。

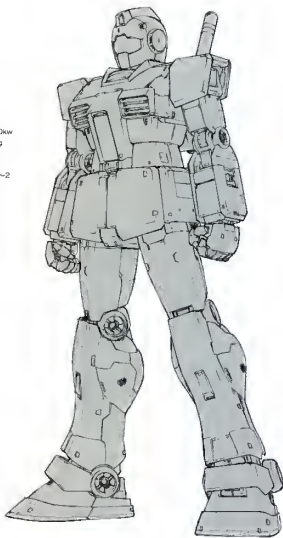


頭頂部のメイン・カメラ収納フェーリングに関しては若干の外殻増厚が図られているが、前方カメラのフェーリングについては特に被弾率が高いことから、フェーリングにオーバーラップする形で増加装甲を被せ、保護用のグレイズシールドも、ここは平板状なので増厚されている。装甲は顔面に向けてそのまま延び、顔面のグレイズシールド上端部を覆うような形に作られた。増加装甲前下端、及びメイン・カメラ用グレイズシールド付け根には排気用のダクトが設置されている。わざわざこの部分に排気孔を設けたのは、寒冷地での運用時、グレイズシールド表面に結露が生じこれが凍結する、霜や雪が氷着などの障害が発生したことに対する、必要に応じて暖気をこの排気孔にバイパスして氷着層を溶かすデアイシング・デバイスとして用いた。この装備は寒冷地用MSに新規導入を検討中のもので、運用実証試験機として(陸戦用ジム)に搭載された。

Spec

諸元

型式: RGM-79
全高: 18.5m
頭高: 18.0m
重量: 41.2t
全備重量: 58.8t
ジェネレーター出力: 1,250kw
スラスター推力: 55,500kg
装甲材質: チタン系合金
武装: 60mmバズカ砲
ビーム・サーベルx1~2
ビーム・スプレーガン
ビーム・ライフル
シールド
ハイパー・バズーカ



RGM-79 ジム

RGM-79 GM

■RGM-79(ジム)

すべての汎用系機体のベースとなったのが、一年戦争末期に登場し、地球軍の反政府戦を見たRGM-79(ジム)である。同は、A型にRX-78-2(ガンダム)の運用データなどを加味してアップデートされた机体。

胸部ユニット

被弾の傾向を数値解析し、その部分を重点的に増加装甲で覆うという方法論は、この(陸戦用ジム)において大きな成果をもたらすこととなった。根本的に機体そのものの出力増加が期待できない状況では、この対処法が最善であったといえる。重量増加にともなう各駆動部、特に脚部への負荷は増大し、本来B型が有する機動性は殺がれることになるものの、ヨーロッパにおける戦況では機動性よりも防御性能の拡充が求められたのである。装甲により機体重心が上方に大きく移動するため、機体操作プログラム、特にスタビライジング関連は大幅な更新が行われている。

増加装甲は原則として元となったB型の装甲上に被せる形で装着できるオーバーラップ方式で発想されているが、一部装甲については、溶融した装甲材料(チタンセラミック複合材)を直接吹き付けて装甲厚を増すことも行われている。

オーバーラップ装甲の最も目立つ部分は胸部とコクピット・カバー部である。当然ながら最も狙われやすい部位のひとつであるため、入念な強化が図られた。特にコクピット・ブロックと核融合炉主機周辺の防護強化に主眼が置かれ、本来前後左右への屈伸・屈曲可動域を稼ぐ目的で上下2分割式に設計されている腹部装甲のうち、上部の装甲を胸と一体化するような方法で増加装甲が装着され、かつ左右胸にある排気ダクトを新たに設計された装甲ルーバーで覆うことになった。宇宙では、姿勢制御や制動用のデバイスとしても活用されている胸部のダクトは、地上においても高機動時には姿勢制御補助装置として機能させている。しかし、重量増加にともなう機動性の低下が避けられないことから、胸部ダクトは排気・放熱用としての機能のみを優先することとし、開口部の小さい装甲ルーバーへと変更されたのである。



地上で運用するB型では、胸部と腹部の隙間を利用して吸気が行われていたが、この部分を装甲で完全に覆ってしまうため、胸のダクト下方とコクピットカバー（プロテクター）、顔に相当する部分に開口部を設け、エアインテークを設置している。増加装甲に導管が内蔵され、胸部内に置かれたファンにより強制的に外気を吸引し、熱交換装置に導かれる。

頭部を保護する「櫓」装甲は形状変更され厚みも増している。前側方にはエアインテークが設けられているが、自然吸気用のインテークでもおにもコクピットの換気に用いられた。首元の3分割式装甲はワンピース式に換装され、装甲厚も増している。

コクピット・カバー部の装甲は新規形状のものに交換され、ハッチ・ドアは1枚式からRGM-79[G]に範を得た上下2分割式の装甲ハッチとなっている。腹部装甲から上下ハッチ・ドア側面をカバーするようにオーバーラップする追加装甲は、パイロット搭乗時の安全性を向上させるために装備されたものであるが、機体がうつ伏せに転倒した際、下部ハッチ・ドアをヒンジ部から切り離し強制排除するためのクリアランス確保の意味もあった（機体が地面にめり込むような状況は想定されていない）。

なお、胸部ダクトの上方にはオプションの陸戦装備として、投光装置と赤外線による動体感知センサーが設置されている。これらの必要性については賛否があったが、生身の敵兵による対MS戦闘という状況が次第に増加する傾向にあったことから、運用現場からは歓迎の声が上がっている。

腰ブロック

脚部を保護する吊り下げ式のブラップ装甲は、正面の2枚が大幅に装甲厚を増すものとなっている。もちろん構造上、単板ではなく複層となっているが、表に向く側の装甲ケーシングは平均で15mmの増厚が図られ、バックプレートとの空隙も広がっている。箱状の装甲内部には、過負荷が予想される脚駆動部冷却用の熱交換機材が搭載され、バックプレート上端に開口されたエアインテークから吸入された空気は、一部をそのまま駆動部にエアフローとして吹き付け、大部分は冷却液の熱交換に使用、暖気は外下角にある排気ダクトによって放出される。センターブロックの装甲はB型のままであるが、正面装甲のオーバーラップ部位が充分に増厚されているため、特に肥厚の必要はないと判断されたことによる。

各ブラップ装甲には、オプション装備用のアダプティングラッチが内蔵されるが、これらのラッチ用開口部の装甲ドアが被弾により変形するなどの問題が、かねてより報告されている。装甲にわざわざ開口部を設けることは極力避けるのが本筋であるが、現実的な問題として機体の融通性を優先した場合、これらを廃することはもとより考えられないため、各ラッチ部にはこれを完全に覆う形で箱状の装甲カバーが増設された。いずれも数層の

薄い装甲板を空間を設けて重ね合わせ、箱状外装にはめ込んだスペースド・アーマー構造を成しており、内部のラッチ・メカニズムを充分に保護できるものとなっている。

腰部の最大の変更点は、後部センター・ブロックに補助スラスタが増設されたことである。これによって、後部のブラップ装甲は、RX-78系と同様の左右別体式に変更される。スラスタは角形ノズルの推力偏向が可能な方式のもので、移動補助装置として有効であったが、プロペラント搭載容量が小さいことから長時間の持続使用は難しいとされる。

ランドセル

この機種のランドセルは完全なオリジナル仕様として設計、生産されたものである。宇宙用のように移動手段の要となる航行用主機ではなく、戦闘行動時の瞬発力のみに機能を絞ったものとしてアレンジし直されている。下向きに45度の角度で主ノズルが4基（2基ずつのタンデム方式）固定装備され、ランドセル外殻にはノズル冷却用熱交換器用の吸排気ダクトが設置される（側方にあるのが吸気、ノズル上方のものが排気用）。特徴的なのはランドセル上部に設置された小型のノズルであるが、これは機体が空中にある時、正中を回転軸に機体周囲運動を行うためのもので、左右を同時に噴射することがないよう自動制御されている。運用実験の際、マニュアルで制御していたパイロットが誤ってこの補助ノズルを同時噴射し、頭から地面に墜落したという事故が起きたためである。

左右主ノズルに挟まれるように装備された円筒形の装備は、予備のプロペラント・バレット格納タンクであるが、引き出しの装備となるため、戦域によっては未装備の機体も存在する。

ビーム・サーベルのマウントは落下事故の少ないスリース（箱）式で、左側1基装備が標準とされた。他のランドセル同様に右側への装備も可能な構造はそのまま残されて、通常は装甲カバーで覆われる。

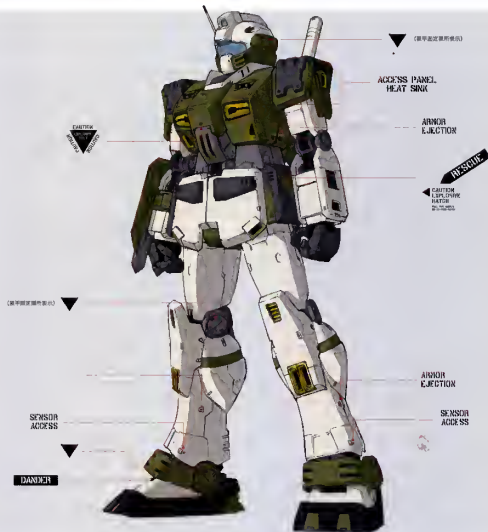
腕部／マニピュレータ

基本的にはB型の機材をそのまま使用しているが、肩装甲には特殊な形状の追加装甲が取り付けられた。この独特な形状は、作り付け式の追加武装や小型のシールドをマウントする目的で設計されたものであった。しかし、前編での評判は設計者が思っているほど高くはなく、シールドや武装を装備した例はほとんどなかったらしい。むしろ切り欠き部の角に着弾した場合、妙な角度に跳する事例が報告されており、現地改造でこの上から平板の追加装甲を付加することが多かったという。

肩装甲の側面開放部には懸垂式の装甲が増加され、その中央には角形のスラスタが増設される。このスラスタ

CAUTION/MODEX : RGM-79F

RGM-79F コーション/モデックス



もまた空中姿勢を制御する目的で追加装備されたものであるが、プロペラントは使用せず、胴基部の空腔に設けられたインテークから吸入された空気を高効率コンプレッサーで圧縮し噴出するものである。同様の空中姿勢制御用エアスラスターは前腕腕部にも設置される。こちらはシャッター状の側面板が設けられ、腕の振りと偏向板の角度によって、微妙な姿勢の制御を可能にしている。

脚部ユニット

これもB型と本質的には変わらないが、下腿部分のオーバ-

ラップ式装甲が装備される。膝関節部分の、特に前下方からの攻撃(MSよりも地上からの歩兵による火器攻撃)に対応するため膝関節部を覆う大型の装甲が追加され、また膝関節も可動を阻害しない限界まで肥厚した増加装甲で覆われた。もともと負荷のかかりやすい脚部においてB型ではメンテナンスの利便性まで考慮した設計であったが、ヨーロッパの戦況では保守の利便性よりも耐弾性能を重視すべきであるという判断が下され、オーバーラップ装甲で駆動部周辺を完全に覆い隠す仕様に変更されている。しかし、単なる装甲の付加ではなく、ランドセルのスラスター使用時に空中姿勢制御をより高度なものにするため、腕部同様にエアスラスターを内包するものとして完成される。



膝部プロテクターの上部にはインテークを、腰臀部に圧縮空気放出口を設けているが、これらは対ジオン防諜戦略の一環として「ホバリング装置」と呼んでおり、当時の連邦軍がジオン公国軍の投入した陸戦用のMS-09(ドム)に大きな衝撃を受けたことを物語っている。しかしRGM-79については、厳密な意味でのホバリング機能を有する仕様はなく、いずれもロケットエンジンの推力を利用したジャンプ機能であったことは今さらいうまでもない事実である。

足首以下については、オーバーラップ式の装甲ではなく根本的な外殻構造の見直しが行われ、多少可動域への影響があるものの、接地圧軽減と着地時衝撃緩和の目的でソール部面積の拡

大、連部衝撃緩衝機構の強化、「スリッパ」前半部の肥厚が行われた。また踵部の外殻装甲は上方に屈曲し、足首後方を可能な限り覆うような形状となり、その下部には3段の蛇籠構造の装甲に覆われた踵がある。ここは追加された衝撃緩衝装置が内蔵され、機体が踵から接地した場合の機体安定を確保している。

踵装甲には、行動と共にする地上軍車両への位置表示灯が内蔵されている。これは前線部隊からの強い要望から採用された装備で、MS部隊と協調することの多い地上部隊では暮暮時や夜間行軍の際、MSに後続する友軍車両が脚部に迫突するようなアクシデントが頻発していたため、その防止策として警告灯、衝突防止灯などの標準装備化が望まれていたことによる。

RGM-79F/FD

デザート・ジム／装甲強化型ジム



■これはRGM-79F(デザート・ジムの標準的なカラーリングである。アフリカ戦線などの過酷な状況における運動効果を考慮した配色となっている

F型の成功を受けてジャブロー工廠で開発されたのが、現在RGM-79F(デザート・ジム)と認識される機体である(本機の型式番号の混乱については後述する)。ペルファスト工廠製のF型(陸戦用ジム)の設計をベースとしつつ、RGM-79のA型またはB型に対し増加装甲としてリアクティブ・アーマーを追加。さらなる耐弾性の獲得を目指している点は(陸戦用ジム)と同様である。

本機の投入先は、開発当初よりアフリカ戦線が見込まれていた。当地の戦域の大部分は、遮蔽物の少ない砂漠地帯であったため、上半身に増加装甲を集中させたF型とは異なり、下半身に至るまでリアクティブ・アーマーを増設している。とはいえ、全身にきまなく装甲を張り巡らせるようなことはせず、膝や足首といった関節を保護する形で、装甲を追加する措置が採られた。

むろん、こうした装甲強化の施策は機体重量の増加を招いたが、脚部に新型補助推進装置を増設することで機動性の確保に努めている。この補助推進装置は、MS-09(ドム)に対抗するための装備でもあり、全力稼働時にはホバー走行を可能たらしめたという。だが、実戦投入を急いだために性能面で妥協した点もあり、補助推進装置の燃費効率は悪く、ホバー走行の持続時間は極めて短いものだったようだ。

また、この補助推進装置を搭載するには、脚部ユニットのフレームを特殊な形状の物に差し換える必要があったため、既存の機体に増設することが難しいという点もあった。

Spec

諸元

型式:RGM-79F

頭頂高:18.0m

質量:44.7t

全備重量:69.9t

ジェネレーター出力:1,250kw

スラスター推力:57,800kg

装甲材質:チタン・セラミック複合材

武装:専用ビーム・スプレーガン

ビーム・サーベル

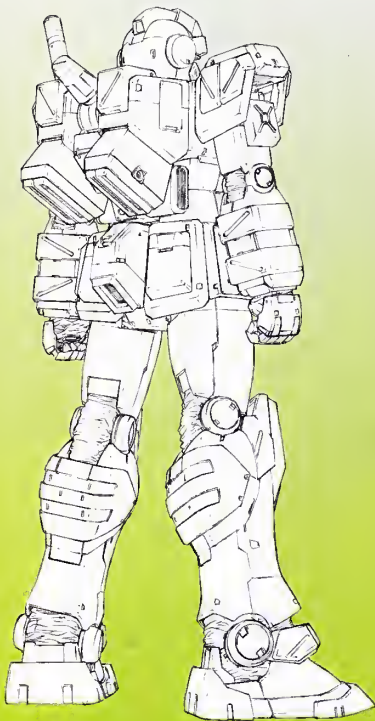
8連装ミサイルポッド付レールキャノン

ハイパー・バズーカ



RGM-79F デザート・ジム

RGM-79F DESERT GM



RGM-79F デザート・ジム

RGM-79F DESERT GM

■これはRGM-79F(デザート・ジム)のうち、砂漠以外の地域に配備された機体のカラーリングである。(デザート・ジム)とはほぼ同一の仕様であるが、当初はこのタイプを(汎用型ジム)としていた。



そこで、補助推進装置の実装は、ジャブロー工廠の生産ラインで新規製造された機体のみに限定されている。

一方で、在米機に増設するための「改修キット」の製造も進められ、アフリカや中近東地域の前線部隊に送られている。こちらは、おもに追加のリアクティブ・アーマーや関節部に対する防塵シーリング装備、接地面積を増やし安定性を増すための増設ソールなどで構成されたもので、新型補助推進装置は含まれていなかった。したがって、脚部の補助推進装置の有無によって、ジャブロー工廠で新造された機体か、あるいは改修キットを用いた機体かを見分けることができるのである。

この「改修キット」には様々な種類があり、大きく分ければジャブロー工廠製、ベルファスト工廠製、オーガスタ工廠製のものが存在する。基本的にはA/B型の機体をベースに適用するためのものであり、これらは配備先からの要請があれば現地の整備部隊、基幹基地に向けて送られていたが、現地改修キットとしては大がかりな装備もあったため、それぞれの工廠でフルアセンブルした状態の機体として部隊に送られたものも存在するといわれる。

それぞれの設計はF型(陸戦用ジム)を基本とするため、開発当初はRGM-79F、ないしRGM-79[GRS]といった型式番号表記が用いられていた。一部の資料では、本来(ジム・スナイパーカスタムII)に用いられるべきRGM-79SPの型式で表記されているが、これは開発予算の一部を同時期に開発していたSP型の枠から流用したこと起因する。



■これはRGM-79FD(装甲強化型ジム)の標準的なカラーリングである。(デザート・ジム)同様、アフリカ戦線などに配備された。

また、オーガスタ工廠で流された「改修キット」は自工廠で開発したD型用のパーツをキットに組み込んだもので、外観上は他のF型に類似しているものの、ランドセルのスラスターなどが異なっており、厳密には別タイプとして区別すべきである。このタイプにはRGM-79FDの型式番号が別途与えられている。

F型系列を総括すれば、全体としてはA/B型の改修型(派生型)であると定義することができる。ペルファスト工廠製のロシア戦線、ジャブロー工廠製のアフリカ戦線に向けて設計されたもので、これらをF型、さらにオーガスタ工廠製のFD型ということができるだろう。呼称に関してはペルファスト工廠製のF型が〈陸戦用ジム〉でほぼそのみを指すのに対し、そのほかは入り乱れている。主としてアフリカ戦線において運用されることが想定されていたことから〈デザート・ジム〉とされることが多いが、同様の改修機及び新規生産機であっても砂漠とは呼べない地域に配備されるケースもあり、こちらを〈装甲強化型ジム〉と呼んでいたようである。本来、FD型のみを指して〈装甲強化型ジム〉と定義するのが合理的ではあるが、多くの資料でこの呼称はそれ以外のF型にも当てはまるため、注意が必要である。なお、これらの呼称は工廠製新規機体と、現地改修機を区別するものではない。

本書では混乱を避けるためRGM-79Fを〈デザート・ジム〉、便宜的にRGM-79FDを〈装甲強化型ジム〉として表記するが、両者は「A/B型の装甲強化改修機」という点で本質的に同じものと考えてよい。

Spec

16元

型式: RGM-79FD

総高さ: 18.0m

重量: 41.2t

全機重量: 69.5t

ジェネレーター出力: 1,250kw

スラスター推力: 59,800kg

装甲材質: タタン・セラミック複合材

武装: ビーム・ガン

90mmマシンガン

ビーム・サーベル

ハイパー・バズーカ

ラージ・シールド

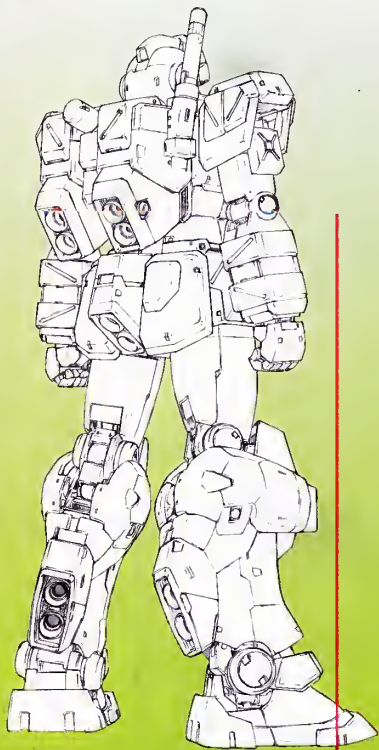
ミドル・シールド

スモール・シールド



RGM-79FD 装甲強化型ジム

RGM-79FD ARMORED GM



RGM-79FD 装甲強化型ジム

RGM-79FD ARMORED GM

■これはRGM-79FD(装甲強化型ジム)のうち、砂漠以外の地域に配備された機体のカラーリングを示す。



RGM-79F/Dの運用実績

本機は、開発当初から想定されていた通りに、アフリカ戦線を中心に配備された。特に在来機向けに調整された増設用「改修キット」に関していえば、ほぼすべてが、アフリカ北部、もしくは中近東地域に向けて送られている。

これらの「改修キット」は、まず前線部隊の整備兵たちから、熱意な歓迎を受けた。なぜなら、オアッサ作戦以後にヨーロッパ経由で現地入りしたMS部隊の多くが、乾燥地帯特有の砂塵に悩まされ、稼働率を大きく落としていたためである。むしろ現地改修によって関節部への防塵処置を施した例も見られたが、それとて完璧ではなく、入念に設計されたシーリング装備を含む「改修キット」の需要は極めて高かったのだ。

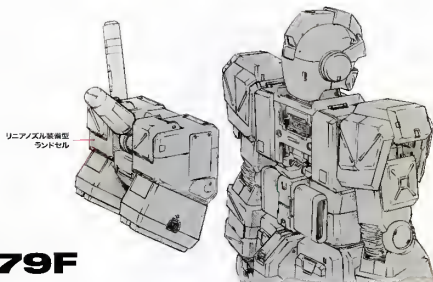
また、アフリカにおける当時の公国軍は、MS-09G(ドワッジ)をはじめとする新鋭機の配備が進みつつあったとはいえ、ビーム兵器搭載機はほとんど皆無といった状態であり、ジャブロー製F型、及びオーガスタ製FD型のリアクティブ・アーマーは大きなアドバンテージとなった。そのため、鈍重そうな外見を見て当初こそ懐疑的だったパイロットたちも、次第にF/FD型の優位性に気づき始めていったのである。多少の被害をものともせず、戦線を航行するF/FD型は、熟練の公国軍パイロットにとって、やっかいこの上ない相手であったという。

ただし、運用側からの評価とは裏腹に、配備数は伸び悩んだ。

「砂漠のロンメル」の異名で知られる公国軍の将、デザート・ロンメル中佐の策略により、ジャブロー工廠から送られたばかりの「改修キット」を一時保管していた倉庫が焼失されたためである。そのため、配備計画に大綱な狂いが生じ、結果として部隊単位での機種転換は見送られ、各隊に分散配備せざるを得ない状況となってしまったのだ。

一転して希少な機体となったF/FD型を受領した前線部隊では、耐圧性の高さを活かして「前衛」として活用しつつ、在来機を「後衛」に配して支援させる形で運用することにより、絶対数の不足を補おうとした。とはいえ数を確保できない状況にあっては、戦域全体に与えたインパクトは、さほど大きくなかったとする見方が支配的である。

だが、先にも述べたが、F/FD型そのものの評価が極めて高かったことは確かである。事実、アフリカ以外の部隊からも配備を求める要請が殺到していたことが記録に残されているのだ。そこでジャブロー工廠で製造された新規生産分の機体を(装甲強化型ジム)と銘打ち、U.C.0079年11月下旬から12月にかけて、他の戦域へと供給を始めている。例えば、北米戦線では情報部のアンドリュー・マロリー中佐麾下の特務部隊がFD型を受領し、要人救出作戦に用いたことも、その一例といえよう。



RGM-79F

デザート・ジム

この項で図示しているのは、B型をベースにファクトリー・アッセンブル後に前線配備されたRGM-79F(デザート・ジム)である。

F型系列のRGM-79は、工場でアッセンブル済み機体として配備されるもののほかに、いわゆる「改修キット」を用いて運用中の機体を現地において改修するパターンがあった。改修キットと一口にいっても様々な仕様が存在するが、基本的には大戦後期に最も多く配備されていたB型に適用する点で共通である。設計仕様上、これらは同一のものとはなるはずであるが、ファクトリー・アッセンブルされた機体のバランス・チューンなどは前線整備部隊でキットを装備したものより繊細に行われていたようである。また、改修キットの内容も時期によって微妙な差違があり、いわゆる〈デザート・ジム〉あるいは〈装甲強化型ジム〉と呼ばれる機体間はもちろん、同一とされる機体においても差違が認められる場合があった。

頭部ユニット

いわゆる改修キットとして用意された増加パーツはB型頭部外殻に対応する強化装備として設計されている。内部搭載機材もB型標準規格のまま対応可能なように、メイン・カメラ用オーバーラップ装甲はグレイズ・シールド中央上部を完全に覆わないような形状となっている。機体によっては頭部の固定武装を外しているものもあり、これが〈デザート・ジム〉の標準のようにする記述もあるが、必ずしもそうではなかった。バルカン砲撤去の理由として、砂漠地帯の容赦ない直射しと高温で電子機器のプラットフォームである頭部内が高温化しないように冷却機構を強化するため、固定武装搭載スペースに必要な機材を積んだと解説されることもあるが、もともと宇宙空間で運用することが前提

で設計、製造されたものであることを忘れてはならない。断熱に関しては十分な配慮がなされた躯体構造であったことは改めていうまでもないはずで、宇宙用の装備を撤去したとしても躯体内外殻の構造を変更しなければならない理由は見当たらない。

バルカン砲撤去の理由は、交換用砲身や弾薬の消耗と補給の欠如により使用できなくなった固定武装がデッドウェイトとなることを嫌ったという単純なものであった。

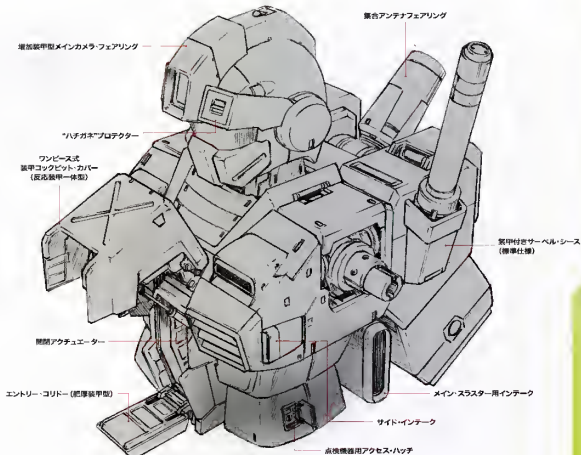
胸部ユニット

胸部もB型機体にも対応する規格で換装用装甲が作られている。B型機体の胸部にマッチするようなインテークが配され、吸気量を稼ぐため排気・放熱ダクトの脇にも補助インテークが付けられる。これらの吸気は機体内の熱交換専用として独立している。

コクピット・カバーの装甲はももとの機体に外装する形式になっているが、非爆発性反応装甲を一体化した構造で、装甲厚もかなり大きいパーツである。さらに腹部装甲には胸部装甲から吊り下げ式に増加装甲が追加されるが、この部分に関しては未装備の機体も多かったようである。

腰ブロック

改修キットによる改修機では、未改修のまま運用されたケースが多く見られる部分でもある。ファクトリー・アッセンブル機体では、B型のようにセンター・ブロックに重なり合ってこれを保護する形式から、オーガスタ工機製のD型のように前方に突出するセンター・ブロックの左右に振り分けた形式へと変更される。



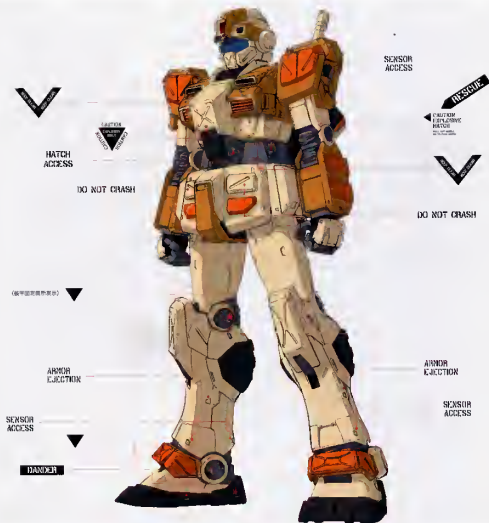
正面装甲のアウトラインはセンター・ブロックへのオーバーラップ部分をカットオフしたのだが、装甲厚はB型オリジナルのものより10mmほど増していた。後述するFD型同様、ラッチ・メカニズム内蔵部の上には増加装甲が追加されている。

後部装甲は、センターセクションにスラスタを増設した関係で左右2分割式となり、また大口径火器搭載可能なようにマウントを強化していたため、増加装甲も大きくなっていた。増設スラスタは同時代の他のRGM-79系機体には見られないリニアノズルを採用している。これは内部に偏向装置があり、効果的なスラスト軸線変更が行えた。断面積がラウンドノズル仕様よりも大きく、したがって同体積の装備としては確実に推力の増加が見込めたが、一方で連続使用に対する物理的な不安定さが解消されないままの実装となった。しかし、機体をジャンプさせた時の空中姿勢制御は正確性を増し、運用部隊での評価は充分に得られたという。

ランドセル

臀部に装備されたリニアノズルとのバランスを保つため、ランドセルのメイン・ノズルもリニアタイプに換装された。このランドセルは、上部の基本外殻構造はD型の設計が流用されているが、ノズル・フェアリングは新設計となっている。片側2列の縦長に配されたノズルは、これもD型で用いられるラウンドノズルよりも断面積が大きく推力が増加している。縦いスリット状としたのはスラストを収束させることでより高効率に推力を得ようという意図があった。ノズル・フェアリングはニュートラル位置から+10度、-5度の角度で左右別個にスイング可能で、かつ個々のフェアリング内にあるリニアノズルは左右に5度ずつ可動する。これによってスラストの収束、拡散ができ、空中姿勢機動の微妙な変更が行えた。しかし、このリニアノズルも連続使用については不安を抱えたままの実装であったという。左右フェアリングの外側には小型の姿勢制御用ノズルが装備され、空中での機体軸旋回に利用された。

RGM-79F コーシオン/モデックス



強化された通信システムとそのアンテナはランドセルの上部中央に搭載される。図の円盤型アンテナ・フェーリングは位置表示、方位探知システムを強化したタイプのもので、地形による自身の位置探知が困難な文字通りの砂の海で運用される機体には必須の装備として定着したものである。しかし、ミノプス粒子の密度次第で無用の長物となっても可能なかもしれない。パイロットには太陽コンパスと天幕ツップという前代未だ昔の砂

図は、装甲中にしたゴートレット(手甲)を装着した手首を押す「プアード・ジョグ」である。もともとマニピュレータの主駆動部(関節)を保護する目的の装甲カバーに過ぎない予定であるため、開発当初から大差を見出しが行われる予定のない部位であった。しかし、A/B型の実測の運用ではゴートレット遠位端(指側)は乱暴な操作によって破損することが多かった。本来「拳」で殴るといふ運動は、MSでは禁止行動のひとつであるが、とっさの判断でそのような運用をする例もあったことから、マニピュレータ(手)の



の破損や不調は後を絶たないものであったという。

この補強型ゴートレットは、端部の損傷を少しでも軽減するために採用されたもので、同時に防塵カバー装着にともなうマウントポイントの確保が目的の装備であったが、その形状が現場のパイロットにとっては「殴り合い」を承認するかのようなものと理解されたことから、すぐさま廃止され、全体を肥厚させる方向に対策は変更された。したがって図のような手首のタイプは配備初期の一部の機体にもみられる。

脚部ユニット

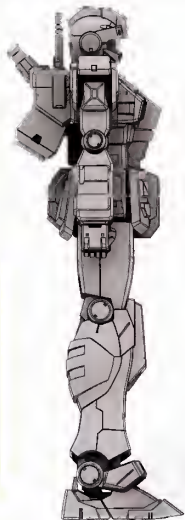
下腿部を中心にオーバーラップ式の増加装甲が付加される。

特に、膝前部分や足首は、地上に待ち伏せる敵歩兵が最も標的とする部分であるため、入念な装甲強化が図られた。一説にはこの膝と足首に使用されるリアクティブアーモアに限っては爆発性反応装甲が用いられ、近距離からここを狙う敵兵を巻き添えにするトラップとしても機能させたともいわれるが、その真偽は定かではない。

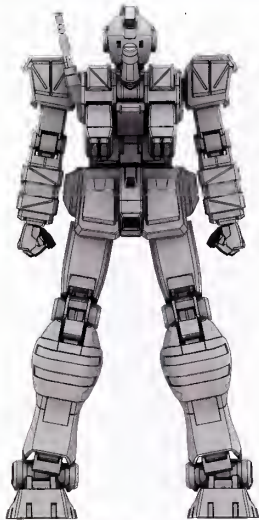
各関節部は防塵処理のシーリングが入念に施されている。シーリング材はカーボンを主体とした炭素系繊維素材で、ここに圧電繊維を織り込んだ5層構造の密編みの布で、各防塵シートの動きを電子的にモニターしている。最外層はチタン合金繊維が編み込まれ、一般兵が使用する口径10mm前後の小銃弾、機銃弾では貫通することができない強度を有している。

PROJECTION VIEW : RGM-79F

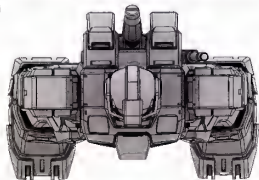
RGM-79F図面



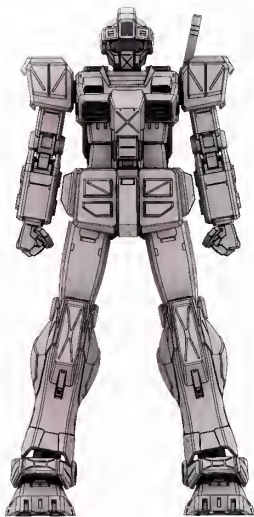
■左側面



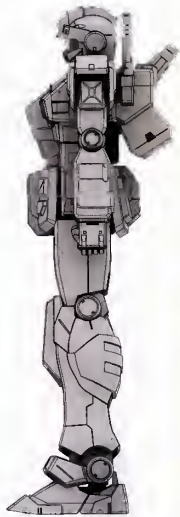
■前面



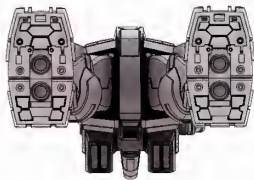
■上面



■前面



■右側面



■下面

RGM-79FD

装甲強化型ジム

ここでは、前述の通りF型系列機の〈装甲強化型ジム〉と呼ばれるものについて、特にオーガスタ工廠で生産されたRGM-79FD(含む、同改修キット)について記述する。

一年戦争末期、型式をRGM-79F(陸戦用ジム)とされたベルファスト工廠製機体の成功を受けて、オーガスタ工廠にも地上戦用に特化したRGM-79の重装甲仕様生産が命じられた。軍上層部としては、基本的には「標準的な」F型仕様の生産拡大を指示したつもりだったが、同工廠の設計陣は納期の遅延を招かないことを条件に重量増加対策の強化を完全にするという名目で、構造の見直しを含めた改修型を提案した。一説には、どちらかといえばマイナー施設のベルファスト工廠に対するライバル心に突き動かされた同工廠の設計陣がF型を凌駕する「ホンモノ」の重装甲仕様をものにするため意地になっていた、ともいわれるが真相はわからない。

オーガスタ工廠では当初、自工廠で生産を開始していたD型用に「改修キット」を用意、またはD型をベースとした強化型新規機体の生産に移行するつもりでいた。しかし、ジャブロー本部から予算の都合や現場からの要望で配備済みのB型の改修を優先する方針が伝えられたことから、B型機体への装備換装を目的とした設計案の構想に着手した。とはいえ、機体の装備や運動プログラムなどはD型の運用データ及びノウハウが反映されたものとなっている。

本機の基本設計は、ジオン公国軍の重MS、大口徑化火器に対抗するための改修を中心に据えた設計であることはいうまでもない。これは、重武装化と重装甲化を目指すという単純な発想では成立せず、ベースとなったD型、あるいはRGM-79ジムに本来付与されていた軽快な機動と生産効率の高さを損なうことのないように折り合いを付ける難しさが、本来は機体制御プログラムも重装甲化にともなう運動性の変化に応じた更新プログラムに完全な書き換えを行わなければならないところを、D型用プログラム(これは重力圏での運用に最適化されたものになっている)に枝を付ける形で対処する付加プログラムを書き、装甲を外した場合には容易にアンインストールも可能なシステムが開発されている。

RGM-79FDの特徴は、駆動系や推進器など一部のパーツを、同工廠の最新仕様であるD型用として生産されているものからそのまま流用している点にある。また、前述の通りD型の運用で得られたノウハウが装備の設計にフィードバックされていることから、外観よりもむしろ内部の構造やシステムに変化が見られる。これが他工廠製のF型相当機と最大の相違点であるが、

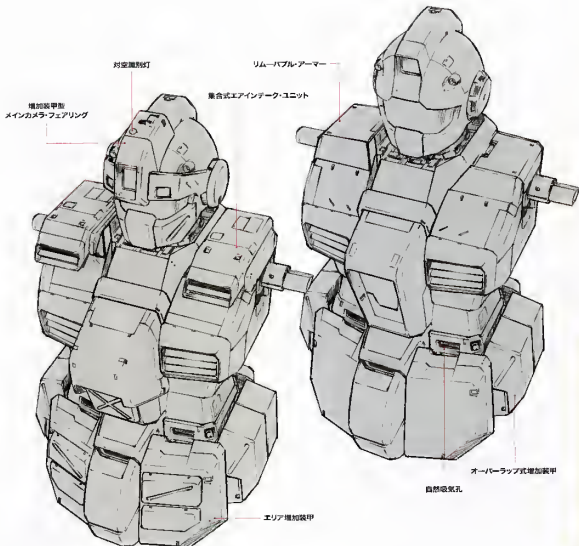
注意しなければならないのは、FD型がD型からの直接的な発展型、あるいは改造機ではないという点である(D型後継としてはG型及びGS型〈ジムコマンド〉がそれに当たる。FD型は他工廠によって生み出されたF型の仕様をベースとしている)。ここでは、内部機構やシステムがいかにかD型から反映されたかについても明らかにする。

頭部ユニット

同工廠では地上運用に特化したMSとしてD型のノウハウが活かせると思論んでおり、まずは「改修キット」にてD型頭部をそっくりそのまま交換するプランが提案された。D型として設計された機体の頭部外殻は、宇宙用装備の搭載を考慮しないものとして改設計されている。内部に積載される各種センサー、感受装置類も小型軽量化が図られ、総体として外殻装甲厚はB型の10~20%増加しながらも、外観はスリムな印象となり、また生産性向上を進めるため各装甲を構成する曲面は単純化。頭部搭載火器へのアクセス(給弾、点検、積み替えなど)が容易なようにマズルポート周辺の形状も単純化されている。要するにB型よりもすべての点において能力向上が図られていることから、自工廠におけるF型仕様の策定に関して、他工廠に対するアドバンテージを築けるという点で自らの対抗心を満足させることができると考えられたのである。

ところが、F型相当機の配備運用先については、その大部分が地球上の特殊環境地域、とりわけ熱帯地域に展開する部隊へ優先的に送られることが決定されたことから、そのための対応が必須であった。D型は生産数の多い寒冷地仕様で代表されるように、本来は温暖地域から寒冷地での運用に適した設計である。結果として、D型をベースとして改設計を行うよりは在来型すなわちB型(宇宙用)の頭部装甲外殻を利用するのが、期間的にも予算的にも合理的であると判断されたのであった。

頭部外殻装甲の脱着はベルファスト製RGM-79F(陸戦用ジム)に似て外側に向けて行われ、宇宙用として内装される断熱材を兼ねた内側装甲もそのまま残された。これは熱帯地域における高温、太陽熱から内部機材を保護するためであることはいうまでもない。循環式の完全閉鎖型エアコンディショナーや特殊なスラリーを媒質にした蓄熱・放熱機材は高価な上に重量がかさむため撤去され、ごく一般に使用されているエアコンディショニング機材へと換装。外気を吸入して蓄熱媒体とする空気循環式排熱装置を搭載した。



電磁波透過型正面装甲、すなわちグレイズ・シールドはB型
のものをそのまま装備しているが、内部に積装される各種セン
サー、感受機器はD型の小面積タイプに対応したレイアウトで中
央部に集中するように搭載されるため、グレイズ・シールドの上
部は露出面積を少なくする目的で外装式装甲で覆うこととした。

メイン・カメラは通常のB型よりも前方、かつ下に搭載位置
を変更したかに見えるが、装甲強化型のメイン・カメラは追加装備
で、B型本来の位置に内蔵されるメイン・カメラもそのまま残され
ている。通常は頭部外装装甲の2倍の厚みを確保したオーバー
ラップ装甲内に収められた追加メイン・カメラがメイン・センサー
として機能するが、このフェアリングが被弾損壊した場合、装甲
ごとユニットをバージすれば、もともとのB型定位置に内蔵され
るメイン・カメラがアクティベートされるというシステムが盛り込

まれている。こうした複式機構は、頭部全体重量で少なからぬ
割合を占めていた宇宙空間での放熱排出メカニズムをオミットし
たことから生み出されたB型頭部外装ならではの副産物であり、
D型頭部外装の改修で対応しようとするばなしし得なかったこと
でもある。複式のメイン・カメラ、それも予備が「あらかじめ積装さ
れているという機構は、これまでのMSにはない、一種豪華な
装備といえ、運用現場では大歓迎されたという。とはいえ、同
様のシステムが以降の生産型で標準化されなかったのは、RGM-
79FDの頭部はあくまでも「有り物」を最大限に有効活用するとい
う前提があったからこそで、開発状況が生み出した特例的措置
であった。このメイン・カメラ内蔵式のオーバーラップ装甲はその
まま正面のメイン・グレイズ・シールド上端(この後方にはセンサー
類がないため)をも保護するような形状に設計されている。

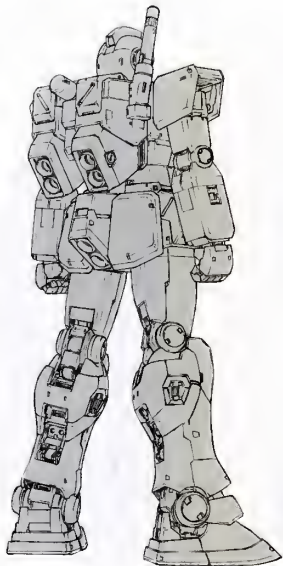
「耳」装甲についても、B型標準の排熱ポート付き（内部機構は撤去されている）がそのまま使用されるが、ポート形状と噛み合うラッチングメカニズムを内蔵した円錐台形のオーバーラップ装甲が被せられることになった。この耳装甲は、グレイズ・シールド上端を保護するブリッジ型追加装甲の取り付け基部を兼ねたものとして作られている。グレイズ・シールド上部の保護に関しては、顔部分の装甲をRX-78系機体で使用された「底タイプ」を一体化、あるいは外付けしたものにすべきであるという意見もあったが、耳装甲を支点に下方に旋回可能な可動式グレイズ・シールド保護装甲（設計陣は西洋甲冑からヒントを得たのかペンテール・パイパーといういささか意味不明な命名をしている）が、より確実な防護策であるとして採用された。この装甲を下げた状態で使用された例を明示する画像資料などはないが、敵味方入り混じりの戦闘においては有効な防御手段であったようである。ちなみに、生産現場では設計陣の意に反し、日系の技術者が「まるでハチガネだな。古風なことだ」と評したことが前線でも伝わり、運用現場ではハチガネ・プロテクターというのが通称になったという余話がある。

連邦軍MSの標準固定武装であるト・カンガム製60mmバルカンはそのまま搭載されるが、グレイズ・シールド保護装甲がスタンバイ位置にあった場合は射線を避ることから「ハチガネ・プロテクター」には四角い射撃用窓が開けられた。スタンバイ位置での機関砲射線を優先とするデザインであれば、増加装甲上方に切り欠きを設ければいいようなものだが、グレイズ・シールド保護装甲としての機能を優先する設計思想が明確に伝わっている。

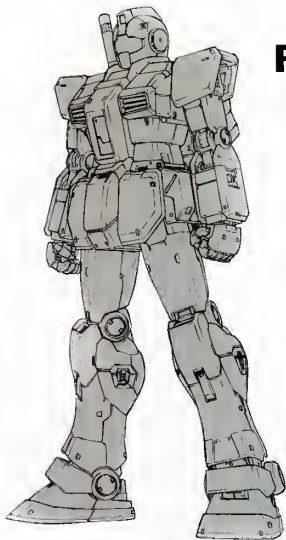
胸部ユニット

D型は胸部ユニットの上方、肩部分にインテーク・ダクトが標準装備されるようになっている。これは機体内搭載機器及びランドセルに内蔵されるメイン・ノズルを冷却するために必要な熱交換媒体として外気を利用するためのもので、頭部同様、完全に撤去された宇宙運用時の閉鎖式冷却システムを代替するものである。もちろん自然吸気では空気流入量が不足があるため、インテーク奥にはシロッコファンがあり外気を吸入、機体内部、コックピット、ランドセルへと分配するダクトに送り込まれ、それぞれに設置された熱交換器へと導かれる。

FD型では吸気効率を強化するため、D型で機体外殻に作り付けの半埋没式にレイアウトされていたインテーク・ダクトを独立したユニットとして分離、機体内とランドセルに分岐するダクトの断面積を大きくし、空気流量が増すように改良された。これは



熱帯地帯での運用や、2基から4基に増やされたメイン・ノズルの冷却強化を図る必要があったためである。D型は比較的寒冷な高緯度地域で運用されたためメイン・ノズル冷却に関する大きな事故の報告は確認されていないが、熱帯地帯ではオーバーヒートによる事故が十分に想定されるため、あらかじめ万全の対策を行ったものである。ダクトの中央には横方向に整流板が設けられているが、回転可動式で、通常はニュートラル位置にあって機体内とランドセルへの流入空気量を均等に行える。必要に応じて角度を変えることが可能で、流入空気量の一次分配調整が行える。整流板が90度回転するとクローズ・ポジションとなり吸入は自動停止される。このような機構を導入したのは、戦闘中に何らかの爆発、火災などに近距離で巻き込まれるような事態を想定したもので、燃焼する気化物質を機体内に引き込まな



RGM-79FD (増加装甲未装着)

RGM-79FD (STRIP)

■この図は、RGM-79FD改修キットによって局地改修を受けるRGM-79FDの中途形態である。必要に応じて各部外装パーツや内蔵機構をキット同様のものに取換する作業は完了しているが、いわゆる増設装甲は取り付けられていない状態。

いようにするためである。

胸部左右の排気・放熱ダクトはF型のような装甲ルーバーは用いず、またD型標準の高流速排気ルーバーも使用せず、B型で標準となっていた形式の、3枚整流板タイプに戻している。装甲性能を重視して2段式のダクト・リップになっているものの、D型に比して実質的な開口部面積を拡大したのは、もちろん排気・放熱効果を優先させていることによる。B型では内部にエアラスト機能を有するダクトが設置され、D型ではそれを高効率化させるため高流速排気ルーバーを開発、試験したが、熱帯地帯向けオプションとしては、排熱・放熱を最優先とした結果の形状変化であった。

コクピット周辺の重装甲化はF型を上回るものとなっている。これは、ランドセルの出力強化にともなう物理的なバランス、カ

ウンター・ウェイトとしての機能も果たしつつ、搭乗者の生存率向上も図るという意図に基づく改修である。

D型そしてF型にもむるん装甲強化措置が施されている。この時点ですでにB型の装甲強化仕様としてのコンセプトは成立していたのだが、対ジオン公国軍重MS対策として、さらに外装強化を付加した仕様がFD標準となったわけだ。戦後の研究者がジムファミリーを系統的に分類し理解しようとしても、どうしてもそこからはみ出して系統樹の整然とした流れの中に収まり切らない仕様の機種が存在するが、まさにこのFD型が代表的な存在ともいえよう。実際の設計・生産現場では段階的、時系列的に整合する(当然のことである)はずの作業が日々行われていたわけで、混乱を招かないように社内、あるいは施設内生産仕様記号が付与されて、製造が行われていた。しかし、それを購入しない

し採用する軍の兵器採用部門が一括して「装甲を強化した新型ジム」というカテゴリーに収め、機材のデジゲネレーションをRGM-79FDとした時点で、後世の研究者は混乱することになる。運用現場では規格の統一が図られたB型と、それをさらに推し進めたD型が基本にあるため、現地での補修や改進に対応し高性能化が約束されれば大きな問題にはならなかったというのが実態であろう。

話を戻そう。D型の装甲を強化するためにまず行われたことはコクピット周辺の対策であった。この部分についてはB型からD型に移行してもさほど大きな変化が見られない部分である。コクピット・エントリー・ドアがシングル・プレート式から上にトラップ・プレートを設けた狙撃対策仕様に変更された以外、大きな変更点はなかった。しかしコクピット・カバー周辺の脆弱性は以前から指摘を受けていた問題のひとつでもあったことから、FD型の開発にあたって強化改修ユニットをまず作り(この部分は、重座されるD型への改修キットとしてレトロフィットさせ、認可があれば生産ライン上で変更する予定であったとされる改修一次装甲)、その上にF型や[G型]に倣ったオーバーラップ式の強化パーツ(二次装甲)を被せるという手の込んだ設計である。

構造強度を増し、接近戦時の耐弾性能や耐衝撃性を大幅に向上したコクピット・カバー構造であるが、大々的にD型へのレトロフィットが行われたという記録は存在しない。この2層化されたハッチ装甲は開閉機構として内部メカニズムの追加も必要で、全体重量が相当に増し、特に脚部への補助推進装置を装備しない機体では脚部へのストレスが増大することを敬避したからであろうと考えられる。

なお、コクピット・カバーの二次装甲外側にはリアクティブ・アーマーを装着している。これは非爆発性反応装甲が採用された。

腰ブロック

D型と大きく異なる部分はセンター・ブロックを完全に覆い隠すオーバーラップ式増加装甲と、形状を改設計した吊り下げ式正面装甲であろう。センター・ブロック後部にはプロペラントを使用する補助スラスタが2基増設されており、このためD型ではセミ・フンピース式(左右が完全に分離しているのではなく、正中部で緩やかに結合されており、片側が開くともう一方もこれに追従して可動する)だった後部装甲は、センター・ブロックのスラスタ・フェアリングを挟んで左右分割されるようになった。正面、後面ともに装甲は下方に延長されているが、脚可動域を制限しないように、外側角は大きく斜めに切り取られ、側面装甲

にアウトラインが繋がるようにデザインされた。いずれの装甲にも、武装などのオプション装備が装着可能なようにラッチ・メカニズムが内蔵されるが、F型で行われたのと同様に、ハッチ・ドアなどを保護するための増加装甲がさらに追加装着される。これらはみな、非爆発性反応装甲が用いられている。

センター・ブロックの正面オーバーラップ装甲は上端部にインテーク・ダクトが設置された。これはもちろん、後部に増設されたスラスタ・機器の冷却用空気を吸入するためのもので、強制的な吸入システムである。

さらに、ロウ・ア・シャシーと腰部装甲の可動部を保護するギャップ・プロテクターが増設された。この装備は他の機種には見られないものだが、腰部下端に増設された予備インテークの関係で正面装甲上端が通常仕様のものより下に位置していることによる。この予備インテーク(実際には空気が自由に入り出りする開口部)は機体内が一定以上の温度になると燃気(熱気)が上昇し、煙突効果によって排気ダクトへと流れ、自然吸気によって熱の移動を補助するものとして付加された機能である。地球上ならではの装備であったが、実質的にどのような効果があったのかははっきりせず、他の機種で導入されなかったことから期待通りの有効性は認められなかったであろう。

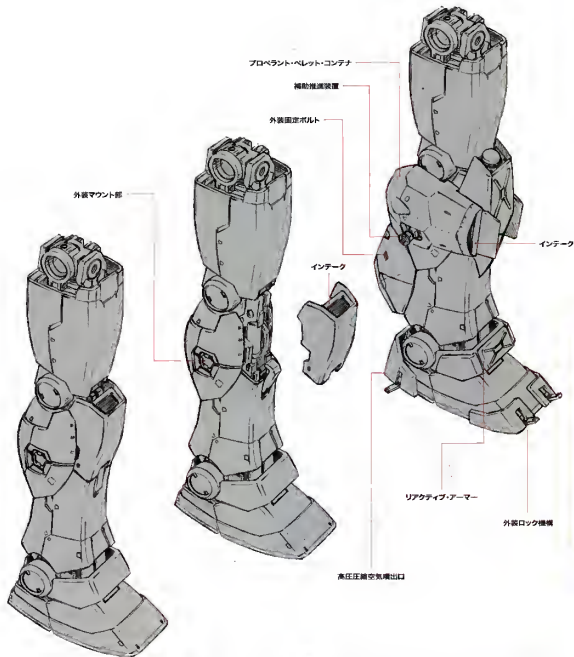
ランドセル

本機のランドセルは、基本的な構成はD型に準じているが、メイン・ノズルを箱形の装甲フェアリング内に収めることで防衛性を高めている。しかし、これによってノズルの放熱効率が低下するため、ランドセルと胴体の隙間に矩形のインテークが設けられ、強制的に吸入した外気をそのままノズル周囲から放出し、フェアリング内に熱が滞留しない工夫が施されている。この流入気は腰部正面から流入し熱交換器を経た高温気体と混合され、温度を下げた状態で排出される。

プロペラント・バレルのコンテナはノズル・フェアリングの上方に設置され、強固な装甲カバーにより保護される。

ビーム・サーベルのシースは周囲を囲む角形プロテクターを廃した軽量型が採用される。従来型のシースではサーベル軸方向に対して8度までならば斜めに引き抜くことが可能だったが、新型シースではその自由度が低下し許容角度は3度までに制限されている。チャージ性能は内蔵機材に左右されるため、一概に優劣は決められない。

F型で装備された頭部アンテナはオプション装備となり、代わってバレル・コンテナ・ユニットの間に挟まれる空間に円筒型



外装に包まれた高出力の全方向アンテナが設置されている。通信用送受信機材は下部の胴体内に収められており、通信中継用の航空機を介して遠距離通信やデータリンクが可能となった。このアンテナ・ユニットはより指向性の高いものとともにワンパッケージ化された大型の装備も用意されており、投入される戦域の状況に応じた対応が可能である。もちろん、頭部へのボールアンテナ装備も可能である。

腕部/マニピュレータ

基本的にはD型の標準ユニットのままであるが、肩装甲前面、上面の可動部周辺にはオーバーラップ装甲が追加される。また上腕近位端の駆動部も保護用増加装甲が懸吊式に追加される。これらはいずれも非爆発性反応装甲である。

前腕もアタッチメントやラッチ部を保護するため増加装甲が追加される。

CAUTION/MODEX : RGM-79FD

RGM-79FD コーション/モデックス



脚部ユニット

本機種が登場した背景には、いうまでもなくオデッサ作戦でジオン公国軍が投入したMS-09(ドム)の存在が大きかった。しかし、機体の設計思想が根本的に異なる極端な改修は不可能であるため、可能な限りの機動性補助機能を付加するということに着地点を見いだすこととなる。

胴部の下に増設された補助推進装置が、RGM-79FD開発スタッフの答であった。前線が望んでいたのは、MS-09(ドム)のようなホバリング走行機能か、それに類する高速移動手段であったのだが、RGM-79の物理的構造からそのような装備を付加することが困難であることは自明であった。現実性のある策として補助推進装置を新規装備として追加することにしたが、それにしてもこれまでのB型、D型の基本設計では対応不能で、下腿の

フレーム構造をはじめ内蔵される衝撃緩衝機構、駆動系の強化などを含めた根本的な見直しが行われた。補助推進装置とこれに関連する機材、そのケーシングや装甲については、胸部装甲と同様に、このユニットを外した状態でも機体運用が可能ないように設計され、F型(陸戦用ジム)のような使用も行える。

膝の装甲は通常のD型よりも上方に延長されその内側にはインテークが内蔵される。このインテークはソールに内蔵され、そのまま残されていたバーニアノズルに代えて新たに置かれた高圧縮空気噴出口への空気ダクトに連絡される。ソールは周囲が柔軟材質のフェンスで囲まれ、ここに高圧ガスを放出することでごくわずかながら機体を持ち上げようとしたものである。しかし、平滑な地盤であればともかく、通常戦闘の行われるような



地域での運用は事実上無意味で、あまり意味のある装備とはいえなかった。

しかし脚部左右に外装されるインテークと胴・腰部に内蔵されるプロペラント・ベレット・コンテナ、その下に装着されたタンデム式の補助推進ノズルは、厳密な意味でのホバリングこそ行えなかったものの、ホッピング能力は機体全備重量が増えたものの通常のD型に比べ機動の瞬発力にはるかに向上していることが確認された。ランドセル同様に吸気は強制的に行われ、熱交換器へと回された空気は膝のインテークから吸入された常温空気に混合されてノズルのフェアリングから放出される。

なお、補助推進装置を装備した場合、膝のインテークは円筒形のデバイスで隠されるが、これは保護カバーで、膝関節構造

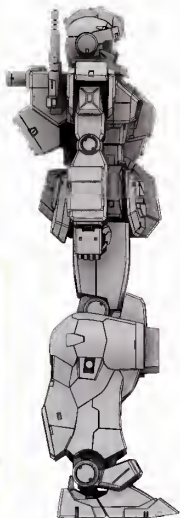
側に開口部が設けられている。

防塵装備

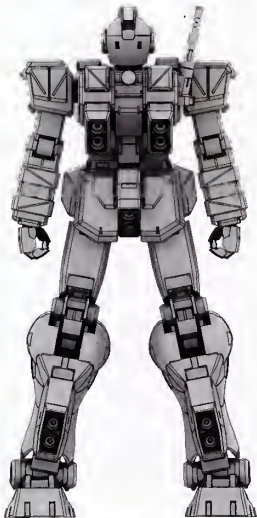
FD型は砂漠地帯の専用機として作られているわけではない。ただ戦況から熱帯地帯、とりわけ砂漠地帯での運用比率が高まるであろうことは予見されていたため、オプション装備として、各インテークには専用の防塵フィルター、各関節駆動部を保護する防塵カバーなどが準備された。これらの装備は、FD型以外の機体でも当該地域で運用される機体についても使用可能なように、アジャスタブル・マウントが採用されている。

PROJECTION VIEW : RGM-79FD

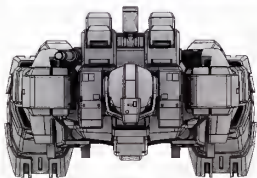
RGM-79FD図面



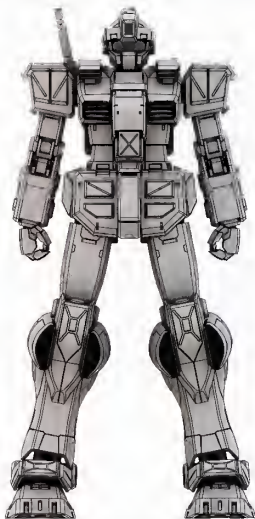
■左側面



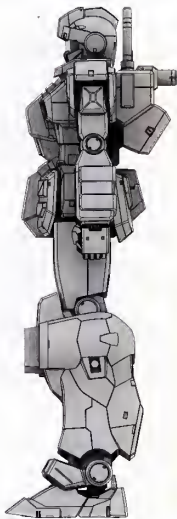
■背面



■上面



■前面



■右側面



■下面

RGM-79FP

ジム・ストライカー



■これはRGM-79FP(ジム・ストライカー)の標準的なカラーリングである。アフリカ戦線や中央アジア方面に送られて活躍したが、生産数自体は少ない。

U.C.0079年12月、ジャブロー工廠にてRGM-79C(後期型ジム(ジム改))がロールアウトし、先行生産が開始された。この機体は、B型に代わる次世代量産機として開発されたもので、全面的なブラッシュアップを図りつつも、生産性を重視した設計を採用。G型系列とは異なり、すべての部品を地球上の生産設備で製造することが可能であった。また、ジャブロー工廠製でありながら、より余裕のある構造のルナツー製のE型のフレーム設計を踏襲。バリエーション開発の母体となることが期待され、実際に複数の派生型が生み出されることとなる。そのひとつが、RGM-79FP(ジム・ストライカー)と呼ばれる機体である。

FP型は、その型式の末尾記号からも判る通り、F型やFD型の流れを汲む。対MS格闘戦を主眼に置いた機体であり、敵機に接近する過程における被弾に対処すべく、機体各所に新型の反応装甲「ウェラブル・アーマー」を増設している。その配置箇所は、上半身に重点を置いたF型と異なり、FD型のように下半身にまで及ぶ。特に機体前面のうち、コクピットや主機を含む「コアブロック」を内包する胴体や、各関節を覆うアーマーには、急激に増加装甲が施され、危険な近距離戦闘における生存性の向上に注力している。

当然、機体重量は増しに増し全備重量は76.3tに達したが、F

型系の伝統に則り、推進系の強化に努めている。ランドセルには、4発の大型ノズルを有する推力重視の設計を採用。さらに腰関節部、SP型と同系統のスラスター2基を備えた補助推進装置を搭載することで、爆発的な加速力を獲得することに成功している。ただし、大重量の機体を大推力で強引に推し進めるがために、戦闘機動時の機体制御には高い操縦技術が求められたという。また、脚部関節に対する負荷が激しく、通常のC型に比べると3分の2ほどの出撃回数で、部品交換が必要であったとの証言も残されている。

以上のように、相応のデメリットが存在したにせよ、優れた格闘戦能力を実現することに成功したFP型であったが、完成が終戦間際であったこともあり、本機の生産数はそれほど多くはなかった。一説によれば、戦中に製造されたのは、20機を下回るとされ、軍縮傾向が続いた戦後世界でも大量の追加生産は実施されなかったようだ。

なお、終戦後にランドセルなどの推進装置周りに手を加えた無重力下仕様機体も開発されている。本機のさらなる可能性が模索された結果であり、RX-B1AS(ジーライン・アサルトアーマー)やRMS-179(ジムII セミストライカー)などに技術は継承されていく。

Spec

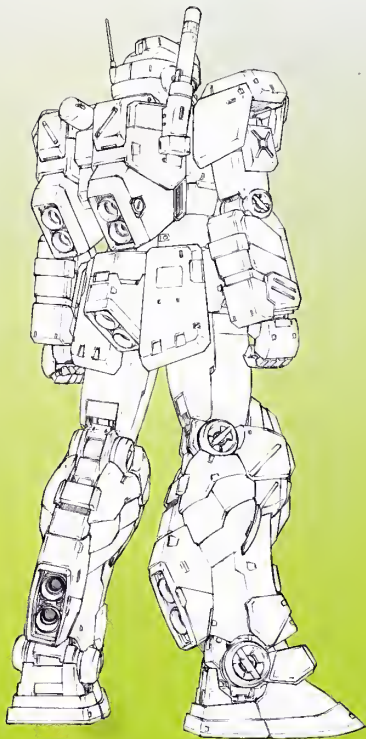
機元

型式: RGM-79FP
機体高: 18.0m
重量: 50.2t
全機重量: 76.3t
ジュネーター出力: 1.250kW
スラスター推力: 92,000kg
装甲材質: チタン・セラミック複合材
装甲: 100mmマシニング
ツイン・ビーム・スピア
ビームサーベル
60mm Vulcan砲
スバイク・シールド
グリップ・シールド



RGM-79FP ジム・ストライカー

RGM-79FP GM STRIKER



RGM-79FP ジム・ストライカー

RGM-79FP GM STRIKER

■RGM-79FP (ジム・ストライカー)
ジャブロー基地 MS教導団ネメシス
ユー・ジ・アルカナ中尉機

教導団は部隊ごとに各地の基地または駐屯地を渡り歩き、駐留の部隊に戦術訓練を施す。これは、様々な部隊がそれぞれに得た戦術や戦技といったものを全軍で共有するためのシステムといえる。したがって、部隊員に高い技術が求められるのはもちろん、配備される機体も多様な状況で再現しうる性能が要求される。ネメシスに配備された(ジム・ストライカー)は同時期に生産された機体の中でも、強化型と呼ばれるチューン・タイプであった。



新ユー・ジ・アルカナ中尉

カナダ(自治州)プロボクシング新人王、戦ベスト13という黄色の経歴を持つ人物で、軍へ志願した後、MSパイロットとして訓練を受け、バンクーバー基地に配属された。半年の間に3度の交戦を経験し、またたく間にMS4機を撃破。その後、私利私欲を捨てて、教導団「ネメシス」入りを選んだ。以後、北米各地を転戦し、キャリフォルニア・ベースの攻防戦にまで参戦。一年戦争を閉幕させた。

だが、あくまでも試験運用の域を出るものではなく、ついにその系譜は途絶えることとなる。戦後、ビーム兵器全盛の時代に突入していく中で、対実体弾用のウェラブル・アーマーの有効性は相対的に下がっていく運命にあり、致し方ない成り行きであったといえよう。

RGM-79FPの運用実績

13機が製造されたFP型の第1ロットは、評価試験を兼ねてエース級のパイロットが在籍する部隊に分散して配備されている。本機をして、しばしば「エースパイロット用の機体」と評されるのは、こうした経緯による。中でも有名なのが、連邦宇宙軍所屬の教導団「ネメシス」の機体である。

「ネメシス」は、大戦末期に創設が相次いだMS部隊の練度向上を目的として立ち上げられた教導部隊であり、各地からエース級の人材を集めて編成された。同様に配備されたFP型には、おもにユー・ジ・アルカナ中尉が搭乗。本来の教育任務のみならず、実戦にも投入された結果、U.C.0079年11月から12月にかけての約2ヶ月間で、20機を上回るMSを撃墜している。なお、「ネメシス」に配備された機体は、第1ロットの中でも出力が調整された

「強化型」と呼ばれるタイプであったという。

このほか、アフリカ戦線や中央アジア方面にも送られており、各地の激戦区で一定の戦果を挙げている。例えば、オデッサ作戦後にアフリカ大陸に進出したヨーロッパ方面軍の第6軍でも、3機種のFP型を受領。アデン方面へと進軍する過程で、MS通算8機撃墜のライオネル・プリンス少尉など、エースパイロットを輩出している。

とはいえ、格闘戦重視という機体の性格上、他機種に比べて被弾率も高く、終戦を待たずにスクラップと化すケースも少なくなかった。前述のユー・ジ・アルカナ中尉機にしても、次々と撃墜スコアを計上する一方で、度々小中破を繰り返し、最後の戦いとなったキャリフォルニア・ベース攻防戦においては、左腕全損失、右腕半損壊という有り様で、戦闘続行が不可能な状態に陥っている。したがって「生存率」の面では、決して優れた数値を残してはおらず、本機の総合的な評価を低くする結果となった。

戦後で目立った活躍としてファントム・スイープ隊へ配備された機体があり、U.C.0081年に起きたジオン残党によるニュー・ヨーク市占拠事件でも、ロバート・ハートレイ中尉によって運用された事実が確認されている。

RGM-79FP

ジム・ストライカー

本機は大戦末期にロールアウトしたRGM-79C(ジム改)をベースとしたバリエーション機のひとつで接近戦に特化した機体である。本来、次期主力機として開発されたC型は、その余裕あるフレーム設計から、早期よりバリエーション開発が期待されていた。その中でもアフリカ、中央アジア、ヨーロッパといった戦線の一部得兵から強く要望されていたのが「対MS戦における格闘性能の向上」であった。接敵時に被弾を食い止めるための追加装甲と、その装甲重量増加を克服しうる大推力による加速性能という相反する要求をバランスさせた機体として誕生した。

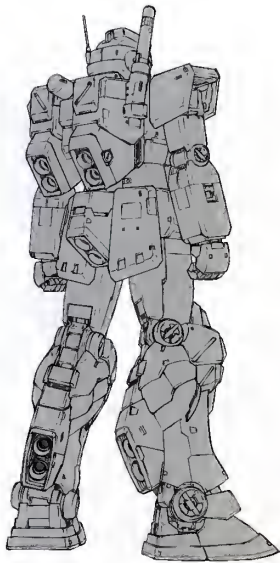
頭部ユニット

C型の外殻装甲であるが、宇宙用装備を搭載しない形で再設計されている。特に組み立て精度の高い部材を抽出し、専用の生産ラインにてアッセンブルを行っている。

頭頂部のメイン・カメラ・ユニット、顔部、フェイスを含むチーク・アーマーが追加装甲にて保護されている。装甲形状についてはF/D型などの被弾状況のデータを参考にしてのもの独自の高いものとなった。メイン・カメラは本来の位置よりも前方に、オーバーラップ装甲で覆われた追加装備内へと置換されている。このメイン・カメラ部から左右にブリッジ型の装甲が延び、耳部分のクーリングダクトに接続される。ブリッジ装甲には追尾用センサーが装備されており、ガンダムタイプの頭部カメラ同様のシステムで、自標物を立体視で捉えつつ正確な測距を行うことが可能である。これら追加センサーの演算処理機材は、頭部から空間戦闘用装備と頭部バルカンを撤去して確保されたスペースに設置されている。この追加センサーにより至近距離で唐突な軌道変更を行う敵機をロスせず、追尾することが可能となっている。

グレイズ・シールドは特に変更はなく、内部に構築された感受機やセンサー類のレイアウトも大幅な変更はない。マウスガードの装甲厚にも変化はないが、左右のチーク・アーマーはフェイスから顔のアウトレットを避けながら耳部クーリングダクトまでを完全に保護している。なお顔アウトレットには非爆発性反応装甲がマウントされ、中央のスリットから強制排気を行っている。

この頭部ユニット正面部75%に及ぶ追加装甲は、他の追加装甲を施したジム・ファミリーやフル・アーマー・オペレーションにも見られないコンセプトである。これは本機の胸部外殻に装着される追加装甲が爆発性反応装甲であることが大きく影響し、着弾時に爆散する破片に対応する意味合いも強く、また事実、自機の反応装甲によりグレイズ・シールドが破損するといった事故も

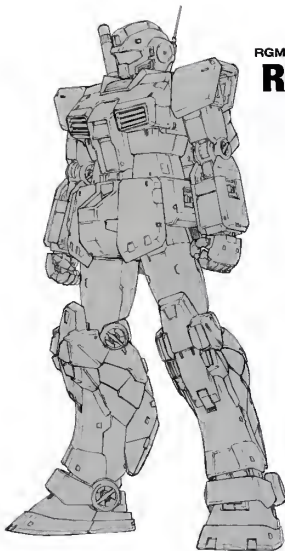


少数ながら報告されていたようだ。

胸部ユニット

C型の外殻には、コクピット周辺を中心として爆発性反応装甲であるウェラブル・アーマーが追加装甲として装着されている。これら装甲のレイアウトはRX-78(ガンダム)で試作・検討がなされた「フル・アーマー・オペレーション」に準じるものであり、その類似性を確認することができる。これはもともと、RX-78-4などの機体が「今後の重圧機のための各種テスト」に使用されており、そこで蓄積された耐圧性係数のデータがジャブロー工産内で共有されていたことを示す一例のひとつかもしれない。

コクピット・カバーはセパレート構造となっているがアッパー・



RGM-79FP ジム・ストライカー（増加装甲未装着）

RGM-79FP (STRIP)

■この図は、RGM-79FP(ジム・ストライカー)の増加装甲を付した状態を示す。開発母体となったのはルナツー工廠製のC型であり、この状態だと外観的な印象が酷似していることが分かる。

ハッチは固定され、メイン・ハッチのみがいったん下方にドロップしてから展開する。メイン・ハッチの装甲厚は正面で80mmとなり、ハッチ開閉には高トルクのアクチュエーター・ユニットが組み込まれている。なお、このアッパー・ハッチはバランスウェイトとしても機能している。機体重心付近の安定軸線からやや外れた位置に重量を配することで機体はアンバランスな状態となる。これをライディング・コントロールと組み合わせることでスラスタ・ノズルを使用したダッシュやジャンプなど、一連の姿勢変化の大きい挙動への移行がスムーズになるのである。加えて、機体各部に増設された姿勢制御スラスタの併用は自兵銃の際、大きなアドバンテージを生むことになっていたようだ。

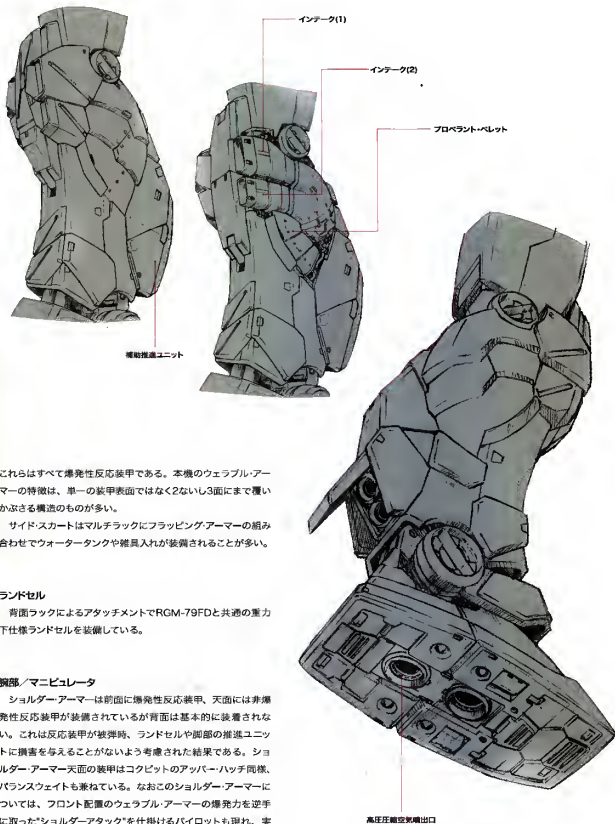
搭載されるジェネレーターに変更はないが、胸部メイン・ダクトは冷却用機材が増設されることとなった。増強された推力を

生み出す主推進器に加え、臀部に増設されたスラスタのクーリングも当然、必要とされたからだ。

コクピットが存在するヴェントロ・アーマーについては、融合炉の内包やコクピットへの直接攻撃(強い撃ち)などへの対応として、腹部の可動に干渉しないよう上方、下方の各ブロック正面に60mm装甲を装着している。

腰ブロック

ボディ同様、おもに機体前面に集中して増加装甲処理が施されている。ロウア・シヤシー前部の張り出しには上面から下方まで都合3ピース構造のウェラブル・アーマーが装備された。またフロント・スカートも表面積の92%を覆う装甲が用意される。なお



これらはすべて爆発性反応装甲である。本機のウェラブル・アーマーの特徴は、単一の装甲表面ではなく2ないし3面にまで覆いかぶさる構造のことが多い。

サイドスカートはマルチラックにフラッシングアーマーの組み合わせでウォータータンクや燃料入れが装備されることが多い。

ランドセル

背面ラックによるアタッチメントでRGM-79FDと共通の重力下仕様ランドセルを装備している。

胸部／マニピュレータ

ショルダーアーマーは前面に爆発性反応装甲、天面には非爆発性反応装甲が装備されているが背面は基本的に装着されない。これは反応装甲が被弾時、ランドセルや脚部の推進ユニットに損害を与えることがないよう考慮された結果である。ショルダーアーマー天面の装甲はコクピットのアッパー・ハッチ同様、バランスウェイトも兼ねている。なおこのショルダーアーマーについては、フロント配置のウェラブル・アーマーの爆発力を逆手に取った“ショルダーアタック”を仕掛けるパイロットも現れ、実

■RGM-79FP (ジム・ストライカー)
#T02 北米ハミルトン基地 第5独立試験MS中隊

北米ハミルトン基地のMS試験部隊に配備された1号機であり、主に基本性能や各種武装等の試験として公国軍MSとの実戦に何度か投入された。実戦経験を何人も獲んだ大尉に配備されたが近接戦闘特化という特殊な仕様もあり、基本性能は良かったがあまり大きな戦果は得られなかった。後にこのデータを元に強化型が開発されている。



際に交戦記録も残されている。ガンカメラの記録では、敵MSの左胸部にヒット、左腕付け根を損壊させ戦闘不能としている。この際の(ジム・ストライカー)当該機の損害は、肩アーマー全損と肩関節ユニットの駆動系パーツ25%交換となっているので、あながち悪いキルレシオとは言いがたいのも事実であった。だが戦機が複数の場合は事後の戦況に影響することが懸念されるはいうまでもなく、積極的な使用は推奨されていない。

前腕部追加装甲は、扱う主要武装がビーム・サーベル、ツインビームランス、ビーム・ジャベリンなどとなるため、末端部に近い手首付近の装甲をバランスウェイトとして配している。当然この重量増加に対しての対策として、関節の強化改修も行われていた。肘関節のリングは成型肉厚を8%増加、駆動用フィールドモーターは高トルク仕様のm680-ae5を採用、これは特に重装甲で知られる(デザート・ゾム)の肘関節と共通のモデルである。

脚部ユニット

RGM-79FD(装甲強化型ジム)同様、ホバリング走行機能をも

有するには至らなかったものの、ランドセルの4基のメイン・スラスター、ロウ・アジャスター・臀部2基のサブ・スラスターに加え、胴部にも各2基ずつ装備された補助推進ノズルによって、驚異的な駆動力を獲得するに至った。

補助推進ユニットの装着は、C型の脚ユニット下腿を専用フレームへと交換する必要がある。そのため補助推進ユニットを現地改修キットとして提供することは叶わず、フレーム交換とフィッティング、推力偏向調整と燃焼テストが行える大規模施設での改修であれば可能だと判断された。もともと、本機はそもそも近接戦闘という特殊な環境下で最大の効果を獲得できる優秀なパイロットを抽出しての機体支給が原則となっているため、現地改修というパッケージがジャブロー工廠から許諾されたことは一例もなかったという。つまり本機はFD型とは設計思想が異なり、補助推進ユニット込みでの脚部設計がなされており、ユニットを外した状態での運用は考慮されていない。前線で“ポン付け”できるような装備ではなかったのである。

歴後方に装備されるスラスターユニットはFD型と同じ機材を使用しているが、肩アーマー脇のエアインテークを上下2対のタ

CAUTION/MODEX : RGM-79FP

RGM-79FP コーション/ モデックス



ンデム構造として空気流入量を拡大。圧縮機は空力的抵抗を考慮し、駆動部のバルジに収める形を採用したが、出力に変更はない。タンデムとした理由は、開口部を単に縦に広げただけでは強度が下がり、横方向からの衝撃に対してインテークの構造が保たないためである。シングルとして内部にステアーを入れ補強などの試作も行われたが、最終的にはタンデム構造が強度的に有利であると結論づけられ、採用された。

機体下部スペースにはプロペラント・ベレットをレイアウトしている。エアインテーク入り口には境界層分離板を前方に突き出し、スムーズな吸気を行う。インテーク内部には不純物吸入

防止用のフィルターが設置されているが、クリーニングのスパンは150時間、フィルター交換は約800時間を目安としている。

駆動部外殻の装甲は下方から上方へと塔面が被さるデザインとなっているが、このオーバーラップした部分はスリットとなっており、圧縮機からの排熱の一部はここから放出される。またメンテナンス時は2層目と3層目の外殻をクランクヒンジで展開することで外殻装甲を取り外すことなく、設置されたプロペラント・ベレットを交換できる。

タンデム配置のスラスター・ノズルは、-8度、+18度、左右5度ずつまで可動し推力軸線をコントロールすることが可能となってい

DO NOT CRASH



(操縦要領を参照してください)

SENSOR
ACCESS

SENSOR
ACCESS

DANGER

SENSOR UNIT
ACCESS

EJECTING
ACCESS

CAUTION
SCENARIO OF BUST

SENSOR
ACCESS

SENSOR UNIT
ACCESS

DANGER

SENSOR UNIT
ACCESS



る。また同時に下駄ユニットそのものを動かし、任意の機動を得ることができる。ただし、操縦には個人差はあるものの最低でも240時間の慣熟期間が必要とされ、操縦支援プログラムを使用してもなお、パイロット個人の技量とセンスが求められる。

膝前面に装備されるウェラブル・アーマーは下方のエルボー・ヒンジで跳ね上げ、内郭装甲とフレームのメンテナンスが可能となっている。

腿下方も正面から外側面に回り込む形で、また足首カバーにもフロントと両サイドの3ピース構成のウェラブル・アーマーが装着されている。この部位については、その重量がすべて足首の関節ユニットへの負担となることが懸念され、緩衝機構と接続フランジが強化されている。そのため、足首関節の可動範囲は6.2%低下することとなったが、機体制御に大きな影響はないとの判断がなされた。

RGM-79FC

ストライカー・カスタム



■RGM-79FC(ストライカー・カスタム)としては最も多くの資料が残る機体のカラーリングである。同機はもとより相手に与える視覚的・心理的効果も期待してガンダムタイプMSの頭部を採用した経緯があり、白を基調とした塗装もその一環であると考えられる。

一年戦争は、地球連邦政府とジオン共和国との停戦合意に基づき、U.C.0080年に終戦を迎えた。しかし、公軍残党勢力による抵抗は地球の内外を問わず各地で続き、多くの犠牲が出たことは歴史の知るところである。特に問題となったのが、大戦中に投入されたMSを用いたテロ行為だ。たった数人の小規模グループであったとしても、1機のMSを保有するだけで脅威度は格段に増す。そして、悲しいかな、地球圏には数大な数のMSが取り残されていた。

だが、こうした状況を逆説的に考えれば、反政府勢力が保有するMSの頭数を減らすことができれば、効率的にその力を削ぐことができるともいえる。治安維持に当たっていた各地の前線部隊から、対MS格闘戦に特化した次世代機を望む声が上がったのも頷ける話といえよう。

とはいえ、本命視されていたRX-81計画が事実上の中止に追い込まれるほど、軍縮の嵐が吹き荒れていた戦後の連邦軍において、新規開発計画の立ち上げは容易なことではなかった。かくして大戦中に一定の評価を得ていた格闘戦機、RGM-79FP(ジ

ム・ストライカー)をベースに、各種アップデートを施すことで次世代格闘戦機の代替とするという構想が提案されることになる。

陸戦機であったFP型に、空間戦装備を盛り込むことで汎用性を拡張。新型ランドセルを採用して総推力を増しつつ、RGM-79G系列向けの高出力ジェネレーターを搭載することで、ビーム兵器の安定動作を保证する。さらには、新型兵装のテストベッドとしても用いるとの口上で、軍上層部への説得交渉が行われた結果、晴れて正式な承認を得たこのプランには、RGM-79FCの型式番号が与えられることとなったのである。

以上のような経緯で開発されたRGM-79FC(ストライカー・カスタム)には、ヒートロッドの技術を応用した電気兵器「スパークナックル」や、吸着爆弾の一種である「バースト・ナックル」、組み合わせることで双刃の薙刀状で運用できる「ツインビーム・サーベル」など、独創的な装備が用意された。一説では、ニュータイプ研究に関連した特殊システムの実験も計画されていたとも伝えられるが、その点に関しては確たる証拠となる資料が残っていない。

Spec

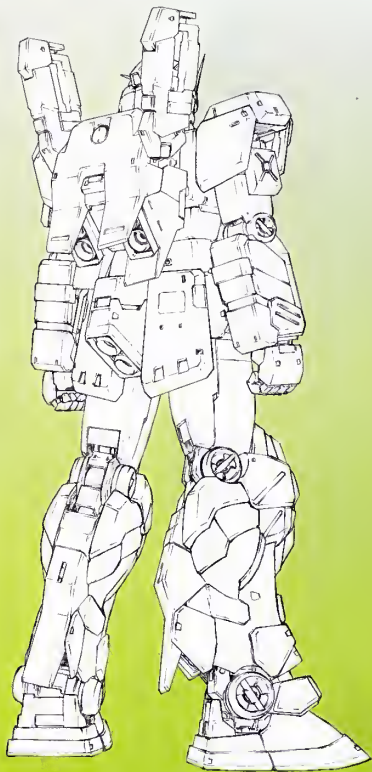
機元

型式/RGM-79FC
全高:18.0m
重量:50.2t(45.2t)
全機重量:76.3t
ジェネレーター出力:1.380kW
スラスター推力:94,000kg
装甲材質:チタン・セラミック複合材
武装:ビーム・サーベルx2
頭部ミールカン砲
スパーク・ナックルx2
バースト・ナックルx2
ナックル・ダガーx2
ツイン・ビーム・サーベル
スパイク・シールド改
100ミリマシンガン



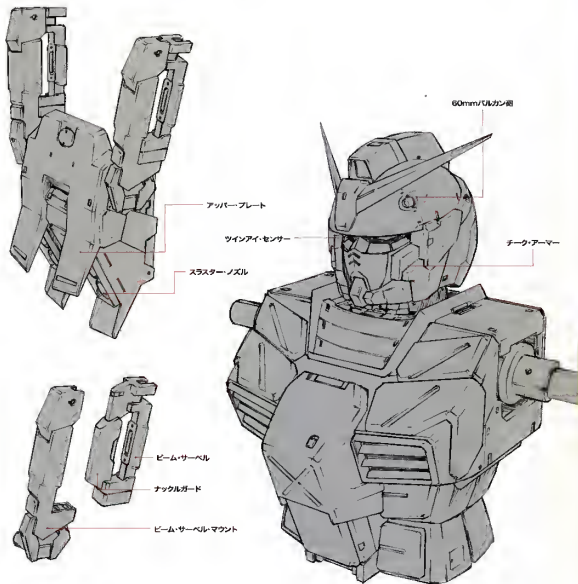
RGM-79FC ストライカー・カスタム

RGM-79FC STRIKER CUSTOM



RGM-79FC ストライカー・カスタム

RGM-79FC STRIKER CUSTOM



外観の変更点は、機体各部に姿勢制御スラスターの追加、空間戦闘用高機動ランドセルと脚部ユニット、そしてツインアイ方式を採用した通称「ガンダムヘッド」の採用であった。

この機体に限らず、グリプス戦役に前後して行われたニュータイプ関連技術は、高い機密性のベールに覆われており、判然としないことが多い。特に非人道的として後に非難の対象となった強化人間関連技術は、法の裁きを避けるために関係者によって能動的に資料が破壊されたケースが多く、まさに「研究者泣かせ」の状態となっているのである。

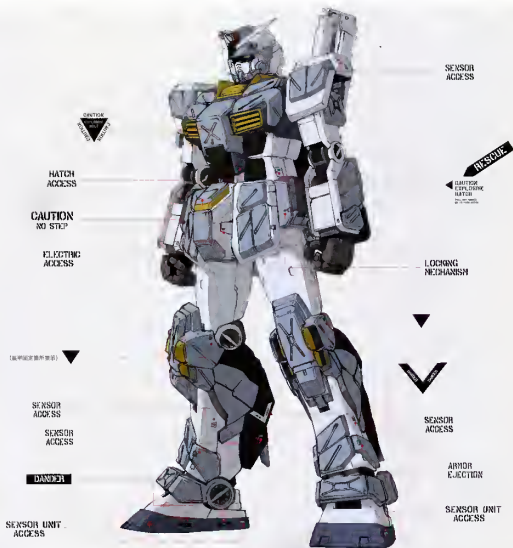
なお、本機はU.C.0084年以降に少ないながらも数機が製造され、連邦軍対破壊工作特殊捜査旅団(BGST)などに配備されたとの記録が残されている。

頭部ユニット

本機を最も特徴付けているのは、ツインアイを有していたいわゆるガンダムヘッドの装備である。これは重力下仕様(ジム・ストライカー)において、顔部のブリッジ装甲に追加された並列追尾システムが、結果としてツインアイタイプの感受機と同等であったことから選定されたようだ。敵機との近接時高機動戦闘においては、モノアイタイプの感受機よりも、並列センサーの三角測量による正確な測距と、指向性レーダーを装備したツインアイシステムのガンダムヘッドの有効性が、特殊な環境での戦闘において評価されたものといえる。また同時にガンダムヘッドの、敵機に与える心理的影響の大きさも選定理由のひとつと考えられている。

CAUTION/MODEX : RGM-79FC

RGM-79FG コーション/ モデックス



フェイス部には非爆発性反応装甲のデーク・アーマーを追加、前方探知レーダーを収めたチン・ガード、フェイス側方のテンブル・ガードとともに、ガンダムタイプとしてはめずらしい無骨なシルエットを形成している。

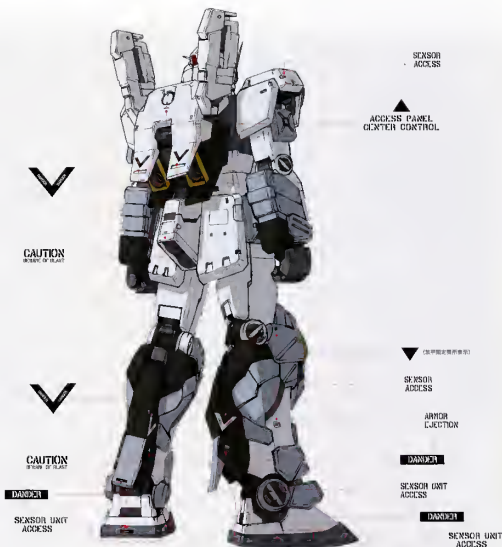
60mmバルカン砲も搭載されているが、頭部フレーム内への冷却ユニットの増設により、装弾数は制限されることとなった。

ランドセル

空間戦闘仕様として新規に設計されたランドセルは、他のジム・ファミリーとは一線を画し、幾何学的なラインで構成された

独自の形状となっている。主推進器は重力下仕様の主機をベースとしており、スラスター・ノズルは左右2基ずつをユニットとし、下方30度に固定している。ノズル自体は+15度、-8度、左右に4度ずつ可動し、推力偏向を行うことが可能となっている。スラスター上下にはデフレクタープレートが装備され、推力拡散の最小化が図られている。なおデフレクターは左右一体のアップパープレートが+8度まで開放できる。

固定武装として専用のナックルガードを装備したビーム・サーベルが2基、ジオン公国軍のヒートロッドのシステムを応用した打突兵器(俗称:スパーク・ナックル)といった近接戦闘用の兵装を、左右の動力ライン付きウェポンラッチに装着している。なお中央



のウェポンラッチには、オプションでプロペラント・タンクを装着することも可能となっている。

脚部ユニット

重力下仕様のスラスター・ユニットをベースとしているのはランドセルと同様である。主機の機能はそのまましながら、スラスター・ノズルは推力軸線を集束する形状へと見直されている。その結果ノズル径は極小したものの、ノズルあたりの出力は向上している。

スラスター・ユニットはこちらも下方30度に固定され、デフレ

クタープレートが装備されている。デフレクターは+5度まで開放が可能で推力軸線の制御を行うことが可能となっているが、通常は最小開度で固定されるのが基本となる。なおデフレクター内には冷却デバイスが追加され、中央のスリットからの強制排熱が行われている。

FP型で採用され、機動性の向上という点で一定の評価を得た膝装甲左右のカウンター・バーニアは、インデックともども引き続き搭載されている。膝後方の補助インデックは、装甲形状の変更により吸気効率も低下しているが、こちらも機能としては活かされている。脛関節左右にはプロペラント・ベレットが追加され、外殻装甲形状も再設計された。

RGM-79S

ジム・スバルタン



■これはRGM-79S(ジム・スバルタン)の標準的なカラーリングである。熱帯及び亜熱帯のジャングル戦において高い迷彩効果を実現した。さらに同機は、アラミド繊維製のカーモフラージュジャケットで機体をカバーして運用されることもあったという。

RGM-79FPが、ジャブロー工廠製の次世代汎用仕様機であるC型から派生した機体であることはすでに述べた。これに対し、オーガスタ工廠製の高性能機であるG型に対して、重装甲化改修を施した機体を紹介しよう。

G/GS型系フレームを用いたバリエーション機として、最も有名な機体といえばRGM-79SP(ジム・スナイパーカスタムII)であろう。大戦末期の当時、最高の完成度を誇っていたG型を母体に、RGM-79系の全面性能向上計画として開発が進められていたSC型(いわゆる「ジム・スナイパーカスタム」)のコンセプトを転用した機体である。このSP型も、装甲と推力の強化(むしろ、ジェネレーター出力やセンサー類にも大幅に手が増えられていた)によって、戦闘能力の向上を目指すという点では、F型の系譜と類似しているといえるだろう。しかし、SP型の雛形ともいえる機体が、それ以前に実用化されていたことは、あまり知られていない。

RGM-79S(ジム・スバルタン)と呼ばれる機体がそれである。S型は、亜熱帯での運用を念頭に置いたG型系列のバリエーション機として生み出された。オーガスタ工廠の生産ラインか

ら抽出された数機のG型系フレームに、後のSP型とよく似た形状の増加装甲を追加。出力向上型のランドセルを装備させることで重量増を補うという、まさにF型と同様の改修が行われていたのだ。装甲の増設箇所を、熱帯の樹木で下半身が隠されることを考慮し、胸部や肩部といった上半身に絞っている点も、まさにF型と同じである。

さらにS型では、バルスナイフや投光器など近接戦闘を想定した独自の装備を採用。また、隠密性を高めるための試みとして、赤外線遮断シートやスモーク・ディスチャージャー、簡易ミノフスキー粒子散布ボッドを装備している。後者の追加装備に関しては、多分に実験的な要素が含まれており、実用性の面でも疑問符の付くものであったが、当時の連邦軍兵器開発局の試行錯誤の形跡として、興味深いものといえよう。

ともかく、S型で試された増加装甲及び推力強化という施策は、おおむね良好な結果を示し、続く形で開発されたSP型に、ほぼそのままの形で踏襲されている。ただし、増加装甲が実体弾を意識した反応装甲ではない点に注目したい。

ジャブロー工廠で発展を遂げたF型系列の機体が、機体に

Spec

諸元

型式: RGM-79S
総高: 18.0m
重量: 43.6t
全機重量: 61.7t
ジェネレーター出力: 1,250kw
スラスター推力: 67,800kg
装甲材質: チタン・セラミック複合材
武装: 専用ハンドガン(8ニガン)

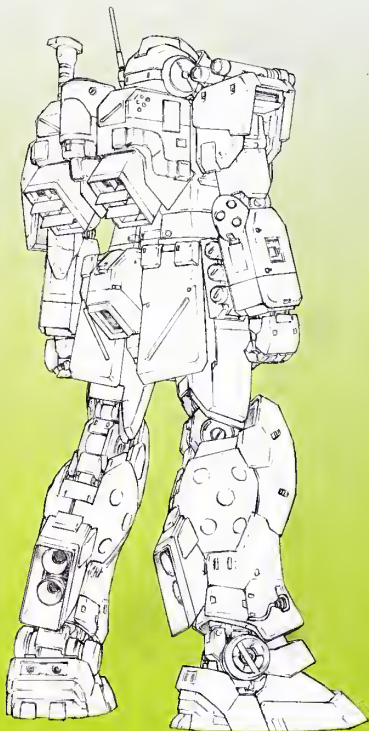
ヒートタイプ

肩関節下式ショート・シールド
スモークディスチャージヤー
WANM(有線対艦ミサイル)
赤外線遮断シート
M粒子散布ボット



RGM-79S ジム・スパルタン

RGM-79S GM SPARTAN



RGM-79S ジム・スバルタン

RGM-79S GM SPARTAN

■これは一応、従来型に実装されたRX-78(Gジム・スバル6タンク)のうち、U.C.0079年12月にロールアウトした1機である。北米に先送りされた本機は開発までにMS-06G(イグワ)やMS-06D(ドム)など合わせて20機を“寄せ”するスタッフを挙げているほか、恐らく同一と思われる機体がグリブス戦役でカブラの部隊の1機として作戦行動に参加していたとの未確認情報がある。正式決定していたにも関わらず、資金を枯渇として後のMSに方向転換を見せたという。



反応装甲を直接増設する方向で発展していったのは対照的に、オーガスタ工廠では通常の装甲材を用いながらも、装甲形状を工夫することによって跳弾しやすくなる方向(被弾経始)に力が注がれていた。もちろんオーガスタ工廠でも、MSへの反応装甲の運用を研究していたが、彼らはあくまでも着脱式のオプション装備として考えていたのである。オーガスタ工廠製の試作機、RX-78NT-1(ガンダム)“アレックス”(以下、RX-78NT-1(アレックス))で試された、「チョバム・アーマー」が、その代表例だ。当時、オーガスタ工廠に在籍していた技術スタッフの多くが、MS用携行火器のビーム兵器化の流れを見越した上で、反応装甲は作戦に応じた選択肢のひとつとして用意すべきと見ていたのである。

RGM-79Sの運用実績

亜熱帯地域という局地での運用を念頭に開発されたS型は、ロールアウト後にジャブロー本部基地に送られ、評価試験が行われた。高温多湿なアマゾンの熱帯雨林で、基礎的な項目の

チェックを行った後、いくつかの調整を経て限定的な生産を開始。そのほとんどがアジア方面に送られたようだ。

現存する数少ない記録によれば、U.C.0079年11月末、アジア方面に展開していた第17機甲海兵師団に、少なくとも3機のS型が配備されている。このうち1機を受領した同師団麾下の第2特務小隊は、12月に入るとブルネイ方面の反攻作戦を支援するため、亜熱帯の森を突き進みキナバルブルーネイ間を威力偵察。後に公国軍の輸送部隊を発見してこれを撃滅し、補給ルートを切り裂いて後方を攪乱することに成功している。彼らの活躍により、カリマンタン島を奪還した連邦軍は、次々と東南アジアの島々から公国軍を駆逐していった。

本機は、決して突出した戦果を挙げたわけではなかったが、MSという新兵器を亜熱帯の密林という環境に適応させる道筋を切り拓いたという点においては、評価されるべきであろう。第17機甲海兵師団によってもたらされた運用データは、足場の悪い森林地帯での歩行プログラムの改善に大きく寄与したともいわれており、後のMS制御システム開発にも活かされたのである。



■RGM-79S(ジム・コマンド)

RGM-79S(ジム・スバルタン)は、一年戦争
後期に登場した量産機RGM-79G/GS系列
の機体で、直線的にはRGM-79SP(ジム・ス
ナイパーII)をベースとしている。

RGM-79S

ジム・スバルタン

頭部ユニット

G型をベースとしているため、基本的にはレール可動可能なモノアイ方式のメイン・カメラが採用されている。特に本機はおもに接近戦での使用を念頭に開発されているため、可視範囲の広い、また対象追従性が高いモノアイ方式は打ってつけの装備であった。

顔の主感受機をカバーするオーバーラップ装甲は追加メイン・カメラから「耳」装甲へ1ピースのブリッジで構成される。この装甲が射線に大きく干渉するため、頭部にバルカン砲は搭載されていない。バルカン砲を装備しないことによって耳装甲はシンプルな円筒形アーマーを装備することとなった。このアーマーのセンター部にはマルチコネクティング・ラッチが用意されており、バルカンポッドなどの外装式兵装の装着が可能となっている。顔面正面から頬にかけては15mm厚の1ピース成型のチーク・アーマーを装着している。ここは被弾時、メイン・カメラなど感受器への影響を考慮し、非爆発性反応装甲が装着されている。「耳」装甲外周の上部にはスモーク・ディスチャージャーがマウントされるが、左右双方もしくは任意で片側に装備されることがある。バルカン砲を撤去し空間に余裕が生まれた頭部内郭には指向性通信機と冷却デバイスが収められ、頭部ユニットの左後方には通信用ポールアンテナが装備されている。

胸部ユニット

本機は、密林などで待機の状態にあって上空を飛行するであろう敵偵察機などの熱源探知センサーに可能な限り反応しにくくする目的での胸部装甲が必要とされた。そのため、MS稼働において重要な著・排熱を司る胸部メイン・ダクトをカバーする装甲が用意された。この胸部装甲は前方に大きくオーバーラップしながら、同時にコクピット・カバー側面の72%を保護するような複雑な面構成をなしている。その内郭にはメイン・ダクトからの排熱をいったん冷却し、その一部を胸部装甲下面のダクトから排出する冷却デバイスが内蔵されている。また一部は肩部インテークから再度吸気されエンジン主機冷却とは別に、ランドセルのメイン・ノズル外周のスリットへとバイパスさせ、こちらも排出温度を下げたのち放出される。この思い切った冷却デバイスのレイアウトは功を奏し、機体の熱暴走による主機への影響が報告された事例はなかった。

コクピット・カバー形状はG/GD型そのままだが、ハッチ左右、ヴェントロ・アーマー(腹部装甲)の正面上方には25mm厚の装甲が懸架されている。これは純粋な防弾機能よりも胸部周辺の赤外線反応を低下させる目的が強い。

肩インテーク部にも防弾板が設けられているが、これはD型系列機の実戦運用によって破片などの取入による故障が少なく

■HGGM-79SP(ジム・スナイパーII)
 RGM-79SP(ジム・スナイパーII)のベースとなった
 機体で、「スナイパー」とも付けられているが、
 様々な戦場に対応できる汎用性を有し、後の
 近衛MSの進化に大きな影響を与えた。



なかったことによる。細いスリットからの吸入により吸気効率は
 わずかに落ちるが、防弾効果を優先している。なお肩上面と胸
 部装甲底面には高感度環境センサーが設置され、周辺環境の外
 気温、湿度、風向、動体の有無を観測する。ターゲット基部の
 首前方にも装甲が追加され、後述のカモフラージュジャケット
 装着用ラッチが用意されている。

胸部装甲はチタン・セラミック複合の非爆発性反応装甲となっ
 ている。これらが胸部のメイン・ダクトや肩部のジェネレーター、
 冷却用インテークまで大きくカバーしているという設計は他に例
 を見ない。これは本機が密林地帯などの遮蔽物に隠伏した状態
 で敵機を迎撃するという特殊任務を前提とした機体だからである。
 そのため機体表面には、レーダー波を反射しないグラファ
 イト/エポキシ複合材による電波吸収塗料が塗布されレーダー波
 の反応が最小限に抑えられている。このコーティングによって機
 体重量は290kgほど増加することとなる。

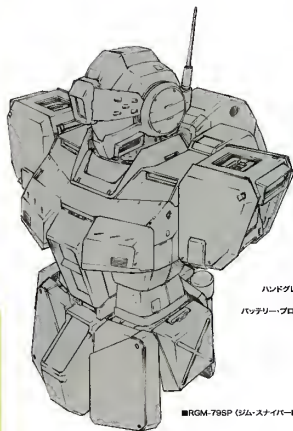
装甲形状に関しては、高い被弾経始を特に重視したものでは
 ないが、装甲表面各部のフックポイントはカモフラージュ・ジャ
 ケットがバツかきないよう電気磁気式により動きを押さえる役割
 を持つ。このカモフラージュ・ジャケットはショルダー・アーマー以
 下の機体全周をカバーすることが可能で、一部組成に違いがあ

るものの、基本的にはFD型の関節に使用される防塵シーリング
 材に近い布である。関節部への巻き込み事故を防止するため、
 圧電繊維の織り込みによるモニタリングは行われているが、あく
 まで熱源センサー、気流センサーなどによる探知を欺瞞するこ
 とが目的であり、耐弾性能力が目的の、最外層へのチタン合金
 繊維の織り込みは行われていない。

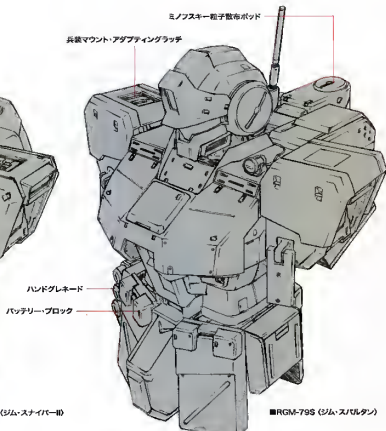
腰ブロック

G/GD型のロウ・ア・シャシーを基本とし、中央下部に装甲を追
 加。臀部にはFD型と同型のリニアノズルが増設され、さらに強
 力な推力を得ることとなった。このノズルはFD型同様、内部に
 偏向装置を持ちスラスト軸線変更も可能としながら、被弾知性
 の高いものとなっている。

フロント/リア・スカートは左右対称形のステップ・ロングタ
 イプ。これは大腿部の中央付近にまで延長された形状で、本来
 装備されているスカートを撤去したのち装備される。この装甲
 は上部の厚みのある裏面に補助ジェネレーター、下部にプロペ
 ラント・ベレットを内包しており、上端のバッテリー・ブロックとも
 ども長期間に渡る作戦行動の際に作戦行動時間の延長を目的と



■RGM-79SP (ジム・スナイパーII)



■RGM-79S (ジム・スバルタン)

した装備のひとつである。特にバッテリー・ブロックは主機を運転しない状態で行われる素敵などの電力供給に使用される。なお装甲表面の多目的アジャスティング・ラッチには増加装甲や予備弾倉などがマウント可能である。

サイド・スカートは、左右ともマルチラックにプロペラント・タンクという組み合わせが一般的だが、本機は右サイド・スカートをマルチランチャーに換装、ハンドグレネードを3基、装備している。なお左サイドはオプションラックに増加装甲を組み合わせている。

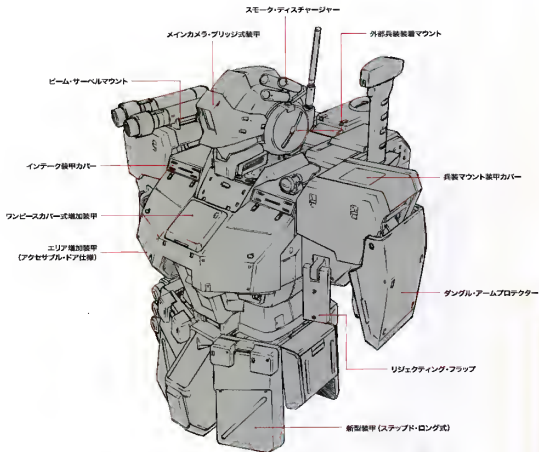
ランドセル

ランドセルは機体背面のラックに懸架する方式のため、専用機材としての開発は比較的スムーズであった。左右に二分割レイアウトされた主推進デバイスは角型のスラスター・ノズルを下方45度で固定する。

スラスターは角型のリニアノズルで、スラスターの排気温度を

下げるため、主機そのものは奥まった位置にレイアウトされ、噴射口のルーバーはセラミック系の超耐熱改質複合素材で成型されている。前述の通り、胸部増加装甲内のメインダクトからランドセル側面のバイパスを通じノズル外周スリットから排熱を行っているが、その冷却された排気をスラスター側にも混合することで赤外線反応を下げている。

ランドセル中央上部にはミノフスキー粒子散布ボッドが装備されている。MSによるミノフスキー粒子散布については、地形や気候などの外的要因が大きく影響するが、単機での搭載量ではおよそ半径1km程度を戦闘圏度とするのが限界であったとの計算値が公開されている。この装備については、多分に実験的要素が強かったことは想像に難くない。本機以降、MSにミノフスキー粒子散布ボッドを装備させた機体が存在していないことから、この装備が異物であったことの証左といえるだろう。しかし、である。本機に搭乗するパイロットにとって、この装備は心理的に大きく作用していたのではないだろうか。アンブッシュという極めて精神的負荷の大きい状態での任務には、およ



その短時間で範囲も敵々たる効果であったとしても、必要な装備であったのではないだろうか。

ランドセルが大型化している理由のひとつに、熱交換器の内蔵が挙げられる。MSにとって排熱は、機体を正常な状態に保っていく上で必要不可欠な要素である。胸部メイン・ダクトからの排熱はリニアノズル上方にレイアウトされた熱交換器へと送られる。前述の通り、ここで冷却された排気をスラスターに混合する一方で、この排熱をタービン駆動に利用し蓄電、主推進器のアイドリングを切った状態でも充電池による短時間の機体稼働に使用することも可能としている。

ランドセル左側面に装備される近接戦闘用バルスナイフは、隠密行動を主任務とする本機ならではの装備といえる。RGM-79 系列機に搭載されるジェネレーター出力であればビーム・サーベルの運用はむろん、問題ない。だが本機の戦闘様式はあくまで隠密行動であり、敵機の運動性能を奪うことが目的なのである。むしろ懸念されるのはプロバレントタンクへの引火・誘爆であり、またビーム兵器使用による遠方からの探知、赤外線反応といっ

た危険性である。その結果、近接戦闘用の主兵器は打突兵器もしくはジオン公国軍のビート・ホーク相当の実体兵器が最良と判断されたのである。本機に搭載されるバルスナイフはヤシマ重工製で、グリップ部に内蔵されたコネクタから本体のジェネレーターへと接続、刀身部分を超音波振動させるものである。なお連続運用可能時間はビーム・サーベルのそれと大差ない。バルスナイフという名称はあくまで俗称であり、実際の仕様書や連邦政府の公式書類でその記載を見ることはできない。

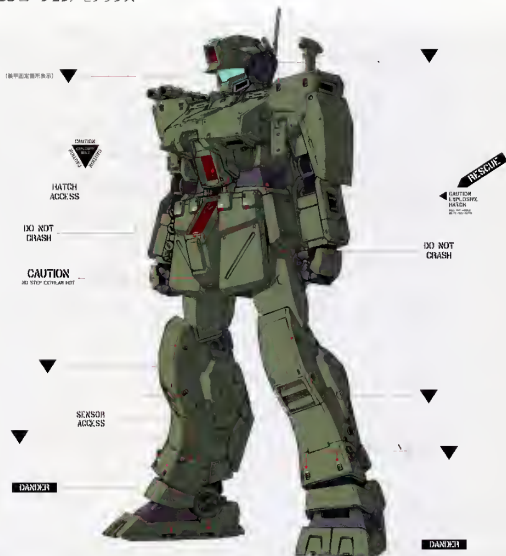
腕部／マニピュレータ

腕部そのものはG/GD型そのままだが、ショルダー・アーマー前後と天面に追加装甲を装備している。ショルダー・アーマー側面の姿勢制御スラスターは機体ジャンプ時の姿勢制御に高い効果が認められている。

アーマー前後の追加装甲は非爆発性反応装甲で、被弾率の高い上方を覆う形となっている。右肩アーマーの天面にはマルチ

CAUTION/MODEX : RGM-79S

RGM-79S コーション/モデックス



ラックを介してビーム・サーベルが2本まで装着可能。また有線式対MSミサイルを装備していた、という記録も散見できるが、近接戦闘を主任務とする本機にとって、有線式ミサイルの戦術的価値は見いだせず、また連邦軍が制式採用している同形式のミサイルランチャーをMSに搭載した、という記録もこれまでの研究から確認することはできなかった旨を記載しておく。

左腕(もしくはパイロットが任意に設定した利き腕とは逆側)には、対MS戦シールドの部材を転用したスモールサイズのシールドがアタッチメントを介して上腕部の接続ラッチに懸架されている。前腕部のシールド装着用マルチラックは使用可能な状態であるが、近接戦闘時のデッドウェイトとなるため装備されること

は少ない。

肩アーモア正面下部にマルチアイコネクターを介して懸架されているプレートはカモフラージュジャケット装着支持ステー。軽量のアラミド繊維であるがコネクターを除くジャケット本体は約160kgという重量に達する。ジャケットを機体に装着する際はコネクタープレートをセットした上で、肩アーモアのマルチラックに電磁式で装着、任意でバージすることも可能となっている。

脚部ユニット

脚部は陸戦主体となるため、1G重力下仕様のG型の機材が使

CAUTION
DO NOT CRASH

ACCESS
DOCKING UNIT

DO NOT
CRASH

CAUTION
WEAPON OF BUILT

DANGER

CAUTION
DO NOT CRASH

ELECTRIC
ACCESS

DO NOT
CRASH

DO NOT
CRASH

SENSOR
ACCESS

DANGER

用され、この下腿部を中心にオーバーラップ式装甲が付加される。大脳部に關しては、追加装甲の重量増加に対する関節パーツの強化がなされているが、外観上の差は見られない。

膝と脛前面で50mm厚、足首には60mm厚の爆発性反応装甲が装着される。RGM-79Fの下腿部追加装甲は対人戦闘を考慮し、攻撃した側がダメージを受けやすい爆発性反応装甲の使用が多く、大枠では非人道的兵器として問題視すべきではないかと後年の研究で取り上げられることがあるが、これは正しいとはいえない。その威力を以って非人道的というのであれば、そもそもMSという兵器の存在自体が問題であるということになる。

脛の後部については関節開口部が大きいことから60mm装甲

を2層とし、そこにシールド・アーマー同様のカムフラージュジャケット支持架が用意されている。

足については、RGM-79F(陸戦用ジム)の機材が流用されている。本機は被装甲面積分布からF型などと比較して機体重量が軽重だと誤解されやすいが、胸部装甲フレーム内の冷却系機材の増設や電波吸収塗料の塗布、カムフラージュジャケットといった特殊装備に加え、密林や泥濘地、湿地などおよそ不整地を中心とした機材運用から、機体の安定性確保は最優先課題であるとの判断がなされたことによる。さらにB型からF型機体への改修作業がベルファスト以外の工廠でも積極的に行われていたことから、生産ラインや部材の確保も容易であったことが幸いした。



■RGM-79FD (装甲強化型ジム)
#251 アフリカ方面軍第5MS大隊

U.C.0079年12月5日に開始されたアフリカ陣戦に、オーガスタ工廠において先行試作されたRGM-79FDの内の数機が実戦テストを兼ねて配備された。この計画は急遽決定されたもので、前線に到着した時には試験用カラーリングのままであった。



増加装甲改修機の子孫たち

F型にて本格的に始まった増加装甲改修機の系譜は、対MS用大型火器「ジャイアントバズ」の登場により、反応装甲の採用という方向で進化していった。しかし、MSへのビーム兵器の搭載という避けようのない流れに対し、次第に反応装甲という防御手段は尻すぼみになっていく。


反応装甲は高出力のビーム兵器に対しては、さほど有効な防御手段とはいえず、むしろ耐ビームコーティング技術の方が、有望視されたためだ(より進んだ対抗手段として、フィールド・ジェネレーターという装置が存在したが、サイズや消費エネルギーなどの面で、大きな問題を抱えていた)。そこで、戦後開発のMSのうち、いわゆる「重装甲仕様」の範疇に含まれる機体の多くが、S型同様に反応装甲の採用を見送ることとなった。

また、大戦末期に通邦軍が進めたFSWS計画[※]において、単純な装甲と推力の強化に留まらず、増加パーツに火器を組み込むことで火力向上を図るというコンセプトが登場したこともまた、その後の重装甲仕様機体に大きな影響を与えた。こうして確立した、装甲、推力、火力(にともなう出力)をパッケージとして強化する方法論は、各時代において「現行世代機の性能向上」を図る手段として、幾度となく繰り返し試みられることとなるのである。

同じような機体の末裔には結果として、グブス戦役以降にRGM-79R(ジムII セミストライカー)などがあるものの、ガンダリウム合金の登場により、悪戯であったルナ・チタニウム合金の主力機への採用が叶い、重装甲の機体は一転してワンパッケージ化され大型化し、恐竜的進化に拍車をかけていったのである。

[※]FSWS計画

RX-78(ガンダム)の運用開始を経て、同戦時に装甲、推進器を包括した増加装甲パーツを追加し全体的な性能向上を図るというプランが立案された。この試案が「Federal Suit Weapon System (MS汎用武器システム)」である。Full armour System and Weapon System=増加装甲武器システム、同、とする文献も存在する。



戦後開発のジム・シリーズ

一年戦争の終結後、連邦議会は戦後復興に注力するため、軍事予算の削減に乗り出した。そのため、U.C.0080年代初頭は軍縮傾向が続き、いくつものMS開発計画が中止、あるいは統合され姿を消していった。

戦中に開発された機体にしても、U.C.0081年より開始された遠正配備計画に則り、効率的な運用を行うために乱立していた仕様の統合を進め、配備機種の絞り込みが行われている。特に新規生産に関しては厳密な審査が行われ、事実上、オーガスタ工廠製の高性能機種G型と、ジャブロー工廠の大量生産機種C型の2系統に絞られている。

さらに、U.C.0081年10月13日に「連邦軍再建計画」が可決したことを受けて、MSの部品単位での規格化が促進されると、生産ラインはC型系列機にほぼ一本化されることとなった。G型は総合性能に優れながらも、1400kw級の大出力ジェネレーターの生産に集積力の製造施設を必要とし、部品調達面で問題を抱えていたためである。

そうした新規開発計画の推進が難しい、ある種の冷え込んだ状況にあって生み出されたのが、いかなる機体なのかを見ていこう。



RGM-79N

ジム・カスタム



■これはRGM-79N(ジム・カスタム)のカラーリング・パターンのひとつで、'91年においてジオ公国軍機体設計に従事した部隊などに配属された機体を示す。

戦後において軍上層部が求めたのは、性能面より何より、規格化に対応した機体であった。消耗部品の調達を容易にすることはもちろん、操縦系統を統合することにより、パイロットの機種転換に要する訓練期間を短縮するなど、規格化の推進には多くのメリットが存在したことは確かである。

しかし、アフリカ大陸や暗黒宙域などで公国軍残党の掃討作戦に従事していた実働部隊にとっては、配備されるMSの質は死活問題であった。彼らが対峙することになった残党勢力の中には、MS-09(ドム)タイプはもちろんのこと、MS-14(グングワ)タイプなど、大戦末期に投入された高性能機を保有するグループも存在していた。また、それらの機体を操るのが、一年戦争を戦い抜いた猛者ぞろいであって、到底、C型で満足するわけにはいかなかったのである。

かくして、新鋭機開発に関わることになった技術スタッフは、コスト効率を求める軍上層部と、性能向上を求める実働部隊、ふたつの矛盾する声の板挟みに陥ったのである。

このような状況下で、兵器開発局のテクノクラートたちが出した案は、規格化に対応していた戦後仕様のC型をベースに、戦

中にオーガスタ工廠で開発されたG型やGS型、さらには、高性能試作機、RX-78NT-1(アレックス)において試された技術を盛り込むというコンセプトであった。かくして、生み出されたのがRGM-79N(ジム・カスタム)である。

基礎設計は、オーガスタ工廠出身の技術陣が担当。生産性を担保するため、C型の機体フレームを最大限活かしつつも、各所にRX-78NT-1(以下、NT-1)で実用化されたデバイスを採用する形で設計作業は進められた。

特にその影響が色濃く現れているのは推進系である。下半身を中心に、機体各所に補助推進装置を配しているほか、背部にはNT-1用のランドセルをほぼそのままの形で搭載。むしろビーム・サーベルのエネルギー供給デバイスを、2基から1基に減じるなど低コスト化が図られてはいたが、開発期間短縮のため、積極的に設計の流用が行われている。

また、肘関節の構造に関しても、NT-1で試みられたマグネット・コーティング対応の駆動系デバイスを採用。これは従来型の関節よりも可動域が広く、より人体に近い動きを可能にするものであった。

Spec

基本

型式 RGM-79N

全高 18.0m

重量 42.0t

全備重量 57.6t

ジェネレーター出力 1,420kW

スラスター推力 67,490kg

装甲材質 チタン合金セラミック複合材

武装 頭部60mm V&Aガン×2

ビーム・サーベル

ジム・ライフル

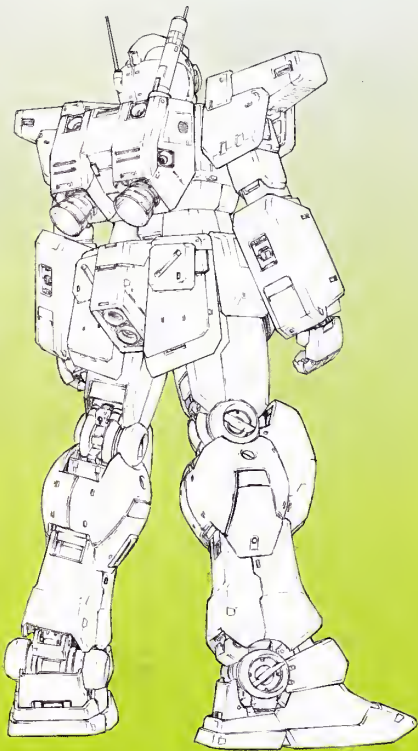
ビーム・ライフル

シールド



RGM-79N ジム・カスタム

RGM-79N GM CUSTOM



RGM-79N ジム・カスタム

RGM-79N GM CUSTOM



■これはRGM-79N(ジム・カスタム)の
通常形態のカラーである。奇襲作戦
計画も地しのごきんごの軍用機や伝説
的勢力の反乱、及びコロは脱ぎ、(ジム・
カスタム)も実戦に投入されている。

ただし、脚部に関しては機構の信頼性が優先され、従来型の延長線上にある構造が採用されている。特に重力下で運用する場合、関節部の部材の消耗は激しく、C型規格に則ったものの方が、部品調達や保守性の面で効率が良いと判断されたためだ。また、プロバレント・タンクに關しても、NT-1が採用した大容量タイプの表装は見送られ、C型規格の標準型タンクが選択されている。こうした点は、生産性と性能面のせめぎ合いによって、取捨選択されたものと考えられる(※)。

とはいえ、妥協できない部分もあった。例えば、C型最大の弱点と目されていたジェネレーター出力の低さは、決して見逃すことができない部分だった。C型が採用していた1200kw級ジェネレーターの出力量では、ビーム・ライフルの安定動作が難しく、火力面で問題が多かったのである。

そこで、設計に携わった技術スタッフたちは、C型以前のRGM-79系が多くが採用していたコア・ブロック方式の廃止を提案。RXシリーズ機に採用された脱出ポッドに端を発するこのシステムは、Aパーツ(上半身)、Bパーツ(下半身)、コア・ブロックというブロック単位での交換を容易にした反面、それぞれの剛性を確保するための構造が必要となり、内部の余剰スペースが少なくなるというデメリットが存在していた。当然、コア・ブロックに収めるメイン・ジェネレーターのサイズも制限を受けることとなり、その設計を難しくしていたのである。

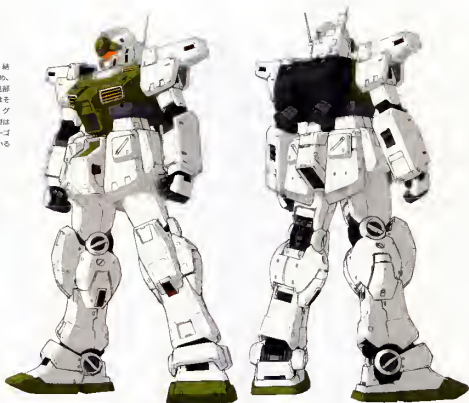
兵器開発局も、技術スタッフからの説得を受け、コア・ブロック方式の廃止をししぶぶながら認めることとなった。かくして、胴体内部に確保されたスペースには、より大型ながらも出力の高い、1400kw超級のタキム社製新型ジェネレーターが搭載される運びとなったのである。また、余剰スペースを利用して腰部にサスペンションが追加された結果、1G重力下での「乗り心地」が改善されるなど、副次的な効果もあった。

かくして完成したN型は、C型をベースとすることで生産性と運用効率を確保しつつ、RX-78NT-1の開発で得られた技術をフィードバックすることで、性能面でも高いレベルを維持することに成功。非常にバランスの取れた機体として、パイロットたちからも高い評価を受ける結果となったのだ。

※RGM-79Nの「プロバレント・タンク」
RGM-79NではNT-1仕様の大容量タイプに交換することも可能だったという。事実、一部の宇宙軍系の部隊には、大容量タイプのタンクと補助スラスターを装備した「自機動仕様」と呼ばれるN型が配備されていたようである。

■RGM-79N (ジム・カスタム) エウーゴ 第5機動艦隊 第2戦隊

U.C.0083年のデラズ紛争終結後、結成されたティターンズにQ型改修のため、N型は優先的に買収されていたが正統部隊に配備されていたごく少数の機体はそのまま部隊に残され運用されていた。グリプス戦役に移りなお残存していたN型はRGC-83 (ジム・キャンノム)と共にエウーゴに戦力として組み込まれ、配備されている機体が少数確認されている。



RGM-79Nの運用実績

ロールアウトしたN型は、ジャブロー工廠の生産ラインを用いて量産が行われ、順次、各地で「残党狩り」に動んでいた実動部隊に供給されていった。一年戦争で経験を積んだベテランパイロットが属するMS部隊に優先的に配備が進められたといい、戦後世界においても生産機の大部分が実戦投入されている。

特にU.C.0083年に発生した、いわゆる「デラズ紛争」においては、ヘガサス級強襲揚陸艦(アルビオン)艦載MS部隊など、いくつかの部隊に配備され大きな戦果を記録。N型の評価を高めた一因となった。なお、こうした部隊では、多くの場合、N型とフレームを共有するRGC-83(ジム・キャンノム)と共に運用されるケースが多かった。例えばアルビオン隊では、RX-78系の試作機を含めつつ、RGM-79N×3、RGC-83×2の合計5機という構成で、激戦を戦っている。このような支援機を含めた編成は、V作戦以降、連邦軍が度々試みてきた多機種による連携運用構想に基づくものであったが、RGM-79NとRGC-83の場合は、フレームを含めて部品単位の共通化を進めることで整備効率を高めるという狙いがあったことも、覚えておくべきだろう。

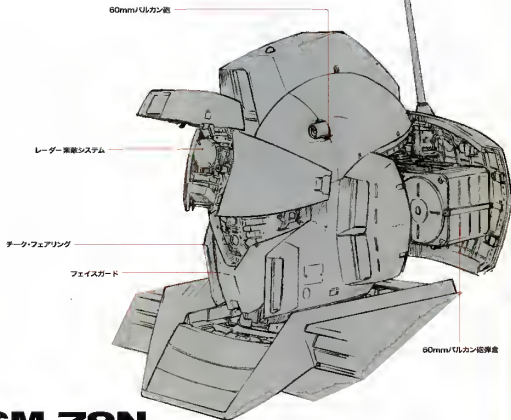
このように効率的な運用の実現を目指すなど、単体の兵器としてだけではなく様々な配慮がなされていた本機であるが、軍

縮を求める議会からの圧力は強く、大規模な機種更新が認められることはなかった。さらにU.C.0084年以降は、後述するQ型の生産が始まったことに加え、RGM-79R(ジムII)の登場により在来機の近代化改修が優先的に行われたため、N型の生産数は伸び悩んでいる。

一方で、U.C.0084年までに生産されていたN型の多くは、操縦系統のリニアシート化などの改修を受けつつ、思いの外、長期間に渡って運用され続けたようである。

例えばU.C.0087年の連邦内紛において、エウーゴの部隊がN型を使用していたことが確認されている。また、地球上においてもアフリカ方面軍がN型を運用。カラバに転向した部隊の機体も含めて、アフリカの大地で、地元の民族系ゲリラと結びついて土着化が進んでいた公軍残党勢力の掃討に投じられている。さらに、U.C.0088年の「第二次ネオジオン戦争」での実戦投入も確認されており、一部はU.C.0090年代まで現役で運用されていたとの記録も残されている。

一方で宇宙海賊の機体も存在したようだ。例えば、U.C.0080年代中活動していた宇宙海賊「シェンドウジ」では銀色のN型を運用していたことが確認されている。彼らの中ではこの機体は〈シルバー・ヘイズ〉と呼ばれていた。



RGM-79N

ジム・カスタム

頭部ユニット

顔部にはミノフスキー粒子の希薄な環境下での有効性から、レーザー波を使用した素敵システムが搭載されている。ケース内中央には補助カメラとして光学レンズ系カメラが設置されており、メインカメラと同質のグレイズシールドにより保護される。ケース左右に伸びるフェアリングはこれらシステムの冷却用ライオンとして機能している。

顔面部のグレイズシールドの後方には左右にパネル状の多目的アンテナ、中央部には光学レンズ系カメラ、という標準的なレイアウトがなされている。この光学レンズ系カメラが複数搭載される理由は、単純に視界の確保と、被弾によりいずれかが破損した場合はサブ回路として機能させることを目的としているためである。

フェイスガードは1ピース構造となっており、メンテナンス時には中央下部のクランクヒンジによって前方に引き出されてから展開される。これは整備施設の整っていない前線においては、メンテナンス要員の足場としても機能する。フェイスガードの装甲は正面が60mm、左右チーク・フェアリングは45mmと、装甲

裏面で厚みに変化を持たせている。これはC型などの従来機にあったフェイスガードのステップド・ストラクチャーではグレイズシールドなどに予想外の跳弾を招いた事案が少なからず報告されたためとされる。だが後年、主力機となった〈ジムII〉、〈ジムIII〉においてステップド・フェイスが復活していることから、多分にデザイナーの意向が強く反映されたであろうと推測される。

指揮官機として運用されることを想定して開発された本機の通信システムは、高出力の専用バッテリーなどを搭載したことから従来の通信ユニットよりもサイズが大きく、その結果、標準装備のト・カニンガム製60mmバルカンの装弾数はC型と比較して減じることとなった。だがこのバルカン砲については、多くのパイロットが敵機に対する牽制として使用する割合が高く、課題の高い指揮官クラスのパイロットから装弾数が減じられたことを問題視する声は特に挙がらなかった。

胸部ユニット

1400kwクラスの高出力ジェネレーターを内包する本機には、冷却機能向上を考慮し胸部上方、左右肩部に補助インテークが

■RGM-79N (ジム・カスタム) #006 強襲機艦艦 (グレイファントム)

U.C.0083年初頭にベガス級強襲機艦5番艦である〈グレイファントム〉に2機のN型が配備され、宇宙での公国軍殊死戦に従事した。しかし同年11月10日、〈グレイファントム〉はコンベイト戦艦形式においてデラズ・フリートのMSによる核攻撃に巻き込まれ、搭載されたN型は母艦もろとも格納庫内で大破するという最悪の運命を辿っている。



レイアウトされている。RGM-79D/GD(ジム・コマンド)で初めて採用されたこの機構は、メイン・ジェネレーターのレイアウトを変更することなく冷却機能を強化しており、胸部内郭の空間を保持したことで将来的なジェネレーター出力向上のためのサイズ変更はもとより、補器類の変更、レイアウト改変への対応が可能というメリットが存在した。また、この位置関係は主発動機に対して、最短ルートで高効率な冷却効果を得ることができた。なお、この補助インテークの評価は高くC型など開発工場の垣根を越え、多くのジム・ファミリーで採用されるに至っている。

補助インテーク外殻フェリング部は後部エンジンでパネルを展開、メンテナンスを行うことが可能。内部には前方に蓄・排熱デバイス、後方にコ・ジェネレータードラムが配置されている。

関節ユニットは、マグネット・コーティング対応の多層構造関節部となっている。このコンパクトな機構は「中空構造高強度シャフトとリングの集合体」とフィールドモーターの組み合わせとすることになる。機体の機動によりシャフト外殻に並列配置されたりニア駆動リングが稼働、関節回転部の抵抗を限りなくゼロに近づけた可動を実現する。これまでの標準的なフィールドモーター駆動式の関節に比べ、内包するパーツ総数は増加したものの、構造自体はユニット化が進みシンプルで整備性も高く、またシャフトの素材変更と外殻/パーツの一体化によって全体の剛性も向上している。その結果、MS用大型携行火器の使用に対して

も十分な耐久性が確認された。なお稼働時に発生する高磁場の物理的遮断については99.9998%以上が要求され、整備ブロックの金属部品などが突然動いて機体に衝突するなどの事故は報告されていない。

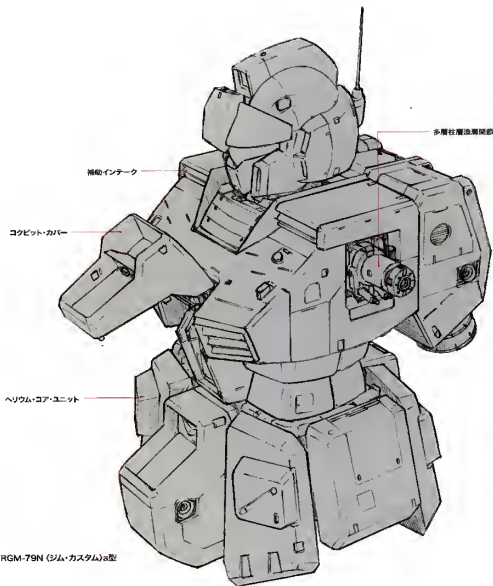
■腹部ユニット

コア・ブロック方式は廃され、タキム社製大型ジェネレーターを搭載。コクピットは従来型の多面モニター式でハッチ・ドアは全体が上方にポップアップレインナーシャッターは装備されていない。軽量化のため、ハッチ自体の装甲厚は正面で40mm、側面、上面は25mmとされた。

コクピット・ブロックは従来のGM系を踏襲しており、アビオニクス以外は特に大きな変更は認められない。なお本機に関しては、コクピット構造を基準として大きく4つの形式が存在する。

■a型

通常の密閉型コクピットと平面型スクリーンで構成される。モニター解像度は従来のGMシリーズよりも解像度が高く、搭載される各種センサーやカメラ・システムの性能を十二分に発揮していた。



■RGM-79N (ジム・カスタム)a型

■b型

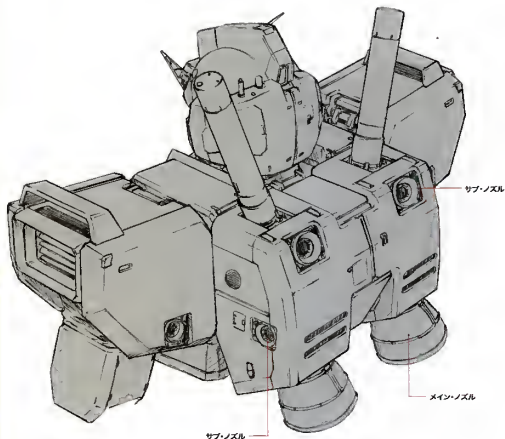
機体そのものの基本性能はa型と変わらないが、コクピット周囲の装甲形状の強化と形状の見直しがなされた。これにより万が一、ヴェントロ・アーマー内で爆発事故などが発生した際にも、その爆風を前後に逃らしパイロットの生存率を向上させていた。このマイナーチェンジはおおむねU.C.0083年11月以降生産の機体が該当する。

■c型

360度マルチスクリーン対応コクピット搭載機。RX-78NT-1 (アレックス) にて試験運用されたものと同型のシステムで、教導部隊での運用を経た後に順次採用され、最終的にU.C.0086年4月期に現存する機体はすべてこの仕様にアップグレードされた。

■d型

360度マルチスクリーン+リニアシート対応コクピット搭載機。U.C.0086年10月の最終生産時において採用されたリニアシート・システムは、従来の360度スクリーンよりも死角とされる範囲が少なく、また表示される情報も増加している。特に視線入力による特定目標のズーム機能や表示ウィンドウの選択、ウィンドウ数の増加と処理速度の向上は、機能こそc型に近いものの、内容としては次世代機と呼ぶにふさわしい進化を遂げている。c型からd型へのアップグレードはU.C.0087年7月から開始された。しかしながらマルチスクリーン+リニアシートの部材供給が、新規生産される次世代機を優先したため、88年2月以降、d型への改修は行われていない。

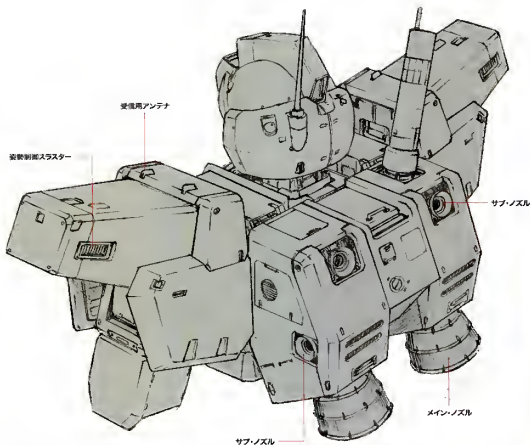


■RX-78NT-1 (ガンダム)「アレックス」

腰ブロック

フロント・スカート、リア・スカートのヘリウム・コア・ユニット表面のディテールについては、ボックスの剛性向上のためのプレスラインであると記載された文献もあるが、これは追加装甲、予備弾装用のマルチウェポンラックである。またこのラインは、一部は姿勢制御スラスターとしての機能も付加されている。この装置を連邦軍のMSとして初めに採用した機体がRX-78 (ガンダム)であったことはよく知られている事実である。その理由はいわゆる「フルアーマー・オペレーション(FAO)」に対応するためのものであったようだ。U.C.0079年当時、地球連邦軍首脳の一部組織では、本気でFAOの採用を推し進めていたという記録が残っている。これは試験機であるガンダムタイプのみならず、量産機であるジム・ファミリーなどへの追加装甲も検討さ

れていたとされる。結果からいえばこれらFAOはペーパープランとして終わることなく、実際のプロジェクトとして進行し、俗に「フルアーマー・ガンダム」と呼称される機体の運用、実戦への投入といった記録も確認できている。だが従来機体への追加装甲というプランは極めて限定的な作戦での運用となる。それであれば、より汎用性の高い新型機体の開発に注力すべきでないか、という結論に達したことは想像に難くない。かくして「フルアーマー化によるモビルスーツの強化案＝追加装甲の時代」を提唱した人物たちの考えは結実せず、それらの愚惑とは別方向の、装甲コーティング技術やフィールドといったシステムの開発に繋がっていった。

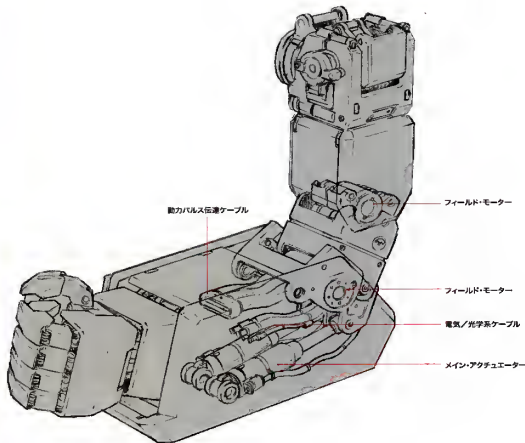


■RGM-79N (ジム・カスタム)

ランドセル

主推進システムを内包するランドセルは、U.C.0079年12月に交戦記録が残っている試作機、RX-78NT-1(アレックス)の設計を踏襲している。ランドセルのアウトラインは(アレックス)と同型の8784系統。メイン・ノズルを左右各1基、サブ・ノズルがランドセル上方と左右側面に各1基ずつの計6基を有する。なおこのノズル配置は無重力空間のみならず重力下仕様の機体セッティングにおいても姿勢制御での高い有効性が窺いだし、減らされることはなかった。なおRX-78NT-1(アレックス)のランドセル設計を流用することで、開発期間の短縮を図りつつ、スラスター・ノズルの材質変更、冷却ラインの取り直し改修による効率化など、コストダウンを図り量産性を考慮している。RX-78NT-1(アレックス)と比較すると、出力としては下回っている

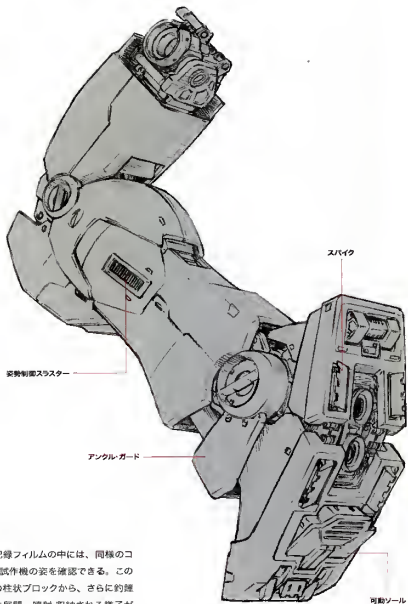
ものの、本機の推力は従来のジム・ファミリーから考えれば十二分な機体性能を発揮している。RX-78NT-1(アレックス)はコアブロックシステムを有しないため、RX-78シリーズとしては比較的軽量であったことは事実である。しかし試作機であり、各種センサーや試験用機材を搭載しての運用は設計時の予測重量を越えることとなり、それらに見合った出力が必要であったこと、また何よりも「チョバム・アーマー」を装備しての運用が必須条件であったことから運用試験においては過剰といえるような出力が要求されていたのである。本機は、いわばそれら余計な装備を必要としない、無駄をそぎ落とした量産機ゆえ、充分な機動を獲得できていたのである。



腕部/マニピュレータ

基本的にはRGM-79シリーズを踏襲した外骨格構造となっている。肘関節はRX-78NT-1(アレックス)の発展型とも呼べる構造となっている。メカニカルとしての機能は大幅なブラッシュアップを受けマグネット・コーティング対応型となっている。外観上は大きな差違こそないものの、動作を担うメイン・アクチュエーターの出力も向上、より大型の火器を携行・運用することを可能としている。ちなみにこの肘関節ユニットはその後の地球連邦軍の主力MS、RMS-179(ジムII)では採用されていないことも興味深い。開発時期を勘案すれば、順当に次世代機へと採用されてしかるべき改修でありながらそうならなかった理由は、資材調達や費用面というよりも一年戦争終結後、台頭してきたアナハイム・エレクトロニクス社と地球連邦政府との齟齬という、政治的な流れが大きかったことは多くの人が知るところであろう。

ショルダー・アーマーにオフセットマウントされた姿勢制御ユニットは、機体重心位置から離れた四肢もしくはそれに類するスタビライザーなどのユニット遠位端に噴射ノズルを配置することで、機動性を向上させることを目的としている。この部位にレイアウトされる姿勢制御ユニットは、少ない推力で軌道変更が可能であり、その有効性はU.C.0080年代中期から採用されたランダム・バインダーでも同様の効果が確認されている。これまでもショルダー・アーマーに姿勢制御/補助推進機関としてスラスター・ノズルを装備した機体はあったが、本機ではその完成度を推し進めたものである。ただMSの運用に際しては、母艦となる艦船の格納庫寸法について“連邦軍艦船搭載機器運用規格”という厳格な規定が存在した。この規定により定められた機体寸法がショルダー・アーマーの姿勢制御スラスター形状に反映されている。余談ではあるが、U.C.0083年に発生したデ



ラース紛争の際に撮影された記録フィルムの中には、同様のコンセプトと思しき肩形状を持つ試作機の姿を確認できる。この機体ではショルダー・アーマーの柱状ブロックから、さらに約踵状のスラスター・ノズルを外部に展開、噴射・収納される様子が確認できている。この展開式スラスターの存在は、それが試作機であっても前述の寸法規格が厳格に守られていたことの証左である。

本機のショルダー・アーマー姿勢制御スラスターは柱状ブロックの前後にノズルを有する。スラスターはブロック内にレイアウトされたプロペラント・ベレットによるロケット噴射、もしくは高圧エア噴射が可能となっている。メンテナンス時は、先端部のアクセス・ハッチを上方に展開、内部ユニットをスライドレールで引き出し行われる。ショルダー・アーマーの前後に跨るブリッジ部には受信用アンテナが設置されている。

脚部ユニット

脚部については機体の信頼性を優先する形で、C型の構造を踏襲している。ただしメイン・フレームは再設計され、重量増及び機体負荷増への対応を図り、特にフレームの断面形状が見直されている。また膝、足首関節ユニットは強度の増大、可動範囲の拡大がなされている。本機はC型規格の膝関節ブロックだが、大腿部後部の装甲形状も変更され、その周辺装甲を引き込み式

CAUTION/MODEX : RGM-79N

RGM-79N コーション/モデックス

CAUTION
PROXIMITY TANK ROBOT000
[モデックスナンバー]

DO NOT CRASH

CAUTION
NO 50% EXTERIOR HITCAUTION
NO 40% 10" BLISTACCESS PANEL
SHOCK ABSORBER

(標準型近接戦用)

ACCESS PANEL
HEAT SINK UNITSHOCK
ACCESSSHOCK UNIT
ACCESS

DANGER

SHOCK UNIT
ACCESS

(標準型近接戦用)

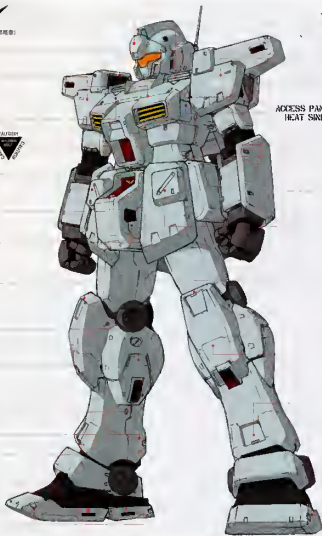
CAUTION

EFSF
(標準型近接)ELECTRIC
ACCESSACCESS PANEL
HEAT SINKCOOLANT
VERT

RESCUE

CAUTION
NO 40% 10" BLIST

DO NOT CRASH

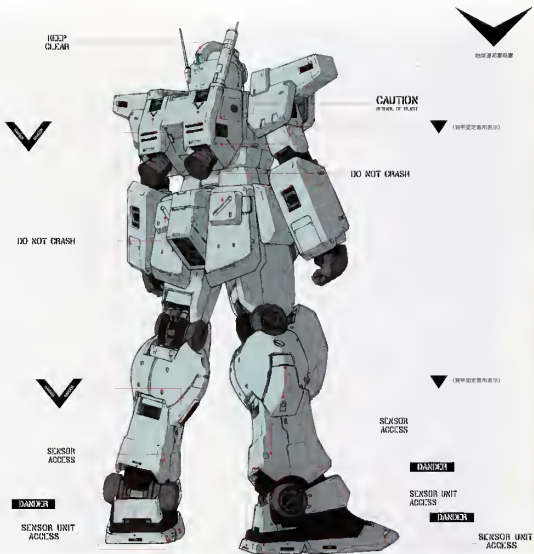
ACCESS PANEL
SHOCK ABSORBERACCESS PANEL
HEAT SINK UNITSHOCK UNIT
ACCESSSHOCK UNIT
ACCESS

とすることで膝関節の可動範囲を拡大している。

膝スラスターはU.C.0080年代初期のMSにおいては必須ともいえる装備で、空間戦闘時はもとより、重力下における高所からの着陸時の緩衝機構として、またジャンプ機動時の補助推進力として、尻脛部左右に配された姿勢制御スラスターとともに活用された。腰装甲は腿同様、前後で分割され、フロント側には緩衝装置と駆動系機構を、リア側にプロベラント・ベレットと補助ジェネレーターを収納している。脛前面のすそ部分は足首関節ユニットの緩衝装置メンテナンス用のドアとして、側面ヒンジで機体外側に展開、整備性の向上に貢献している。また後部プロベラントは大型サイズのものに換装可能で、この場合は腰脛部より下部の外殻装甲も交換の必要がある。

大腿部は、後部の空間にプロベラント・ベレットを配している。

従来の機体では各部に散在するスラスターに近接した位置にプロベラント・タンクを配置していた。だが本機では、スラスター近辺のプロベラントが枯渇した際、伝達レールを使用し、股関節や大腿部のタンクからプロベラントを移動することが可能となっている。従来型の機体では、重力下/無重力下に問わず、関節ユニットという可動ブロックを跨いでのプロベラント移管は構造的に非常に困難であり、ごく一部の機体を除いて採用されたことはなかった。また採用された機体でも燃料漏れによる装甲コーティングの劣化やフレーム内補器の破損、故障といったトラブルもあつた。その成功事例は本機の登場を待たなければならなかった。なお戦後の映像メディアで見られる戦記モ



ノなどのフィクション作品ではこの燃料漏洩による火災、機体の爆散といった描写が見られるが、MSに使用されるプロペラントの引火率は危険度2D+と高くなく、取り扱いには相応の注意を要するものの事実とは大きく異なるということを併せて記しておく。

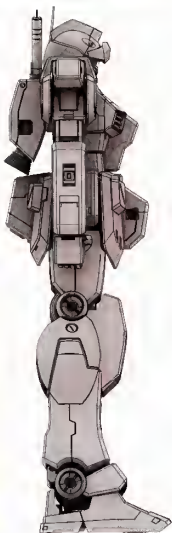
足首の関節は、じつは初期的なムーバブル・フレーム機構とも呼べる構成となっており、踝にある関節カバーと基部のジェネレータードラム、足の甲部分の装甲については、完全固定ではなくスライドレール式接続にて、関節可動の自由度を妨げない設計がなされている。これらスライドレール式の脆弱性を取り沙汰されることもままあるが、破損した場合などはレール自体が損傷することで関節ユニットに直接、ストレスがつかない設

計となっている。また一次外殻、二次外殻についても安易に脱落しないよう。フレームにはピンボットが設けられており、装甲からレールを取り外し交換することで繰り返し使用することを可能としている。つまりスライドレールという、あえて脆弱な(実際は十分に堅牢な強度だが)パーツを介することで高価で複雑な重要部品を保護する、という考え方である。

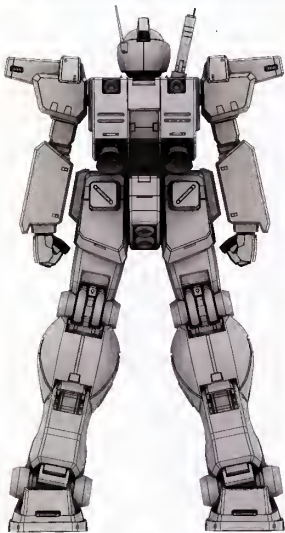
足裏はスラスター・ユニットが2基、左右合計で4基装備される。可動し立ち上がっている爪状のパーツは爪先と踵が機体固定用のアンカー、左右のものは接地面積を稼ぐための、機体制御ジャイロと連動した、緩衝機構を内蔵したギアである。なお本機における接地面積は機体重量の増加などを勘案し、C型に比しても拡大している。

PROJECTION VIEW : RGM-79N

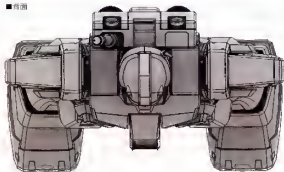
RGM-79N 図面



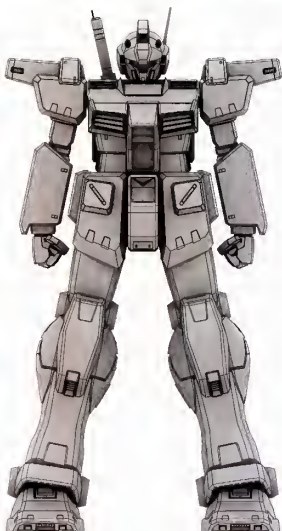
■左側面



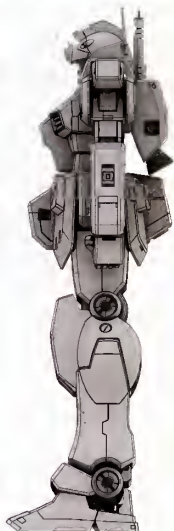
■前面



■上面



■前面



■右側面



■下面





RGM-79Q

ジム・クウエル



■これはRGM-79Q(ジム・クウエル)のカラリング・パターンのQとツツである。ティターンズの肝煎りで配属の開始された同機は、このいわゆる“ティターンズ・カラー”と呼ばれる象徴的な鮮明色のイメージを内外に焼き付けた。

1年間に渡って続いた大戦は、前線部隊を混沌の渦に叩き込んだ。厳しい戦いにより定員割れが相次いだのはもちろんのこと、これを補おうと現地徴用や部隊の統廃合が繰り返された結果、上層部が正確な編成を把握することが困難な状況に陥っていたのである。そうした現状を是正するため、総戦を迎えると軍部は復員作業と並行して部隊の再編に着手。これにともない、各地でMS部隊の新設が相次いだ。

もちろん、その影響は運用される兵器類にも及んだ。大戦末期になると、繰り返される共食い整備と現地改修によって、本来の姿を失っていたMSが多数存在した。さらに、崩壊した公国軍機が併用されるケースさえあり、まさに混沌とした状況にあった。数多なMSが混在する状況は、戦闘能力以前の問題として、運用効率的にも悪影響が大きかったことはいうまでもない。したがって、部隊の再編が進む過程で、実に多くのMSがスクラップヤードに送られることとなった。そして、入れ替わるようにして、C型やG型、さらにはN型といった戦後生産機の配備が、順次進められることになるのである。

だが、これらの汎用機種だけでは、対応しきれない局面もあった。そこで、適正配備計画の一環として、いくつかの局地戦用

MSの開発が承認されることとなる。RGM-79Q(ジム・クウエル)も、そうした戦後開発の局地戦用MSであり、コロニー内戦闘への対応に主眼を置いて開発されている。

一過間戦争やルウム戦役といった開戦直後の緒戦で、大打撃を受けた各サイドの再建は、連邦政府にとって最重要の案件のひとつであった。そこで、戦後ほどなくして、政府は「コロニー再建計画」を発動。スペース・コロニーの復旧工事を行い、再入権を推進することとなる。また、終戦協定に調印した「ジオン共和国」に対しても、監視体制を強めなければならず、スペース・コロニーの治安維持は大きな課題であった。コロニー内戦闘を重視したQ型の存在意義は、まさしくそこにあったのである。

ただし、ここでもまたコスト問題が足かせとなった。軍上層部は、開発期間を短縮するため、最新鋭の汎用機種であるN型をベースに、いくつかのポイントに絞って設計に調整を加えることで、Q型を早々に実用化するように求めたのである。それでは実際、どのような設計変更が加えられたのだろうか？

まず、市街地での運用を考慮し、膝部からスラスターがオミットされた。また、市街戦において建造物と接触する事例が多数報告されていた肩部のスラスター・ユニットも、短形の物に変

Spec

諸元

型式 RGM-79Q

最高速: 18.0m

重量: 39.8t

全備重量 56.3t

ジェネレーター出力: 1,420kW

スラスター 推力: 61,480kg

装甲材質 テタン合金セラミック複合材

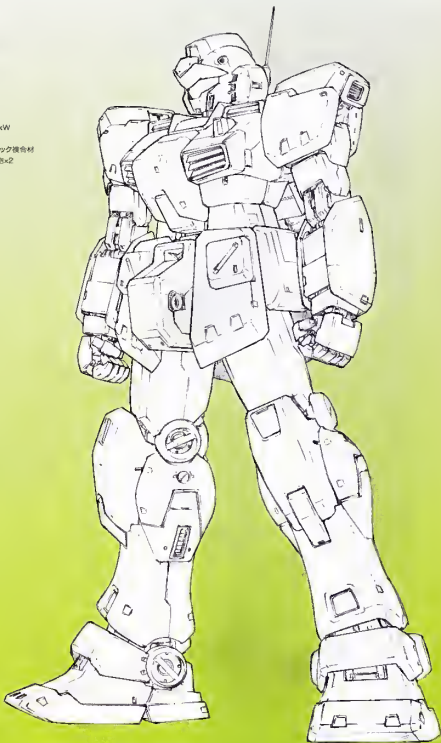
武装 鋼砲60mm/ビラン48×2

ビーム・サーベル

ジム・ライフル

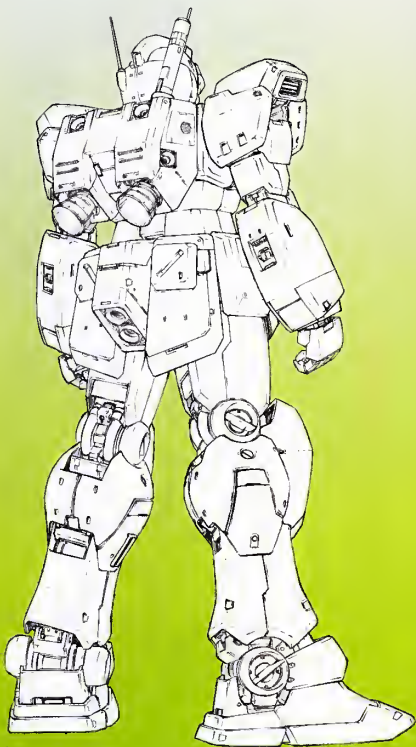
ビーム・ライフル

シールド



RGM-79Q ジム・クゥエル

RGM-79Q GM QUEL



■これはRGM-79Q(ジム・クエール)の近
所軍用車カウである。この機体が一般
部隊に配備される際には、ティターンズは
さらに新型の導入を進めており、既に第
四機隊のMSとは呼ばなくなっていた。



更されている。

さらに対人制圧戦を念頭に、対地マルチセンサーを腰部に追加したほか、頭部ユニットのセンサー類も刷新。下方視界が広がっているほか、サーモグラフィや動態センサー類の有効レンジも拡大されている。コクピット周りの装甲形状が変更されているのも、乗降時の損傷を警戒したもので、ハッチを盾代わりにできるようにとの意図があったようである。

以上のように、Q型の仕様は、コロニー内における市街戦を強く意識したものであり、明確な目的の下、手堅い設計が採用されている。唯一の例外は、簡易ムーバブルフレームと呼ばれる画期的な構造を採用した腕部ユニットであろう。関節などの可動部とフレームを一体化し、装甲と完全に分離するこの新しい構造は、メンテナンス性と生産性の改善に繋がるものと期待されていた。

事前のシミュレーションにおいては、充分に実用的と判断されていた方式ではあったが、これまで採用例はなく、後は実運用によるデータの蓄積を待つばかりの状況であった。そこで、比較적、加重や負荷の少ない腕部に限定し、実験的に採用されることとなったのである。

結果的に、この腕部ユニットは、新規格の武装マウントラッチを含めて好評であり、以降のフルムーバブルフレーム方式の第二代MSの標準を決定づけたのだった。

RGM-79Qの運用実績

先述の通り、Q型は適正配備計画に基づいて開発された機体であったが、ロールアウトとほぼ同時期のU.C.0083年12月に、治安維持部隊「ティターンズ」が設立されたことを受けて、本機の運命は大きく変わることになる。

当初、Q型はコロニーの治安維持を担う「サイド駐留軍」に配備される予定であった。しかし、強力な権限を有するティターンズが模範を入れ、優先配備権をかずめ取ったのだ。Q型は当時最新鋭の機種であった上、反連邦勢力への対抗を目的としていたティターンズにとって、コロニー内戦闘に対応した本機は、まさに打ってつけの存在であったのである。かくしてQ型の生産が開始されると、第1ロットからティターンズ系部隊に納入され、重巡洋艦(アル・ギザ)など、一線格の実動部隊に配備されることとなったのだった。

なお、本機の実戦となったのは、U.C.0084年4月30日の月面エアーズ市における一連の戦闘であったといわれている。同市郊外にあったコロニー公社の下請け企業、パンガー工業の施設にて、大規模レイオフに反対した従業員たちによる抗議活動が発生。元社員を名乗る人物がMSを持ち出して工場に立てこもった上、便乗した旧国軍残党勢力が介入したことで混乱が加速し、軍警が乗り出す規模の騒乱に発展してしまう。

そこに駆けつけたのが、折からQ型の慣熟訓練を行っていたティターンズ所属のMS小隊であった。フォルド・ロムフェロー大

■RGM-79Q (ジム・クワール) 第31教育中隊 (ティターンズ)

Q型はグリプス戦役時になると第二世代MS65に対抗しきれなくなり、徐々に一線を退いていった。その後前線から引き上げられたQ型はパイロット訓練機などとして使用されるようになる。規格化をコンセプトとして仕様策定されたN型をベースとする本機は、訓練機としては打ってつけであり、当時ティターンズが次々と新造MSを配備していた状況の中で、それらへも応用が利き、即戦力となるパイロットを育成できる本機は重宝された。



尉以下のMS部隊は、わずか5分でMS3機、ジュニアMS5機から成る残存勢力を鎮圧。鮮烈なデビューを飾ったことで、本機の評価は否応なく高まり、ティターンズ初期の主力MSとしての地位を確かなものとしたのだった。

Q型の活躍の場は、コロニー内に留まることはなかった。もともとの配備先であったサイド駐留軍は、スペース・コロニー周辺宙域の警備も任務としていたため、Q型は当初より宇宙空間での運用も想定されていた。また、原型機であるN型同様、地球上での運用も充分に可能であったし、事実、北米地域などでの実戦投入が記録されている。こうした意味において、Q型は「コロニー内戦闘用の局地戦機」というよりは、「コロニー内戦闘にも対応した汎用機」と表現した方が正確かもしれない。

だが、好調な滑り出しを見せた一方で、Q型がまたたく間に陳腐化していったこともまた事実だ。ティターンズが潤沢な資金力を背景に、次々と新型機の導入を進めたためである。U.C.0084年、ティターンズは、RMS-106(ハイザック)の先行生産型であるYRMS-106の評価試験を開始すると、そのまま制式採用を決定。Q型は、1年も経たずして主力MSの座を脅かされることとなる。

ここで面白いのが運用側の反応である。前線部隊の中には、新鋭機RMS-106を手放しでは歓迎せず、Q型からの機種転換を渋る向きがあったのだ。これはRMS-106が、メイン・ジェネレーターの不調が原因でビーム兵器の多重ドライブに問題を抱えていたことによる。事実、運用実績のあるQ型の継続運用を求め、近代化改修による延命を申請する部隊もあり、これが認められ

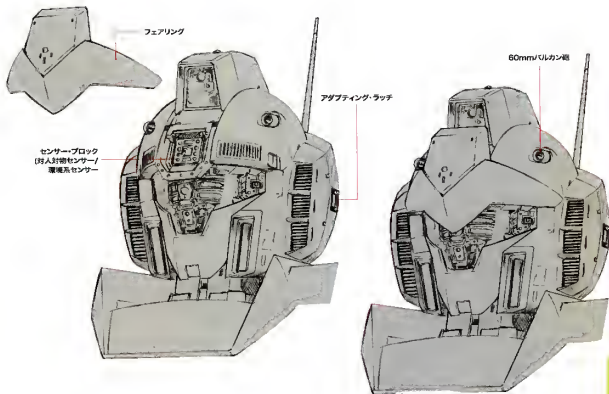
るケースもあったという。

しかしながら、U.C.0087年に入り反地球連邦組織「エウーゴ」の武装蜂起を契機に、地球圏が内戦状態に陥ったことで状況は変わってゆく。エウーゴ、ティターンズの両陣営が兵器開発競争を加速させたことで、第二世代MSの台頭が始まったのである。ティターンズは、RMS-108(マラサイ)やRMS-154(バーザム)といった新たな汎用MSを矢張り早に投入し、これらと入れ替わるようにして、Q型は徐々に後方任務へと追いやられていったのだった。

そのため、第二次ネオ・ジオン戦争ではサイド1のエリュシオンコロニー駐留軍の機体としてネオ・ジオン軍のレジェンドラ隊と交戦した記録も残っている(この時のコロニー駐留軍であったヴァルター少佐麾下の部隊は、グリプス戦役においてエウーゴへの協力を決したことから、戦後、最新鋭MSの配備から取り残される形になっていた)。

なお、第一線から退いたことで、幸いにも本機は少なくない数が内戦を生き延びることになった。そのような機体の中には、民間軍事組織に払い下げられた物も存在したようだ。例えば、U.C.0080年代末から90年代にかけて活動していた大手民間軍事組織「テミス社」も、そんなQ型ユーザーのひとつである。

もちろん第二、第三世代MSと比べればQ型の性能は見劣りしたが、彼ら民間軍事組織が相手にするのは、多くの場合、大戦中に製造された機体で武装された公園軍残存勢力や民族系ゲリラ、あるいは武装強盗の類であった。したがって、若干の近代化改修と丁寧な整備さえ保証されていれば、充分に任務を果たすことができたようである。



本機は、ジオン公国残党軍掃討やコロニー内での治安維持活動を生任務として生産された局地戦用MSのひとつである。オーガス工廠製の試作機、RX-78NT-1の量産機との記載を文献で見受けられることもあるが、実際の開発期間には隔たりがあり純粋な意味での量産機とはいえない。特に情報の少ない時代には「RGM-79Nの兄弟機」との大きな誤解に基づいた記述もあるが、実際にはRGM-79N (ジム・カスタム)を設計の基礎としながらも全身に渡って再設計がなされ、世代の異なる機体として仕上がっている。

前述の通りオーガス系の流れを汲む機体であるが、連邦軍の内部組織でエリート思想「地球至上主義」を掲げるティターンズという観点から、アナハイム・エレクトロニクス社など外部からの干渉を受けないリナツー工廠にて開発された。

頭部ユニット

頭頂部メイン・カメラを構成しているセンサー類は原型機であるRGM-79N (ジム・カスタム)と性能的には大きな変化はない。ただし頭部にはコロニー内での戦闘、おもに市街戦を想定しての対人物センサー(動体、熱画像処理、非破壊成分分析)や周辺環境の変異を観測・モニターする環境系センサーをユニット化し装備している。このセンサー・ブロックを中心として、顔面のグレイズ・シールド上部に覆いかぶさるフェアリングが追加さ

れている。このフェアリングは頭部内側にレイアウトされた冷却機構からのクーリングラインを兼ねている。

頭部搭載バルカン砲は、純粋なMS同士の戦闘ではいわゆる、牽制用の兵装と認識されている。だが本機においてはその戦闘領域が市街戦などを中心として想定され、対戦車、対人戦闘などを考慮した結果、兵装としてのプライオリティは従来よりも高いものになると判断された。そのため従来にはなかったバースト射撃機構の追加と装弾数の加増がなされた。バルカン砲と周辺電子機器の排熱機材も見直されることとなり、顔側部の強制排熱はフロントドラフト方式の直列3基配置のモデルへと変更された。

外殻顔側部には、オプション装備装着用のアダプティング・ラッチが設置された。ここにはオプション・アーマメントとしてスモーク・ディスチャージャーや連装ミサイル・ランチャー、バルカンポッドといった兵装のほか、高指向性の素敵用ブレードアンテナなどが用意された。

胸部ユニット

胴体には1600kwの大型ジェネレーターを装備。胸部内のメイン・フレームとソーラクス・マウントは、基本設計こそRGM-79N (ジム・カスタム)の流れを汲んでいるが、肩関節マウントは腕部がムーバブル・フレームを採用することによる大幅な形

状変更を強いられた。またコクピットにも360度モニター方式が採用されたため、アッパー・シャシーの大半が別物となっている。それにとりな胸板外殻装甲（ソーラクス・シェル）形状も、分割のみならず傾斜角も大きく異なっている。側面パネルには、装甲外殻ロック解除用のアクセスパネルが用意され、転倒や匍匐などの緊急時に外部からの外殻装甲のパーシが可能となっている。胸郭上面に見られるスリット状のディテールはストラット・アーマーなどの二次装甲を装着可能なソケットで、特にセンサー類が集中する上半身への対策として設置されている。これは本機が対MS戦のみならず、対ゲリラ戦など低強度紛争地域での運用から追加された仕様であった。U.C.0086年にコロニー各地で勃発した反政府運動に対する治安出動では、ルーバー状のストラット・アーマーを装備した姿がニュース・フィルム映像として残っている。胸郭左上部には光学センサーが設置され、万が一、頭部ユニットが破壊された場合であっても、視界こそ制限されるものの基本的な運用に差し支えない機能を有している。胸郭上面へのセンサー増設は、直接被弾の恐れがあるものの、前面投影面積に影響することがなく、またセンサー・フェアリングやグレイズ・シールドの強度も高いため、パイロットから不満が特に漏らされることはなかったという。ただし、ごくまれに小口径弾が妙な角度で跳弾し胴内部に侵入する、頭部に当たるなどといった報告もあり、フェアリング形状の再検討も行われたという。

胸郭左右の辞熱ダクトは姿勢制御ノズルを兼ねる。機動性向上を踏まえ、ルーバーは3枚ながらも開口部サイズとルーバー・フィン可動域の拡大が図られている。また材質もセラミック・タンタル複合の強度合金としており、高い防弾効果を持つ。なお首基部の前面装甲は、従来の3分割装甲から1ピースへと改められ、全体としての高さも低くなっている。これにより頭部可動域の干渉もわずかながら改善している。襟については全周に渡って200mmほど高さを増設、頭部ターレット・マウントの防弾性を高めている。またこれまでに蓄積されたデータからより被弾経路の高い断面形状が採用され、頭部ユニット（特にメイン・カメラ）への跳弾に対しても一定の効果が認められている。

センター・ユニットのコクピット・カバーはジム・ファミリーとしては破格の重装甲を有する。上下セパレート的方式ではある

が、実際のコクピット開口部は下方ハッチ外形より一回り小さく、平均的身長のパイロットであれば屈みこんでの出入りが必要となる。これは市街戦での、パイロットへの狙撃に対する防護の意味合いが強い。アッパー・ハッチ内には360度スクリーン用のコ・ジェネレーターと情報解析デバイスが設置されている。またハッチ天面は2ピース構成となっており、この上方首側にコクピットと搭載機材のクリーニング・システムが収められている。

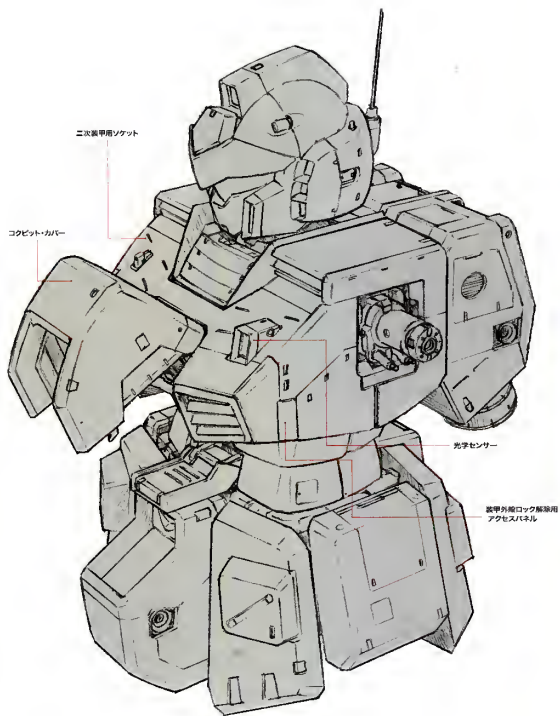
腰ブロック

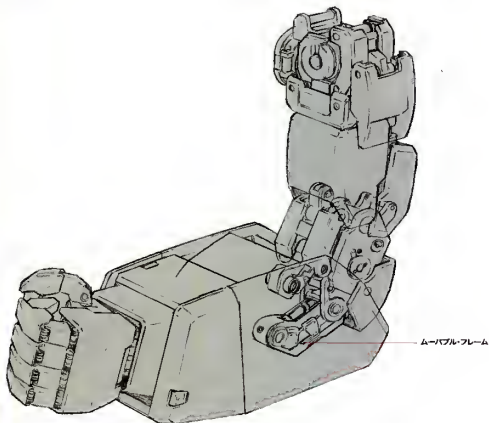
基本設計と部材調達にはランドセル同様、設計期間の短縮と生産拠点の効率化という観点からRGM-79N〈ジム・カスタム〉そのままとしている。ただしコクピット・システムが当初より360度スクリーンの採用を前提に進んでいたため、腹部との接続ターレットリングの径が異なり、駆動モーターも大型で高トルクのモデルが供されているが、外観から窺い知ることはできない。

ランドセル

RX-78NT-1〈アレックス〉の系譜となるB784系統のアウトラインで、2基の主推進器ノズルと、上部に2基、側面2基の姿勢制御ノズルというレイアウトはRGM-79N〈ジム・カスタム〉から変化はない。すでに同機で得られていた信頼性と整備性の高さ、また十二分な出力を持つ主推進器システムをそのまま流用することで、開発期間の短縮と部材調達、製造ラインの確保といった生産性についてのデメリットを払拭し、機体本体の設計に注力することができたのである。

なお本機の主推進器などのアップグレードについては、RMS-106（ハイザック）やRMS-154（バーザム）などの後継機の登場が早かったことから、むしろグリプス戦役以降に現場の部隊レベルで行われることが多かったと報告されている。これには機種変更という事態が、運用する部隊やパイロットにとって大きなストレスとなり、またパーツの規格統一から、後発の機材であっても換装可能であったことに起因する。





ムーバブル・フレーム

胸部／マニピュレータ

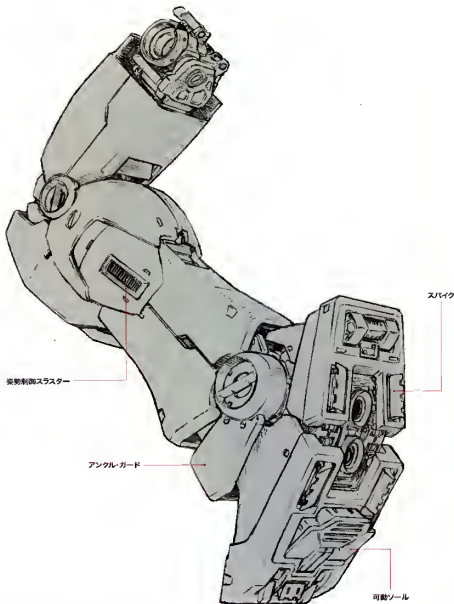
本機を特徴付けているもののひとつとして挙げられるのがアーム・ユニットである。開発の中心にいたのは、過去にRX-78NT-1〈アレックス〉を手掛けていたことで知られるDr.ル・ムンバを筆頭としたチームであったことはあまり知られていない。RX-78NT-1において効果を認められた機構については、さらに試作・研究を重ね積極的に採用されている。まさしく正常進化の道を辿っていったのである。特にムーバブル・フレームという構想の実現は、その後のMS開発にとって大きなターニングポイントであったことは歴史の知るところであろう。

さて、本機における従来機との大きな違いはやはり、ムーバブル・フレーム採用の一語に尽きる。チタン系合金で構成されたコンパクトかつ堅牢なフレームによる剛性の向上と、外殻装甲を関節の可動にリンクさせ、関節ユニットの動きに合わせてスライドさせ、その露出を最低限としながらも可動範囲を拡大させるという、従来の思想とはまったく異なるものであった。これまで関節の可動範囲への影響から、その取り回しに苦慮していたフィールドモーターの伝達ケーブルをフレーム内に収め、接続をユニットごとのソケット方式としたこと、さらにその余剰空間にはプロペラント・バックを収納、フレーム上に内蔵

装甲を装着し、耐弾性を向上させたこと、そしてフレームと装甲部が独立しているため、メンテナンスが容易になったことなど、そのメリットを挙げれば切りがないほどである。

肩装甲は、従来の平面構成の形状から、緩やかな三次元曲面を有する。これはジオン系の外殻一体成型技術が応用されている。これまでは生産性やコスト面から採用を見送られることがつねであったが、本機においては、いわゆるエリート組織であったティターンズでの採用が予定されていたこともあり、開発資金が比較的潤沢であったことも理由のひとつとしてあげられる。また一年戦争終結後、急速に台頭してきたアナハイム・エレクトロニクス社の存在が、ジャブロー工廠をはじめとする連邦の生産拠点を一足飛びに拡充させたことも否めない。

肩側方のスラスターは、ユニット基部は固定式となっているが、ノズル内のルーバー角変更により、+12度、-23度までの推力偏向が可能となっている。なお肩関節ユニットの冷却は、ラインはこのスラスター外周のスリットから排出される。前後装甲版の下部にある凹は圧縮エアを用いた姿勢制御スラスターを兼ねる。



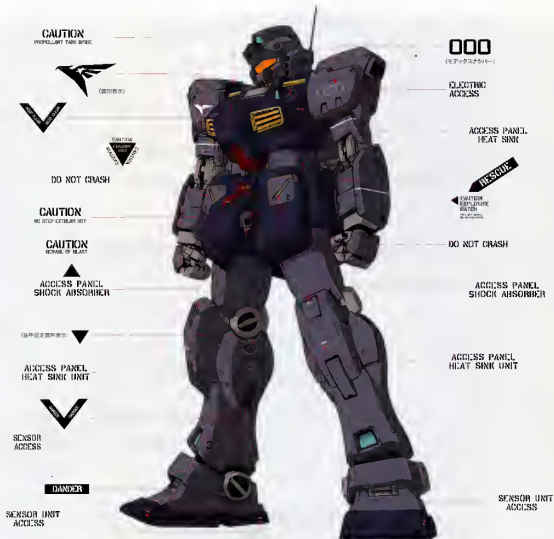
本機で採用された腕部のムーバブル・フレーム機構であるが、MSにおいて全身がムーバブル・フレーム構成となった機体の登場はU.C.0086年を待つこととなるが、本機では肩より先の腕部ユニットにこのムーバブル・フレームを試験的に採用し、量産レベルでの運用を行っている。ただしこの機構と意匠は、後継機種であるRX-186（ガンダムMK-II）には引き継がれることなく衰退していった。この理由については諸説あるものの、従来の発展型マグネット・コーティング機構とムーバブル・フレームの併用によるパーツ点数の増加とアセンブルの煩雑化、そして可動範囲や処理速度などの性能面においても、他のGM系列機との大きなアドバンテージが得られなかった、というのがその最たる理由であったと推測される。

脚部ユニット

本機はRGM-79N（ジム・カスタム）の脚フレーム構造を流用している。ただし前述の通り、機体運用がコロニー内部など重力下の可能性が高いことから、関節部の補強は行われている。また膝アーマー下部のスラスタ・ノズルは撤去され、アーマー形状も再設計された1ピース構造となり強度を高めている。それにともない膝前面のエアインテーク形状も変更を受け吸気部の断面形状を見直し開口部を拡大している。脛関節内側のスラスタ・ノズルは、ノズル形状に変更はないが、内包される推進器の変更にもともなって脛関節部分の装甲形状の曲率にも

CAUTION/MODEX : RGM-79Q

RGM-79Q コーション/ モデックス



変化が見られる。腰臀部後面接合部には、メイン・フレームへの開口部が設けられた。ここには円柱状のプロペラント・タンクを直接、接合可能なアタッチメント・ラッチとして機能しており、空間戦闘などプロペラントの大量消費が予想される場合、オプション装備として使用された。

腰前面に増設されたセンサーは非MS部隊との地上戦闘を想定してのものである。この設置には髀フレームのプロペラント・ペレットを廃し、そこに感受器をレイアウトすることで対応している。また膝のインテークからのエアを途中で分岐させ、感受器の冷却を行うとともに、腰前後の姿勢制御スラスターにも使

用している。また足のスリッパ爪先部にも追加され、よりリニアな機動を可能としている。これら姿勢制御スラスターの増設により、重力下/空間戦闘の両面において、よりコントロールな機動が可能となった。これはMS開発黎明期、腕部や脚部を作動させることにより受ける反作用を使用した機体制御技術「AMBAC」が、実際の戦闘においては機体を詳細にコントロールすることが困難であったことの表れといえるだろう。確かにAMBAC機動の有効性は無視できるものではないが、刻一刻と変化するプロペラントや携帯火器の質量変化などを演算しながら四肢を機動させるよりも、純粹にスラスター噴射による



ディターンズ記号

CAUTION
BOMB OR BLAST

(装甲部支離断片)

DO NOT CRASH

DO NOT CRASH

(装甲部支離断片)

SENSOR
ACCESS

DANGER

SENSOR UNIT
ACCESS

DANGER

SENSOR UNIT
ACCESS

SENSOR
ACCESS

DANGER

SENSOR UNIT
ACCESS

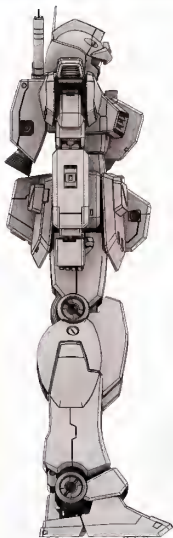
機体制御の方が安易かつ確実であることに異論はないだろう。AMBAC制御での戦闘は、限られたひとにぎりのパイロットのみが突出した技量によって持ち得た、極めて特殊な操縦技術に俟たないのだ。

話を戻そう。本機では重力下での運用によるプロペラントの大量消費を勘案し、プロペラント・ベレットの増設が検討された。RGM-79N (ジム・カスタム)でもすでに大腿部後部をタンクとして活用していたが、本機においては胴腰部から腰に至るフレームの側面ならびに後部にプロペラント・ベレットをメイン・フレームにレイアウト、その内部にフィットさせる形で胴腰部の外

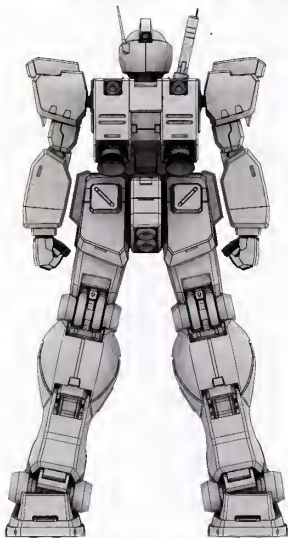
殻装甲を左右後方にボリュームアップさせた。これにより機体重量は8%、前面投影面積は4.65%の増加がそれぞれ確認された。装甲形状の変更は、姿勢制御スラスターなどにも影響を与えることとなるが、メイン・スラスター以外が圧縮エア方式のものであり、ラインをソケット延長することで対応可能であったのもこのマイナーチェンジ機誕生の一助になっている。この装備はR84-fkの機材番号を脱ってFk (FAT-knee=膝デカ)との隠語でその外見の通りに呼ばれた。本機の運用期間が短期であったにもかかわらず、Fk装備の機体は各種メディアにて散見することができる。

PROJECTION VIEW : RGM-79Q

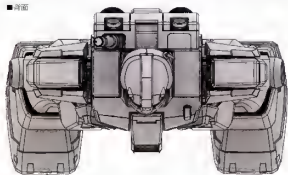
RGM-79Q 図面



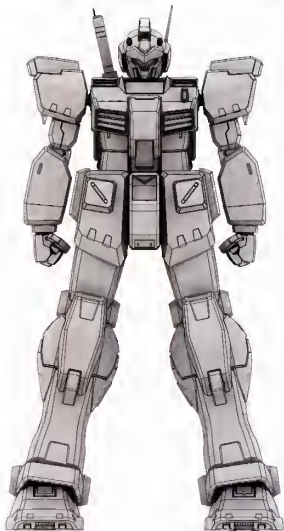
■左側面



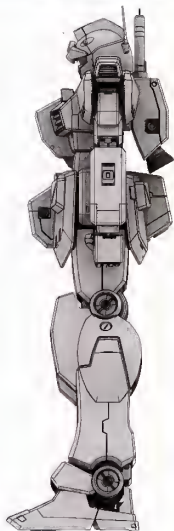
■前面



■上面



■前面



■右側面



■下面

実験機としてのオーガス系

戦後、オーガス工場の技術を取り入れて開発されたN型やQ型といった機体は、生産はジャブロー工廠で進められたものの、俗に「オーガス系」と呼ばれ、一時的に連邦軍の主力MSの座を占めた。

それだけに、次世代機のテストベッドとしても用いられており、いくつかの実験機が作られている。

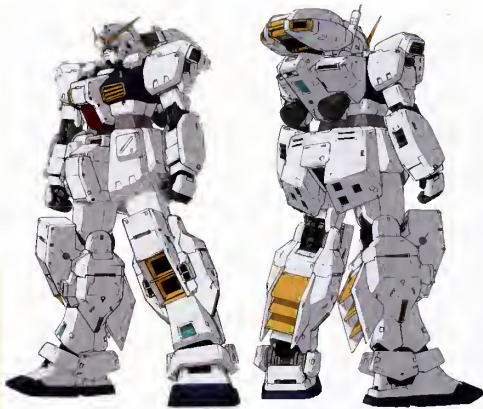
例えば、アナハイム・エレクトロニクス社は「GP計画(ガンダム開発計画)」を進める過程で、RX-78GP01-Fb用の新型推進システムのテストベッド機として、N型を母体とした改造機を用いている。RGM-79N-Fbの型式番号を与えられたこの機体はGP01-Fb用に開発されたユニバーサル・ブースター・ポッドを背部ランドセルに増設した上、脚部ユニットにも新型推進システムを搭載したもので、各種データ収集に貢献した。

官立工廠において、オーガス系の機体は、実験機の母体として利用されている。U.C.0084年に入って、コンバイトウ工廠が開発したRX-121(ガンダムTR-1 ハイズル)が、その代表例である。



RX-121

ガンダムTR-1 [ヘイズル]



■RX-121(ガンダムTR-1「ヘイズル」)
については不明な部分が多く、能力や
形状、カラーリングに至るまで確たる情
報は入手できていない。ここに示す白
基調のカラーは断片的な情報などから
「恐らくこうだったパターンもあったの
ではないか」という推測によって再現し
たものである。

大戦末期にジオン公国から奪取した宇宙要塞「ソロモン」は、すぐさま「コンベイトウ」と改称され、「ア・バオア・クー」攻略の足がかりとして利用された。戦後になっても、連邦宇宙軍はコンベイトウへの駐留を続け、宇宙における重要軍事拠点のひとつとしての運用を続けた。その利用範囲は、単なる艦隊戦力の寄港地としてだけでなく、ほどなくして官立兵器工廠も置かれている。拠点番号「12」を与えられた、コンベイトウ工廠の誕生である。

U.C.0083年末、コンベイトウはティターンズの活動拠点となり、付属する官立工廠もまた、同隊向けの装備類の開発、及び評価試験を担当することとなった。そうした状況下で、翌年にコンベイトウ工廠が建造した最初の実験機が、RX-121の型式番号を与えられたMSである。

当時、ティターンズにとって最新機種であったQ型をベースとし、様々な新型装備やデバイスを組み込んだこの機体は、改修に次ぐ改修を受け、刻々と姿を変えていった。しかしながら、内戦時の混乱やティターンズの解体によって記録が散逸してしまったため、その詳細については判明していない点も多い。

数少ない資料によれば、頭部ユニットにはデュアル・センサー

を搭載した、いわゆる「ガンダム・タイプ」の物を採用。1号機に関しては、胴体上面に肩関節部の動作を助ける、補助アクチュエーター・ユニットを装備し、腕部ユニットへの負荷に対応した。この処置により、より重量のある大型携行火器の運用を可能にしていたようだ。

さらに、脚部ユニットには、熱核ロケット・エンジンを内包した増加推進装置が、背部には可動式ブースター・ポッドが接続されたバックパック・ユニットがそれぞれ追加され、推力が大幅に増強されている。これにより、各種強化パーツによる重量増に対処した形だが、それゆえに操作性は低下し、本機の操縦には高い技術を要したとの証言も残されている。

以上のように、1号機が徹底した強化、改修が施されていたのに対し、予備機として製造された2号機は、頭部ユニットを交換する程度に留められていたという。ただし、2号機に関しても、本機の運用を担当したT3部隊(ティターンズテストチーム)の手によって実戦投入される過程で、様々な改修が行われており、補助アクチュエーター・ユニットの増設や、背部への「トライ・ブースター・ポッド」の搭載といった処置が行われたとされている。とはいえ、こうした装備の中には、実動データの収集を

Spec

諸元

型式:RX-121
機体高:18.1m
質量:42t
全機重量:65.4t(トライ・シールド・ブースター装束時)
ジェネレーター出力:1.420kW
スラスター推力:66,530kg
装甲材質:チタン合金セラミック複合材
(一部ルナ・チタニウム合金)
武装:ビーム・サーベル
多目的ランチャー(選択式)
ビーム・ライフル
シールド
シールド・ブースター
頭部VRLカンボッド



RX-121 ガンダムTR-1[ヘイズル]

RX-121 GUNDAM TR-1[HAZEL]



■前述のようにRX-121（ガンダムTRY-1
ヘイズル）には謎が多く、徹底的な改
修を受けた1号機は材料に「ヘイズル改」と
呼ばれていたとする資料もある。この
機体は実際に参加したという記録もあり、
その際にはディターンズカラーで軍
用化されていたとされる。



終えたり、あるいはテストの過程や戦闘において損壊するなどして取り外されることもあり、時期によって異なる仕様で運用されていたようだ。そのため、本書による再現図も、ある一時期の姿を写しとったものに過ぎないことを、ここに明記しておきたい。

〈ヘイズル〉は複数機が生産されたらしく、「ゼダンの門」に配備された機体も確認されている。またプランだけの機体もあり、3C型まで存在した。

一説には火星に渡ったネオ・ジオン軍残党が運用した機体も存在したといわれている。

オーガスタ系が残したもの

N型に端を発する戦後世代の「オーガスタ系」MSは、戦後世界において一定の成功を収めた。しかしながら、Q型が実験的に採用した「フレームと装甲を分離する」という思想が、やがてムービーブルームとして花開き、第二世代MSを生み出したことで、旧来型のセミ・モノコック機の系譜に属するオーガスタ系MSは行き場を失うことになる。

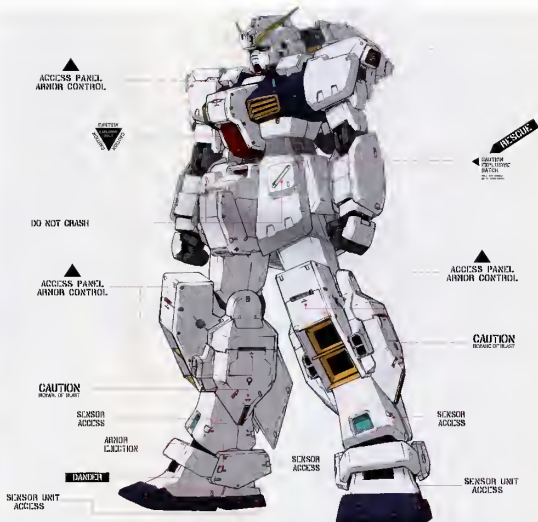
また、オーガスタ工廠自体も、同地に置かれたニュータイプ研究所のために、サイコミュ技術を導入した実験機の開発に注力するようになり、次第に汎用機開発から遠のいていった。これと入れ違うようにして、大量生産を前提とした汎用機開発においては、U.C.0080年代半ばから、月資本のアナハイム・エレクトロニクス社が存在感を強めていくことになる。

以上のような状況下で、同社の影響力拡大を嫌ったディターンズは、官立工廠のひとつであるコンベイトウ工廠にて、Q型を母体とした実験機を建造。後に、いくつかの量産検討用の試作機などが作られたが、いずれも大成することはなかった”。これらの機体は、各種デバイスや武装類の開発には貢献したものの、主力MSの座を射止めることはなく終わっている。一方で、RGM-79タイプそのものは、その生産数の多さゆえに墨玉され、幾度もの近代化改修を受けながら、U.C.0090年代まで運用され続けるのだった。

田中ベイトウ工廠の試作機
コンベイトウ工廠で生み出された量産検討用の試作機は、いずれも試作段階には至らなかったが、その一部の開発がニュー・ギニア工廠に移管されたとの言説もある。これの後に、RMS-154（ベイズム）として結実したといわれているが、どの程度の影響があったかは定かではない。ちなみに、RMS-154は、RGM-79Qの直系の子孫というよりは、グリス丁重製RX-178の改良型という位置づけの機体であったことはいうまでもないことだろう。

CAUTION/MODEX : RX-121

RX-121 コーシオン/モデックス

ACCESS PANEL
ARMOR CONTROL

DO NOT CRASH!

ACCESS PANEL
ARMOR CONTROLACCESS PANEL
ARMOR CONTROLCAUTION
BOMB OF BLASTCAUTION
BOMB OF BLASTSENSOR
ACCESSSENSOR
ACCESSARMOR
CAUTION

DANGER

SENSOR UNIT
ACCESSSENSOR UNIT
ACCESS

爆弾バレット位置

DANGER

危険(接近注意)

SENSOR
ACCESSセンサー素子
警備用アクセスハッチインターク
避難しないことCAUTION
BOMB OF BLAST噴射口あり
近づくなCOOLANT
VENT

冷却排出口

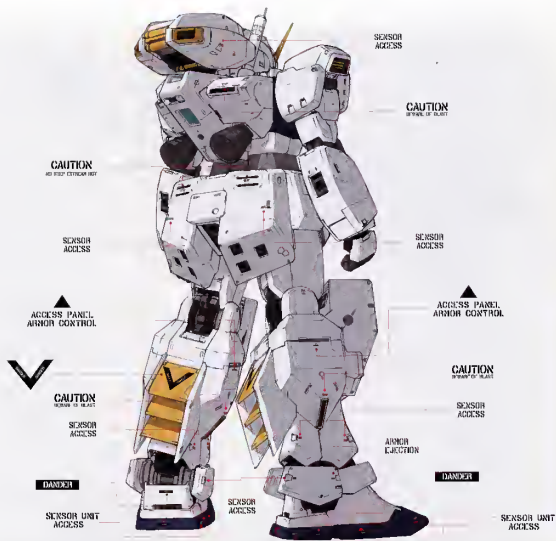


噴出し注意



レスキューパネル
1. ボタンを押してパネルを開く
2. ハンドルを引くとキャノピーを投棄する

ACCESS PANEL
SHOCK ABSORBERショックアブソーバー
整備用アクセスハッチ



NO STEP

進むな(進入注意)

**KEEP
CLEAR**

動作を阻害しないように

CAUTION

注意喚起



地球連邦宇宙軍記章



地球連邦陸軍記章



地球連邦軍記章

EFSF



ディターンズ記章

203

モデックスナンバー

0123456789

0123456789

ARMAMENTS

RGM-79装備武装

BOWA BR-M-79F-1

ビーム・スプレーガン

Spec

諸元

型式番号: BOWA BR-M-79F-1

装弾数: 1チャージあたり12発

出力: 1.5MW

開発: ボウワ社



MS用携行ビーム兵器として、鳴り物入りで登場したBR-M-79C-1ビーム・スプレーガンであったが、特に地上での運用時には問題が顕出していた。大気によるビームの減衰に悩まされ、天候によっては有効射程圏内でも、敵MSに致命打を与えられないケースが報告されていたのである。これを問題視したボウワ社が試作したのが、この79F-1型であり、同時期にロールアウトしたRGM-79F向けに供給された。バレル部の構造を変更しているほか、ビーム加速器を兼ねたボルト状のバッテリーバックを追加搭載し、シングルショット・モードにおけるビームの収束率を高めている。以上の処置は一定の成果を挙げたようで、後の79F-3A型ビーム・ガンに引き継がれてゆくこととなる。



BOWA BR-M-79C-2D

ビーム・スプレーガン

Spec

諸元

型式番号: BOWA BR-M-79C-2D

装弾数: 1チャージあたり16発

出力: 1.5MW

開発: ボウワ社

左記の79F-1型がバッテリーバックの追加によるビーム収束率（於シングルショット・モード）の向上を目指したのに対し、同時期に開発された79C-2型は79C-1型のブラッシュアップを図る方向で設計された。ビーム加速器を伸長するために銃身が長くなっている他、キャリングハンドルを排除して射撃専用センサーを新たに搭載。これにより、機体の頭部センサーに頼っていた射撃管制を兵装側にも補助させることが可能となり、命中精度が向上したようだ。さらに79C-2型の中でも、Dの末尾記号が与えられたモデルには、銃身を覆うようにしてセラミックス製のカバーが取り付けられている。これは防塵カバーであり、砂漠などの乾燥地帯での運用を考慮しての追加装備であった。



YHI YF-RC180

レーザキャノン

Spec

諸元

型式番号: YHI YF-RC180

装弾数: 4~8発(標準)

開発: ヤシマ重工

初期のビーム兵器には、大気によるビームの減衰問題が常について回った。そうした状況下でヤシマ重工が提案したのが、海上艦艇の艦砲として利用されていたレーザキャノンを転用する計画であった。給弾装置は新規に設計する必要があったものの、それ以外の基礎構造を徹底して既存兵器から流用することで、極めて短期間で開発が完了したとされる。

YHI YF-RC155

レールキャノン

Spec

機元

型式番号 YHI YF-RC155

口径 155mm

装弾数 4~6発(推定)

開発 ヤシマ重工

F/FD



YF-RC180に続く形で開発された、MS用携行レールキャノン。口径を180mmから、61式戦車の主砲弾を転用できる155mmに減じることで、二回りほどコンパクトになり、運用の利便性が向上している。また、小口

径化に伴う火力低下を補うために、四連装ミサイル・ランチャーを銃身下部に搭載。この他、アタッチメントとしてはスーパーナバーム・ランチャーや、八連装小型ミサイル・ランチャーなどもマウント可能であったという。

BOWA BG-M-79F-3A

ビーム・ガン

Spec

機元

形式番号 BOWA BG-M-79F-3A

装弾数 1チャージあたり12発

出力 1.6MW

開発 バンク社

F/FD



79F-2型の後継として開発された装備。ボトル状のバッテリーパックを本体後部上方に配するなど構造を見直し、重量配分を最適化したことで、射撃時の安定性が向上している。また、ビーム弾の出力、収束率、速射性が向上したことで、新たに制定されたビーム・ガンのカテゴリに加えられ、型式も「BG」へと改められた。

HWF GMG MG79-90mm

ジム・マシンガン

Spec

機元

型式番号 HWF GMG-MG79-90mm

口径 90mm

装弾数 20発

地上有効射程距離 5300m

弾頭 徹甲榴弾SU-6、対艦徹甲弾FWS-A、成形炸薬弾FWS-B

開発 ホリフィールド・ファクトリー・ウェポンズ社

F/FD



大気圏内外問わずに幅広く運用されたMS用標準兵器。口径は90mmと初期型の100mmマシンガンと比べて小さいが、新型炸薬を用いることで砲口初速は増し、公国軍製MSの装甲に対し十分な貫通力を発揮した。また、90mm口径弾は、当時の連邦陸軍が戦車両用採用していた標準弾でもあり、兵站の面でも利点が多かったようだ。



YHI YF-MG100

量産試作型100ミリ ジム・マシンガン

Spec

機元

量産試作型100ミリ ジム・マシンガン

型式番号 YHI YF-MG100

口径 100mm

装弾数 28発

地上有効射程距離 5500m

弾頭 徹甲榴弾YCC-4、対艦徹甲弾YAS-L2、成形炸薬弾YTA-1

開発 ヤシマ重工

FP

FC

ヤシマ重工製の試作型MS携行兵器。ボックス型マガジンを持つコンパクトなデザインが特徴的。初期のビーム兵器が大气による減衰問題を抱えていたこともあり、特に陸軍系部隊では重宝された。結果として一時は生産中止が決定されながらも、根強い支持から再生産が行われており、終戦まで運用を続けられている。しかし、戦後の適正配備計画によって、90mm口径弾への統一が推し進められ、姿を消すこととなった。

HWF GMG MG82-90mm

ジム・ライフル

Spec

種元	型式番号: HWF GMG/MG79-90mm
N	口径: 90mm
H	弾頭数: 20発
	地上有効射程距離: 5300m
	弾頭: 徹甲弾SU-J6、対艦戦車弾AS-7、成形炸薬弾F-W
	開発: ホリフィールド・ファクトリー・ウェポンズ社



ホリフィールド・ファクトリー・ウェポンズ社が、システム・ウェポン構型に基づいて設計した対MS用ライフル。MG79型マシニングをベースに、バレルを延長するなどの改良を加えられている。戦後開発のRGM-79N(ジム・カスタム)やRGM-79Q(ジム・クウェル)の標準兵装として採用されたことで、誤達数を大いに伸ばした。結果、U.C.0090年台末期に至るまで、長く使用され続けることとなる。

BOWA BR-M-79C-1

ビーム・スプレーガン

Spec

種元	型式番号: BOWA BR-M-79C-1
F	弾頭数: 1チャージあたり16発
F/ED	出力: 1.4MW
	開発: ボウワ社



ボウワ社が設計・開発を担当したMS用携帯ビーム兵器。「ビーム・スプレーガン」の愛称で親しまれ、ジム・ファミリー機の標準兵装として活躍した。本装備の最大の利点は、何と言っても1250kw級のジェネレーターでも、ドライブ可能な点である。さすがに威力の面では、ビーム・ライフルに劣ったが、出力が低かった初期型のRGM-79でも安定して運用できた点は評価できる。ただし、大気圏内では大気による減衰問題から、実体弾兵装に遅れを取る形となった。

BOWA BR-M-79C-3

ビーム・スプレーガン

Spec

種元	型式番号: BOWA BR-M-79C-3
Q	弾頭数: 1チャージあたり16発
	出力: 1.5MW
	開発: ボウワ社



標準仕様のビーム・スプレーガンとしては、3世代目にあたるモデル。79C-2型で試されたセンサーシステムが、思いの外、好評だったことを受けて、その設計を踏襲。さらに、ビーム弾の出力向上や有効射程範囲の拡大などを成し遂げているが、技術的な成熟度が上がったこともあって、全体的に一回り小さなサイズへと小型化を図ることに成功している。

大戦末期より生産が始まったRGM-79C(ジム改)の標準装備とされ、U.C.0080年代中頃まで製造が続けられた。



BOWA BR-S-85-C2

ビーム・ライフル

Spec

種元	型式番号: BOWA BR-S-85-C2
Q	弾頭数: 1チャージあたり12発
	出力: 1.9MW
	開発: ボウワ社
	改造: コンバットウエポン・タイタンズ開発部

戦後の適正配備計画に則って、ボウワ社が設計した汎用ビーム・ライフル。戦中開発のBR-S-85-L3スナイパー・ビーム・ライフルをベースとしつつも、戦後のエネルギーCAP技術の向上に伴い、大幅な小型化に成功している。U.C.0080年代中盤に入ると、既存のビーム・スプレーガンの生産ラインは、完全にB5-C2型へと切り替えられ、Eバック方式のビーム兵器が登場するまでの数年間に、かなりの数が製造されることとなった。

NFHI GMG-TYPE2

ジム・マシンガン

Spec

種元	型式番号: NFHI GMG-TYPE2
FP	口径: 90mm
FC	装弾数: 35発
	地上有効射程距離: 4500m
	弾頭: 徹甲弾MNL-3、成形炸薬弾NFHT-2、GA3グレネード
	開発: ノーフォーク産業



ノーフォーク産業が、HWF社のMG79型に対抗して開発したMS用携行装備。口径は90mmでありMG79型と同様だが、装弾数は35発と1.5倍に達する。その分、長くなったストレート式のマガジンを、前方に配してグリップ代わりとする設計を採用したものの、それだけにバレル長が稼げず初速、集弾率が低下。かくして不採用の憂き目にあったが、後に防寒装備を追加したモデルが作られ、一定数が寒冷地用として供給されている。

BLASH XBR-M-79E

ビーム・ライフル

Spec

種元	型式番号: XBR-M-79E (PB R-0079/A12 S-0000204)
FP	装弾数: 1チャージあたり12~15発
FC	出力: 1.9MW
	開発: ブラッシュ社

連邦陸軍からの要請を受けたブラッシュ社が、主に大気圏内での運用を想定して試作したビーム・ライフル。RX-78用に開発されたXBR-M-79-07Gの構造を踏襲しつつ再設計したもので、M-79C-1型ビーム・スプレーガンの性能に不満を持っていた陸軍系部隊にとって、大望の「使える」ビーム兵器として歓迎された。なお、センサー・ユニットはライセンス供与を受けたボウワ社製の物を採用している。



HWF GR MLR79-90mm

ロングバレル・ライフル

Spec

種元	型式番号: HWF GR-MLR79-90mm
FP	装弾数: 120発
FC	地上有効射程距離: 6000m
Q	弾頭: 徹甲弾GUJ-a (55.6mm口径)
	開発: ホリフィールド・ファクトリー・ウェポンズ社



HWF社製のロングバレル・ライフル。MG79型の基礎構造を流用しつつ、フローティングタイプのバレルを装着。延長された有効射程を活かすべく、銃口下部にはパイロット(安定用2脚)を配置するなどして、射撃時の安定性を向上させた結果、優秀な狙撃ライフルとしての地位を得た。

戦後になると狙撃ライフル分野においても、ビーム兵器全盛の時代となったが、それでも大気圏内では、雨天時など環境次第でビームの減衰が許容を超えるケースがあった。そこで、ティターンズ系の特殊部隊などでは、第二の選択肢としてMLR79型ロング・ライフルが引き続き運用されたようである。

NFHI RGM-M-Sh-AGD

対MS戦用シールドII

Spec

型式番号・NFHI RGM-M-Sh-AGD

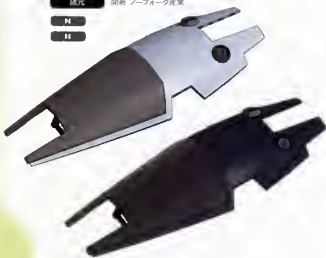
材質・チタン・セラミック複合材

開発・ノーフォーク産業

価元

N

H



運動エネルギーの軽減や跳弾を期待して、表面を曲面にしたチタン・セラミック複合材製シールド。下部はクロー状の整形されており、地面に突き刺すことで設置できたほか、近接戦闘において一種の刺突兵器として利用することも可能であった。なお、装甲表面には熱容量を増すための、耐ビーム・コーティング処理が施されるなど、ビーム兵器対策が本格的に標準仕様に盛り込まれている点も、特筆に値するだろう。

FADEGEL RGM-M-Sh-003

対MS戦用シールド

Spec

型式番号・FADEGEL RGM-M-Sh-003 (007)

材質・ルナ・チタニウム合金

開発・フェードゲル社

価元

F

R/D



RGM-M-Sh-007

RX計画に合わせて設計されたMS用シールド。装甲材には、剛性に優れたルナ・チタニウムを採用。そのため、公国軍機の120mm弾を至近距離から受けても、ほぼ完全にシャットアウトすることが可能であった。ただし、耐ビーム・コーティングは標準仕様に含まれておらず、その技術が確立しはじめた大戦末期から、順次、適応させられることとなった。後に装甲材を、チタン・セラミック複合材に変えたSh-007型などが登場している。



BLASH HB-L-03/N-STD

ハイパー・バズーカ

Spec

価元

型式番号・BLASH HB-L-03/N-STD

口径・380mm/270mm/75mm

長射程 5発

弾薬・高角弾、対空榴弾、他

開発・ブラッシュ社

F

R/D

ブラッシュ社が開発したMS用携行支援火器。主に宇宙艦艇や人工衛星、陸上戦艦など、戦闘速度の遅い目標や、トーチカを始めとする基地施設を攻撃するために開発された。砲弾をバグゲージングする特殊な技法を用いることで、75mm～380mmの様々な弾を発射することが可能であり、その多目的性は高く評価された。図には、射撃管制補助用の可動式大型センサー・ユニットが搭載されているが、後にこれをオミットしたタイプや、弾倉を交換可能のように改裝したモデルも登場している。

YHI RGM-S-Sh-SP

スバイク・シールド

Spec

造元

 型式番号:YHI RGM-S-Sh-SP
材質:チタン・セラミック複合材
開発:ヤシマ重工

FP

FC



RGM-S-Sh-WFマルチプルシールドを、格闘戦用のRGM-79FP(ジム・ストライカー)向けに改良したモデル。近接戦闘用の打突兵器として、新たにバイルドライバーを2本増設している。

YHI RGM-S-Sh-BC

クロー・シールド

Spec

造元

 型式番号:YHI RGM-S-Sh-BC
材質:チタン・セラミック複合材
開発:ヤシマ重工

FP

FC



RGM-S-Sh-WFマルチプルシールドに、独立して稼働する3本の大型クローを装備したもの。対象物を「掴む」ことができるが、重量があるだけに振り回され兼ねず、意のままに操るには熟練を要したという。

YHI RGM-S-Sh-WF

マルチプルシールド改

Spec

造元

 型式番号:YHI RGM-S-Sh-WF
材質:チタン・セラミック複合材
開発:ヤシマ重工

F

F/FO



チタン・セラミック複合材製のRGM-S-Sh-WFは、軽量で取り回しが良好な反面、耐弾性には難があり、損傷することも多かった。そこで現地改修で装甲厚を増したのがこのタイプである。



BLASH HB-L-07/N-STD

ハイパー・バズーカ

Spec

造元

 型式番号:BLASH-HB-L-07/N-STD
口径:380mm/360mm
装弾数:7(5)発
弾頭:過電磁弾、対電磁弾、他
開発:ブラッシュ社

N

Q

戦中に開発されたBLASH HB-L-03/N-STD/ハイパー・バズーカの後継として生み出された支援火器。完全密閉式のカートリッジを採用したことで、弾倉の交換が容易になっている点が最大の特徴。さらに、ポウウ社製の固定式センサー・ユニットを採用したことで、射撃精度も向上している。U.C.0080年代中頃から導入が進み、グリプス戦役ではティターンズ・エウゴの両陣営で多用された。非常に頑強で保守整備も容易であり、記録によれば、U.C.0090年代末まで運用され続けたという。



MASTER ARCHIVE MOBILESUIT RGM-79 GM

Vol.2

STAFF

Mechanical Illustrations

堀川 虎正 Kyoichi Takagawa

Writers

大加 千尋 Chihiro Owako
大里 元 Gen Osato
榎 登人 Masahito Sakaki
横村 空 Kuu Hashimura

3D CG Modeling Works

ハギハラシンイチ Shinichi Hagihara (number4 graphics)
大里 元 Gen Osato
河津 基範 Kiyonori Kawatsu
吉野 英武 Etsu Yoshino

3D CG Direction

ハギハラシンイチ Shinichi Hagihara (number4 graphics)

SFX Works

GA Graphic編集部 GA Graphic

Cover & Design Works

ハギハラシンイチ Shinichi Hagihara (number4 graphics)
河津 基範 Kiyonori Kawatsu

Editors

佐藤 元 Hajime Sato
小芝 龍馬 Ryoma Koshima
村上 光 Hajime Murakami

Adviser

椎島 敏人 Agito Makishima

Special Thanks

株式会社サンライズ SUNRISE Inc

※背景写真提供

sammy sammy
佐藤 元 Mitsuru Sato
長瀬 奈津子 Natsuko Nagase

※図版彩色協力

有村 寛 Hiroshi Anmura
吉野 英武 Etsu Yoshino

■マスターアーカイブ モビルスーツ RGM-79ジム Vol.2

2015年4月10日 初版発行

編集 ホビー編集部

製作 GA Graphic

発行人 小川 淳

印刷 興明印刷株式会社

発行 SBクリエイティブ株式会社

〒106-0032 東京都港区六本木2-4-5

営業部 TEL 03-5549-1201

©創通・サンライズ

©SB Creative Corp

ISBN 978-4-7973-7123-0

Printed in Japan

<http://masterfileblog.jp/>

本書をお読み頂いた感想、ご意見を上記URLからお寄せください。

本書の無断複製・転写・転載を禁じます。

落丁・乱丁本は小社販売にてお取り替えいたします。定価はカバーに記載されています。

SB Creative

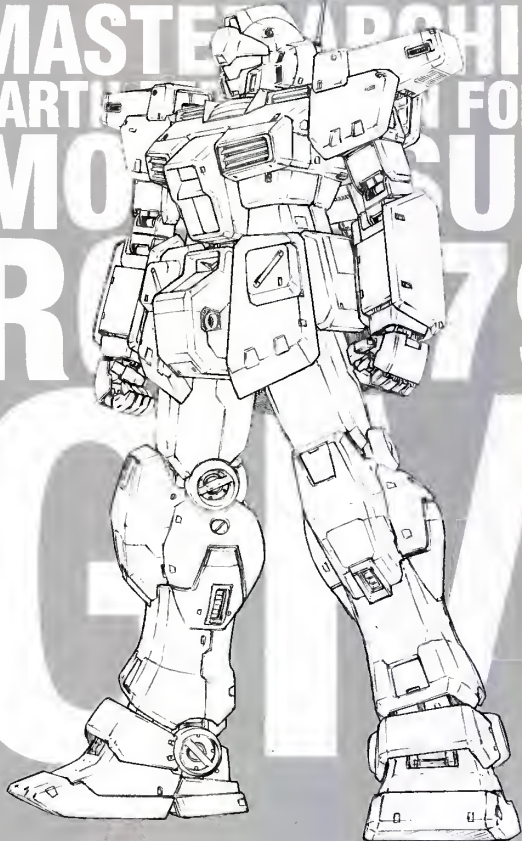
GA Graphic



マスターアーカイブ モビルスーツ RGM-79 ジム Vol.2

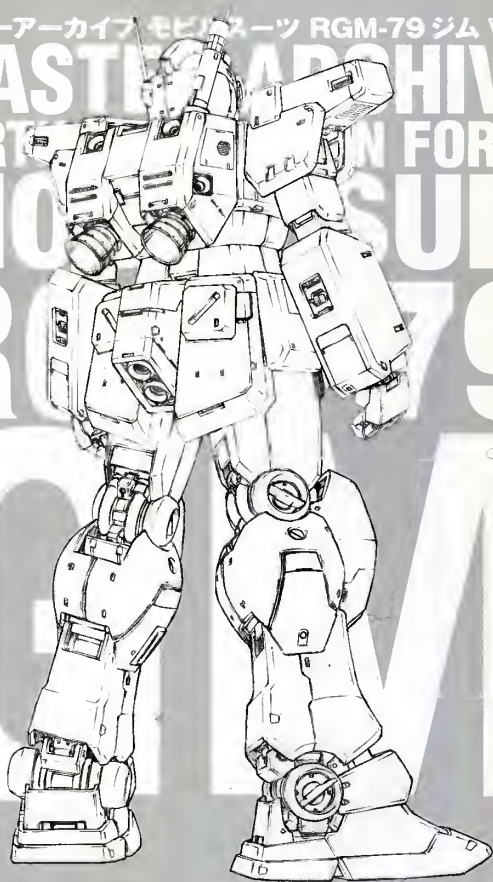
MASTER ARCHIVE EARTH FORCES MOBILE SUIT RGM-79

GA Graphic

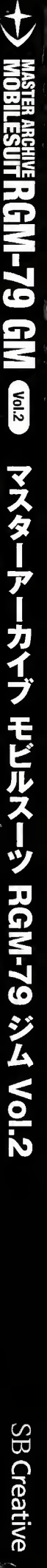


マスターアーカイブ モビルスーツ RGM-79 ジム Vol.2

MASTER ARCHIVE EARTH DEFENSE FORCE MOBILE SUIT RGM-79



GxIGraphic



マスターアーカイブ モビルスーツ RGM-79 ジム Vol.2

MASTER ARCHIVE MOBILESUIT EARTH FEDERATION FORCE RGM-79 GM

Vol.2

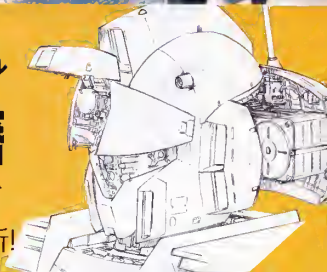
Graphia



宇宙世紀に実在するモビルスーツを
テーマに、詳細なイラストとビジュアル
そして膨大な考察記事で紐解く

MS研究書籍

「マスターアーカイブ」RGM-79シリーズ第二弾は、
強化・重装甲タイプのGMの
運用やバリエーションを徹底解析!



ISBN978-4-7973-7123-9

C0076 ¥2600E



9784797371239

定価 本体2,600円 +税



1920076026003

SB Creative

創 造 サンライズ



「マスターアーカイブ」シリーズ好評発売中!



マスターアーカイブ モビルスーツ MS2-006 Zガンダム
ISBN 978-4-7973-7005-9





マスターアーカイブ モビルスーツ RX-78GP01 ゼフィランサス
ISBN 978-4-7973-7367-7



マスターアーカイブ モビルスーツ RX-78 ガンダム
ISBN 978-4-7973-6618-1



マスターアーカイブ モビルスーツ RGM-79 ジム
ISBN 978-4-7973-5904-6


MAXIMIZE
MOBILE **RESULT**
PGM-79GM
Vol.2

Next-Gen-For-You
Pro-Active
2012
SB Creative

マスターアーカイブ モビルスーツ RGM-79 ジム Vol.2

MASTER ARCHIVE MOBILESUIT

EARTH FEDERATION FORCE

RGM-79 GM

Vol.2

GX Graphic



EARTH FEDERATION FORCE
MOBILESUIT
RGM-79 GM

ISBN978-4-7973-7123-9

C0076 ¥2600E



9784797371239

定価 本体2,600円 +税



1920076026003

SB Creative

© 創造・サンライズ









Il robot è stato progettato per essere in grado di sopravvivere a temperature estreme, da -150 a +120 gradi Celsius, e di resistere a pressioni fino a 10 atmosfere. È stato anche progettato per essere in grado di sopravvivere a radiazioni fino a 10 Mrad. Il robot è stato progettato per essere in grado di sopravvivere a tutte le condizioni ambientali che si possono trovare sulla Luna.















Il mecha è un robot di guerra, un'arma mobile, un mezzo di combattimento. È un'arma che può essere usata in modo diverso, a seconda delle circostanze. Può essere usato per difendere, per attaccare, per esplorare, per trasportare, per comunicare. È un'arma che può essere usata in modo diverso, a seconda delle circostanze. Può essere usato per difendere, per attaccare, per esplorare, per trasportare, per comunicare.



FROM PRODUCTION TO ASSEMBLY LINE

PRODUCTION OF RGM-79 GM SERIES

FROM PRODUCTION TO ASSEMBLY LINE
GUNDAM PRODUCTION TO ASSEMBLY LINE
GUNDAM PRODUCTION TO ASSEMBLY LINE
GUNDAM PRODUCTION TO ASSEMBLY LINE

THE GUNDAM PRODUCTION TO ASSEMBLY LINE
GUNDAM PRODUCTION TO ASSEMBLY LINE
GUNDAM PRODUCTION TO ASSEMBLY LINE
GUNDAM PRODUCTION TO ASSEMBLY LINE
GUNDAM PRODUCTION TO ASSEMBLY LINE
GUNDAM PRODUCTION TO ASSEMBLY LINE
GUNDAM PRODUCTION TO ASSEMBLY LINE
GUNDAM PRODUCTION TO ASSEMBLY LINE

[illegible]

© 2004 Blackwell Publishing Ltd, *Journal of Internal Medicine* 255: 105–112

在 2008 年 12 月 1 日以前, 中国居民企业向境外关联方支付利息, 凡符合下列条件的, 其利息支出准予税前扣除: (1) 按照独立企业之间的交易原则支付; (2) 支付给境外关联方的利率水平不超过按照金融企业同期同类贷款利率计算的数额; (3) 支付给境外关联方的利率水平不超过按照债资比例计算的数额; (4) 支付给境外关联方的利率水平不超过按照债资比例计算的数额。

[illegible]



100

[illegible][illegible][illegible]

1. 已知函数 $f(x) = \frac{1}{x}$ ， $g(x) = \frac{1}{x^2}$ ，求 $f(x) + g(x)$ 的定义域。



1000

[illegible][illegible][illegible][illegible]





